

富田林埋蔵文化財調査報告 26

平成 6 年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

1995・3

富田林市教育委員会

『平成6年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』正誤表

頁	行	誤	正
P. 62	L. 28	草摺部分が出土しているが、	人物埴輪の一部が出土しているが、

はじめに

富田林市は、中心を石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれたまちです。南部は特に自然が残り、西部丘陵地は計画的な市街地として整備され、中央部の石川によって形成された平野部には古くから人々の営みが行われていたところです。

富田林市域の中でも、中央平野部は特に遺跡の多く存在する地域で、毎年数多くの発掘調査を実施しています。

本書は、平成6年度に実施しました国庫補助事業の発掘調査概要報告書です。なかでも、従来、弥生時代の集落遺跡として周知されてきた喜志遺跡から、弥生時代の遺物に加え、まとまった埴輪が出土し、石川中流域に埋没した古墳が存在することを物語るものとして注目されています。

最後になりましたが、調査および本書の刊行にご協力いただきました関係各位に厚く感謝いたします。

平成7年3月

富田林市教育委員会

教育長 清水富夫

例　　言

1. 本書は、富田林市教育委員会が平成6年度に、国庫および府費の補助を受け、実施した緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課、中辻亘・今西淳・栗田薰を担当者とし、平成6年4月1日に着手し、平成7年3月31日に終了した。
3. 本書の執筆は、各々文末に記す者があたった。本書の編集は中辻亘の指導のもとに栗田薰と田川友美が行った。
4. 本書で使用した方位と標高は、すべて磁北と東京湾標準潮位で表示した。
5. 調査の実施および本書の作成にあたっては、下記の諸氏に協力を得た。ここに記して感謝を表します。
北野耕平(神戸商船大学教授・富田林市文化財調査会委員)、山中一郎(京都大学)、森山義博(大阪府立富田林高等学校教諭)、福永信雄(東大阪市立郷土博物館)、西口陽一、小浜成(大阪府教育委員会)、中西和子(河内長野市教育委員会)、西山昌孝(千早赤坂村教育委員会)、笠井敏光(羽曳野市教育委員会)

発掘調査参加者

〈調　査　員〉 田川友美・楠木理恵

〈調査補助員〉 平方扶左子・高木伸子・瀬戸哲也・湯元　剛・川合和代

〈作　業　員〉 中川正博・坂本竹雄・森　幸彦・増原賢志・西野繁太郎
岩瀬訓子・山本節子

本文目次

はじめに

例　　言

I	平成6年度調査概要	1
II	毛人谷遺跡	2
	1. 層序	2
	2. 遺構と出土遺物	3
	3. まとめ	10
III	喜志遺跡	11
	1. 層序	11
	2. 遺構	12
	3. 出土遺物	15
	3-1 弥生時代の出土遺物	15
	1 弥生土器	15
	2 石器	18
	3-2 古墳時代の出土遺物	32
	1 墳輪	32
	3-3 平安時代の出土遺物	40
	1 土壙 1 出土土師器	40
	3-4 近世の出土遺物	41
	1 銭貨	41
	2 土人形	41
	4. まとめ	42
	4-1 弥生土器の所属時期とその特色	42
	4-2 整地層出土のサヌカイト製剝片の属性分析	44
	4-3 石川中流域、段丘上の埋没古墳	56
IV	中野遺跡	71
	1. 層序	72
	2. 遺構	72
	3. 出土遺物	77
	4. まとめ	84

挿 図 目 次

図1	毛人谷遺跡発掘調査地位置図	2
図2	毛人谷遺跡調査区位置図	3
図3	第1トレンチ(第2面)平面図・断面図	4
図4	出土土器	4
図5	第2トレンチ平面図・断面図	5・6
図6	第3・5トレンチ平面図・断面図	7・8
図7	第5トレンチ断面図	9
図8	出土石器	9
図9	喜志遺跡発掘調査地位置図	11
図10	喜志遺跡調査区位置図	12
図11	西壁断面図	13
図12	遺構平面図	14
図13	弥生土器	16
図14	弥生土器	17
図15	基部形態別石鎚の長幅関係	19
図16	基部形態別石鎚の長幅示数と厚幅示数の相関	19
図17	石鎚	20
図18	石鎚	21
図19	石槍	23
図20	打製石剣	24
図21	打製石剣	25
図22	打製石剣	26
図23	石錐, ベック, ノッチ削器, 石小刀	27
図24	削器	29
図25	削器, 楔	30
図26	石包丁, 砥石	31
図27	円筒埴輪	33
図28	円筒埴輪	35
図29	朝顔形埴輪	36
図30	形象埴輪	37
図31	形象埴輪	39

図32 土壌1出土の皿,小皿	41
図33 銭貨	41
図34 土人形	41
図35 平面形と形態分類	46
図36 中央断面形と形態分類	47
図37 縦断面形と形態分類	47
図38 打撃角と形態分類	48
図39 打撃角と打面形態	48
図40 打撃角と打面平面形	49
図41 打撃角と打面縁部形	49
図42 打撃角と打面の傾き	50
図43 打面形態と最大長	50
図44 打面形態別の剥片の形態分類	51
図45 打面形態別の打点位置の分布	52
図46 打面の傾きと形態分類	52
図47 打面の傾きと平面形	53
図48 バルブの発達度と最大長	53
図49 打面形態とバルブの発達度	54
図50 原面残存率と最大長	54
図51 喜志遺跡(K S 86地区)出土の埴輪	58
図52 喜志遺跡周辺の埴輪出土土地点と小字名の分布状況	59
図53 中野遺跡周辺の埴輪出土土地点と小字名の分布状況	61
図54 甲田南遺跡周辺の埴輪出土土地点と小字名の分布状況	63
図55 「川西古墳群」の墓域構成	64
図56 中野遺跡発掘調査地位置図	71
図57 中野遺跡発掘調査区位置図	72
図58 遺構平面図・断面図	73・74
図59 出土土器	79
図60 出土石器	81

表 目 次

表1 発掘届出件数	1
表2 発掘調査一覧表	1

表3 土壌・ピット一覧表	10
表4 出土石器一覧表	18
表5 石核の単純最大長と単純最大幅の相関	31
表6 最大長と最大幅の相関	45
表7 長幅示数と厚幅示数の相関	46
表8 平面形と形態分類	46
表9 中央断面形と形態分類	47
表10 縦断面形と形態分類	47
表11 打撃角と形態分類	48
表12 打撃角と打面形態	48
表13 打撃角と打面平面形	49
表14 打撃角と打面縁部形	49
表15 打撃角と打面の傾き	50
表16 打面形態と最大長	50
表17 打面形態別の剥片の形態分類	51
表18 打面形態別の打点位置の分布	52
表19 打面の傾きと形態分類	52
表20 打面の傾きと平面形	53
表21 バルブの発達度と最大長	53
表22 打面形態とバルブの発達度	54
表23 原面残存率と最大長	54
表24 垂直割れと最大長	55
表25 喜志遺跡出土弥生土器観察表	67
表26 喜志遺跡出土石器観察表	68-69
表27 喜志遺跡出土埴輪観察表	70
表28 中野遺跡ピット一覧表	76
表29 中野遺跡出土土器観察表	85
表30 中野遺跡出土石器観察表	85

図 版 目 次

図版1 毛人谷遺跡(E T94)調査地全景航空写真 南から

図版2 (上) E T94 第1トレンチ全景 北東から

(下) E T94 同 上 東から

- 図版3 (上) E T94 第1トレンチ北断面 南西から
(下) E T94 第1トレンチ北断面 遺物出土状況 南から
- 図版4 (上) E T94 第2トレンチ全景 北から
(下) E T94 第2トレンチ河道2断面 東から
- 図版5 (上) E T94 第3トレンチ全景 北から
(下) E T94 同 上 南から
- 図版6 (上) E T94 第3トレンチ土壤2全景 西から
(下) E T94 第3トレンチピット群 南から
- 図版7 (上) E T94 第3トレンチ河道2全景 南から
(下) E T94 第3トレンチ河道2断面 西から
- 図版8 (上) E T94 第3トレンチ下層流路断面 南西から
(下) E T94 出土遺物
- 図版9 喜志遺跡(KS94)調査地周辺航空写真 東から
- 図版10 (上) KS94 溝1 蓋形埴輪出土状況 北から
(下) KS94 溝1 墓輪出土状況 西から
- 図版11 (上) KS94 溝1 遺物出土状況 西から
(下) KS94 溝1 墓輪出土状況 東から
- 図版12 (上) KS94 溝1 人物埴輪出土状況 南から
(下) KS94 同 上 北から
- 図版13 (上) KS94 溝1断面 東から
(下) KS94 溝1全景 東から
- 図版14 (上) KS94 土壌1 土師器小皿出土状況 北から
(下) KS94 土壌1断面 北から
- 図版15 (上) KS94 溝2南北断面 北東から
(下) KS94 溝2東西断面 北から
- 図版16 (上) KS94 溝2南北トレンチ全景 南から
(下) KS94 溝2東西トレンチ全景 西から
- 図版17 (上) KS94 調査区全景 北から
(下) KS94 調査区南部全景 西から
- 図版18 (上) KS94 弥生土器(広口壺, 無頬壺)
(下) KS94 弥生土器(高杯, 鉢)
- 図版19 (上) KS94 弥生土器(器台, 蜻壺, 台部)
(中) KS94 弥生土器(甕)
(下) KS94 弥生土器(土製品)

- 図版20 (上) K S94 石鎌(A面)
(下) K S94 石鎌(B面)
- 図版21 (上) K S94 石鎌(A面)
(下) K S94 石鎌(B面)
- 図版22 (上) K S94 石槍(A面)
(下) K S94 石槍(B面)
- 図版23 (上) K S94 打製石剣(A面)
(下) K S94 打製石剣(B面)
- 図版24 (上) K S94 石錐, ベック, ノッチ削器, 石小刀(A面)
(下) K S94 石錐, ベック, ノッチ削器, 石小刀(B面)
- 図版25 (上) K S94 削器, 楔(A面)
(下) K S94 削器, 楔(B面)
- 図版26 (上) K S94 石包丁, 砥石(A面)
(中) K S94 石包丁, 砥石(B面)
(下) K S86 円筒埴輪
- 図版27 K S94 円筒埴輪, 朝顔形埴輪
- 図版28 K S94 人物埴輪(頭部, 肩部, 手, 衣装), 鳥形埴輪
- 図版29 (上) K S94 形象埴輪(衣装, みずら, 岐庇付冑, 鞘, 盾, 馬, 蓋)
(下) K S94 蓋形埴輪
- 図版30 (上) K S94 土壇1出土土師器, 銭貨, 土人形
- 図版31 (上) N N94-1 A地区全景 南西から
(下) N N94-1 A地区全景 北東から
- 図版32 (上) N N94-1 B地区北半全景 北から
(下) N N94-1 B地区南半全景 南から
- 図版33 (上) N N94-1 C地区西半全景 北西から
(下) N N94-1 C地区東半全景 西から
- 図版34 (上) N N94-1 C地区東端溝4 南から
(下) N N94-1 C地区東半南壁断面 北東から
- 図版35 N N94-1 出土遺物(弥生土器, 須恵器, 青磁, 韓式系土器, 統一新羅系土器, 石皿, 石器, 砥石)
- 図版36 N N94-1 出土遺物(土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 瓦)

I 平成6年度調査概要

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
発掘	4	3	2	1	2	4	3	2	1	0	1	4	27
立会	2	0	7	3	5	4	4	1	3	4	6	6	45
復工事	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
発見届	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
計	6	3	9	4	7	8	7	3	4	6	7	10	74

表1 発掘届出件数（平成7年3月15日まで）

No.	調査期間	遺跡名	位置	申請書	規模 (m ²)	用途	備考
1	6. 4. 12	錦織遺跡	錦織2104-3	左近惣一	165	個人住宅	浄化槽部分1.5×2 mを人力掘削 造構・遺物なし
2	6. 4. 20	中野遺跡	中野町2丁目 536-1	西條 勇	200	個人住宅	浄化槽部分1×2 mを人力掘削 ビットを検出
3	6. 4. 25	甲田遺跡	甲田470-2	石田光司	294	個人住宅	浄化槽部分2.5×1 mを人力掘削 造構・遺物なし
4	6. 5. 25	甲田遺跡	甲田257-2	中尾寿男	283	個人住宅	浄化槽部分1.5×2 mを人力掘削 造構・遺物なし
5	6. 7. 11~ 8. 5	毛人谷遺跡	寿町2丁目 576他4筆	ニチモ(株)	3473	共同住宅	本書掲載
6	6. 9. 5~ 10. 8	喜志遺跡	木戸山町584 他8筆	田中 宏	1962	分譲住宅	本書掲載
7	6. 12. 15~ 12. 28	中野遺跡	若松町5丁目 629-1	杉山 茂	1148	共同住宅	本書掲載
8	7. 2. 7~ 2. 8	甲田南遺跡	甲田58-61-1	(有)タカヨウ	2574	店舗	2×2 mを人力掘削

表2 発掘調査一覧表

II 毛人谷遺跡



図1 毛人谷遺跡発掘調査地位置図

E T94

調査地：富田林市寿町2-576

調査面積：252.32m²

今回の調査は国道170号(大阪外環状線)の交差点「昭和町1」から南東にのびる府道寿町1号線と南西にのびる市道に挟まれた三角形状の水田域を共同住宅建設に伴って実施した。毛人谷遺跡発見のきっかけになった1985年の大阪府教育委員会の調査地は市道を挟んで西側に位置する。

調査は6本のトレンチを設定して行った。第1トレンチは調査区の北端部に7.0m×4.0mの規模で、第2トレンチと第3トレンチは調査区のほぼ中央に、南北に細長く並行して、それぞれ0.7m×49.0mと2.2m×55.0mの規模で設定した。第4トレンチは当初、第3トレンチの南側に1.2m×5.5mの規模で、その西側にはほぼ同じ規模で第5トレンチを設定したが、その後、下層の堆積状況を確認するため、第3トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチの規模を拡大して、一つのトレンチとして調査した。第6トレンチ、第7トレンチは第2トレンチの南側に1.2m×4.0m、1.1m×5.2mの規模で設定した。

1. 層序

調査区は当初、南西部から北東部に向かって下る緩やかな傾斜地であったが、切土、盛土によ

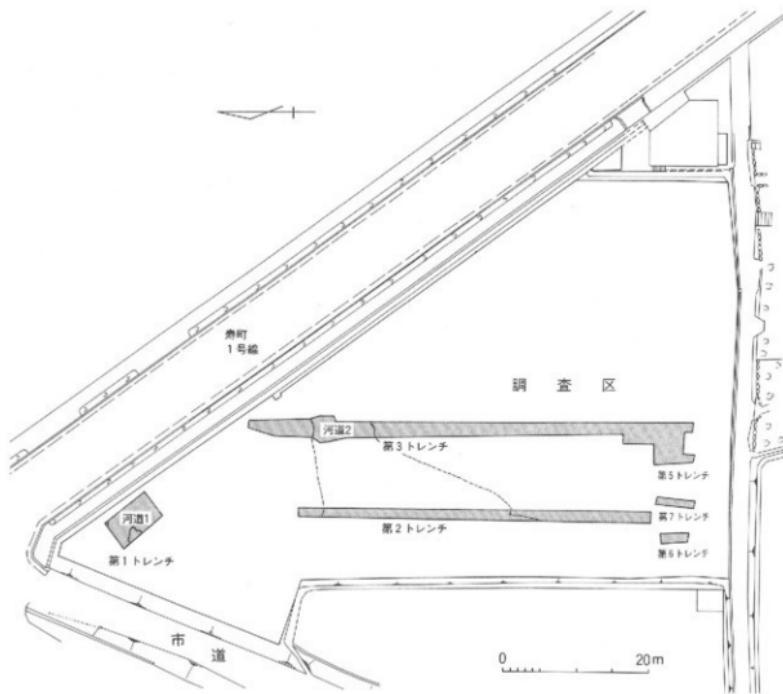


図2 毛人谷遺跡調査区位置図

って2段の耕作面が造成されていたと考えられる。耕作面は南西部で2回以上、北東部では5回以上あったと思われるが、その後、北東部の下段耕作面を南西部の上段耕作面と同じ高さまで整地を行って、一枚の大きな耕作面とし、現況に至っていると考えられる。

堆積層は現耕土を含めて10層認められるが、すでに述べたようにそれらはすべて耕土と床土である。遺構はピット11と落ち込み1を除いて、これらの10層を取り除いた地山面で検出した。なお、ピット11は第9層の耕作面(最古の水田面)で、落ち込みは第5層の耕作面で検出した。

2. 遺構と出土遺物

河道1(図版2・3、図3)

第1トレンチで検出された。深さは約2.0mあるが、幅については確認できなかった。堆積は12枚に分層できたが、大きく分けると4層に分かれる。

遺物は4層に分層したうちの第4層から土師器の甕が1点、第2層と第1層から須恵器の蓋杯が計5点、第3層目から砂岩礫1点が出土している。

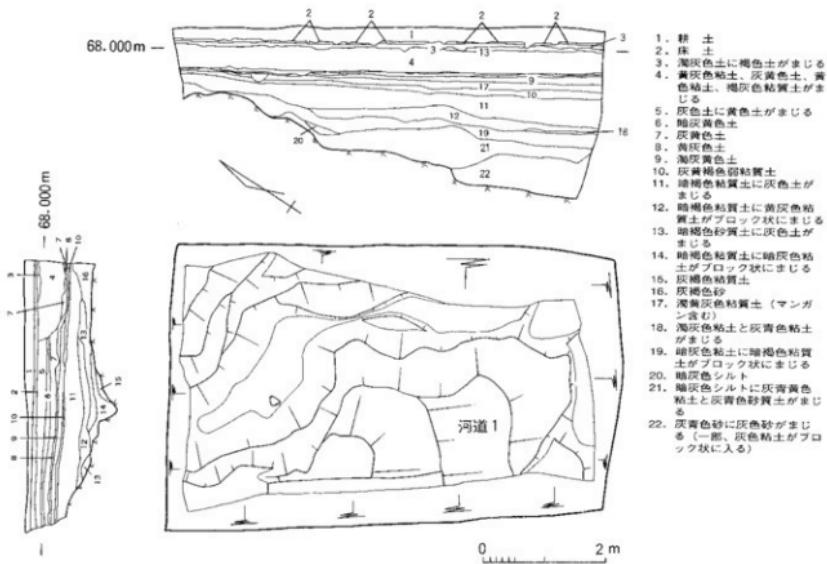


図3 第1トレンチ(第2面)平面図・断面図

土師器の壺(図版8, 図4-2)は口径18.4cm、残存器高10.0cmを測る。

須恵器はすべて古墳時代後半のもので、中村浩氏の陶邑須恵器編年(註3)のII型式第3～4段階の時期に該当する。蓋杯のうち蓋か身か判断できるのは、第1層から出土した蓋と第2層から出土した(図4-1)の身だけである。(1)は口径13.0cm、残存器高3.3cm、受部径15.3cm、たちあがり高1.1cmを測る。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整、他は回転なで調整を施している。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわりである。色調は灰色で焼成は堅緻である。

河道1の堆積状況は後述の河道2と類似していることから、同時期頃に機能し、埋没したと考えられる。

河道2(図版4・7, 図5・6)

第2レンチと第3トレンチの北側で検出された西から東に流れる河道である。第3トレンチでは幅8.2～8.7m、深さ1.9mを、第3トレンチでは幅26.7～30.6m、深さ0.3～2.0mを測る。

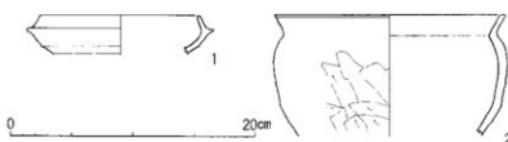
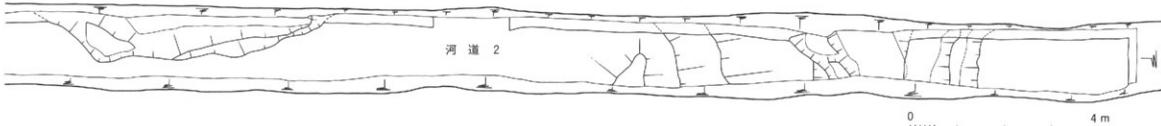
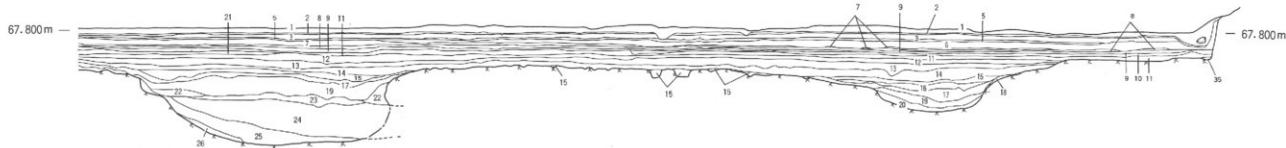
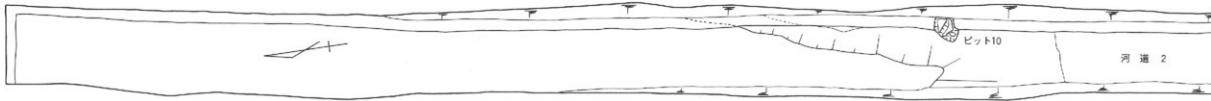
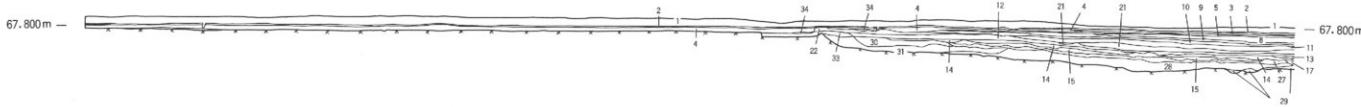


図4 出土土器

この河道は本来、第3トレンチで検出された幅で東に向かって流れていたと考えられる。第2トレンチで大きく溝幅が広がっているが、溝の南西端で湾処の様な深み検出された以外は浅く広がってい



- | | |
|-------------|------------------------------|
| 1. 耕 土 | 14. 灰褐色粘質土 |
| 2. 床 土 | 15. 喀灰褐色粘質土に黄灰色粘質土がブロック状に混じる |
| 3. 灰褐黄色土 | 16. 灰褐色粘質土に灰黄色粘土がブロック状に混じる |
| 4. 灰黄褐色土 | 17. 黑灰色シルトに灰黄色粘土が混じる |
| 5. 黄灰褐色土 | 18. 隆起褐色粘質土 |
| 6. 灰黄色土 | 19. 喀灰褐色シルト |
| 7. 濡黄褐色粘質土 | 20. 灰青色砂に灰白色砂が混じる |
| 8. 濡灰灰褐色土 | (一部、灰色粘土がブロック状に混じる) |
| 9. 黄灰色粘質土 | 21. 淡灰黄色粘質土 |
| 10. 濡灰黄色土 | 22. 灰色粗砂 |
| 11. 濡黄灰色粘質土 | 23. 灰色色シルトに灰白色砂が混じる |
| 12. 濡灰黄色粘質土 | 24. 灰青色粘土と灰色砂と暗褐色粘土が葉層状に混じる |
| 13. 濡黄褐色粘質土 | |
| | 25. 灰青色粘質土に灰青色砂が混じる |
| | 26. 喀灰褐色粘土 |
| | 27. 黑褐色粘質土 |
| | 28. 淡灰黄色粘質土に灰色粘土がブロック状に混じる |
| | 29. 灰褐色砂 |
| | 30. 暗灰褐色土に暗褐色土と暗褐色土が混じる |
| | 31. 濡灰褐色粘質土に灰黄色粘土がブロック状に混じる |
| | 32. 濡灰黄褐色粘質土 |
| | 33. 濡灰黄色粘質土に暗褐色土がブロック状に混じる |
| | 34. 濡黄灰褐色土 |
| | 35. 濡灰黄色粘質土に礫が混じる |

図5 第2トレーニング平面図・断面図

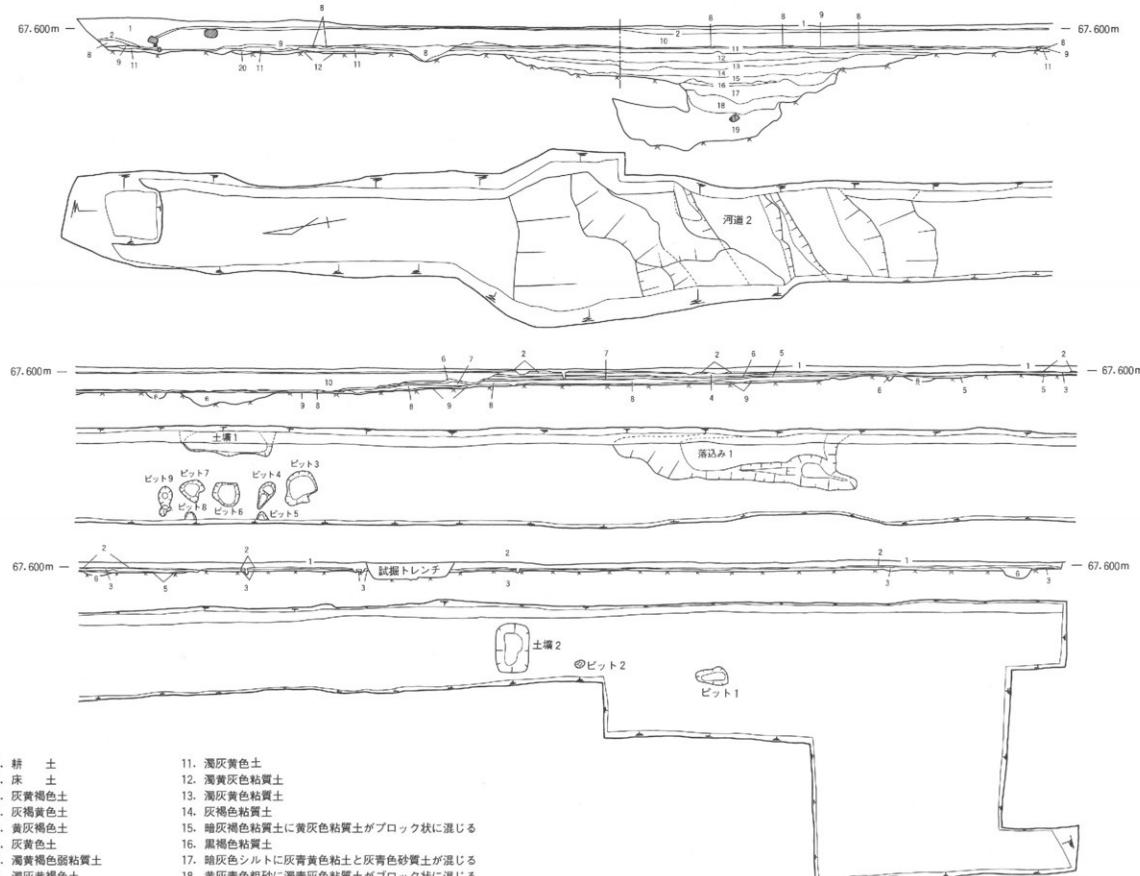


図6 第3・5トレンチ平面図・断面図

る。

遺物のほとんどは第2トレンチで出土しているが、第2・第3トレンチとも大きく5層に分層して取りあげた。第5層からは土師器、第4層からは弥生土器、土師器、サヌカイトの剥片と石核、第3層からは土師器、サヌカイト製の木葉形石器(図版8、図8-2)、剥片、第2層からは土師器、サヌカイトの剥片、第1層からは土師器、須恵器、砂岩製のたたき石が出土している。

弥生土器は器種のわかるものがないが、

外面調整に粗い平行タタキの施されたものが確認されていることから弥生時代後期の時期を考えておきたい。

土師器は時期、器種とも不明である。

須恵器は蓋杯の蓋が1点出土している。陶邑須恵器編年Ⅱ型式第3～5段階の時期に該当する。

サヌカイト製の石器遺物は石核が1点と剥片が14点出土している。これらのサヌカイト製の石器遺物はすべて後述するピット11から出土した石鎚より風化が進んでおらず、また、出土したもののが同じ程度の風化度であることから弥生時代のものと考えておきたい。

石核は $80.7 \times 61.8 \times 20.1$ mmを測る剥片素材の石核で、表面中央に石核作製時より前の風化の著しい剥離面が1枚大きく残っている。作業面は2面ある。原面を打面にして3方向から剥片を取っているが、最終の剥離は前述の作業面の一辺を打面にして原面側に作業面を求めて剥離を行っている。周縁に残る原面の状況からみて原材はせいぜい拳大程度の角礫であったと推測できる。

剥片の内訳は横形剥片が8点、剥片が3点、不明が3点である。横形剥片の内、原面を打面にしているものは6点、剥離面打面のものは1点、調整打面のものは1点である。原面打面の横形剥片の中に1点、垂直割れをおこしているものがある。剥片は剥離面を打面にしているものが1点あるが、他は打面がハジケているため不明である。

木葉形石器(図版8、図8-2)は横形剥片を素材にし、素材の剥離軸を短軸に設定して、非極厚細部調整で整形を施した石器である。両面とも調整は施しておらず、表面には素材時の先行剥離面と原面が残っている。長さ65.3mm、幅25.1mm、厚さ10.4mmを測る。

河道2直上の水田面(第9層)から奈良時代の須恵器が出土していることと、堆積状況および、遺物の出土状況を考え合わせると、古墳時代以降から奈良時代に

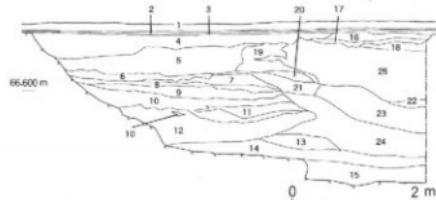


図7 第5トレンチ断面図

- | | | |
|------------------------------|-------------------------------------|------------------------------|
| 1. 輝土 | 10. 黄土が窓面を呈する
泥炭青色細砂に暗灰色 | 17. 深黄色細粒土 |
| 2. 底土 | 砂質土を含む青灰色粗砂
が窓面を呈する (植物
根が混入) | 18. 青灰色シルト |
| 3. 底黄褐色土 | 19. 黄褐色土に暗青色
砂が混入 | 20. 黄褐色土に暗青色
砂が混入 |
| 4. 深黄色細粒土に明黄色粘土質土に混じる | 21. 灰青色砂 | 22. 灰褐色砂 |
| 5. 黄褐色粘土質土に明黃色粘土質土に混じる | 23. 深黄色細粒土 | 24. 青灰色細粒土に暗青色
砂質土が窓面を呈する |
| 6. 深黄色細粒土 | 25. 黄褐色砂 | |
| 7. 深黄色細粒土 | | |
| 8. 深黄色砂質土に暗灰褐色
砂質土が窓面を呈する | | |
| 9. 深青色細砂に暗灰色砂 | | |
| | 11. 底青色質土 | |
| | 12. 底青色砂と明灰褐色
砂質土が窓面を呈する | |
| | 13. 底青色砂 | |
| | 14. 底青色粗砂 | |
| | 15. 青灰色粗砂 | |
| | 16. 底青色細砂 | |

1. 輝土
2. 底土
3. 底黄褐色土
4. 深黄色細粒土に明黄色粘土質土に混じる
5. 黄褐色粘土質土に明黃色粘土質土に混じる
6. 深黄色細粒土
7. 深黄色細粒土
8. 深黄色砂質土に暗灰褐色
砂質土が窓面を呈する
9. 深青色細砂に暗灰色砂

10. 黄土が窓面を呈する
泥炭青色細砂に暗灰色
砂質土を含む青灰色粗砂
が窓面を呈する (植物
根が混入)

11. 底青色質土

12. 底青色砂と明灰褐色
砂質土が窓面を呈する

13. 底青色砂

14. 底青色粗砂

15. 青灰色粗砂

16. 底青色細砂

17. 深黄色細粒土
18. 青灰色シルト
19. 黄褐色土に暗青色
砂が混入

20. 黄褐色土に暗青色
砂が混入

21. 灰青色砂

22. 灰褐色砂

23. 深黄色細粒土

24. 青灰色細粒土に暗青色
砂質土が窓面を呈する

25. 黄褐色砂

遺跡番号	平面形	規 格(●)	深さ(●)	土 色・土 質		出 土 事 物
				灰 黄 褐 色	粘 粘 素 土	
D. 1	不整形	(1.96) × (6.75)	0.1	灰黄褐色粘性土に後黃褐色粘土(堆山の土)が混じる		
D. 2	扇丸方形	1.06 × 0.7	0.22	灰色土に灰黄色土(堆山の土)がブロック状に混じる		
P. 1	不整形	0.7 × 0.38	0.17	灰黄色土(木片・根を含む)		
P. 2	梯円形	0.2 × 0.13	0.1	灰黄色土		
P. 3	不整形	0.64 × 0.83	0.28	灰褐色粘性土		
P. 4	不整形	0.62 × 0.3	0.3	灰褐色粘性土		
P. 5	不整形	(0.19) × 0.27	0.05	灰褐色粘性土に礫が混じる		
P. 6	不整形	1.47 × 0.51	0.13	灰褐色粘性土		
P. 7	不整形	0.56 × 0.48	0.08	灰褐色粘性土		
P. 8	不整形	(0.16) × 0.23	0.05	灰褐色粘性土		
P. 9	不整形	0.64 × 0.29	0.16	灰褐色粘性土		
P. 10	不整形	(0.6) × (0.45)	0.4	褐色色鉛鉱土に灰色粘性土と黄灰色土が混じる		
P. 11	不整形	0.56 × 0.54	0.15	褐色色鉛鉱土		石器

表3 土壌・ピット一覧表

かけて徐々に埋没していったと考えられる。

落ち込み1

第3トレンチのはば中央、東側で検出された。確認できたのは南北5.3m、東西1.01m分のみで、深さは0.09mを測る。埋土は黄灰褐色土である。遺物は出土しなかった。

土壤1~2、ピット1~11については、遺構・遺物一覧表(表3)を参照されたい。

なお、ピット11から出土した石鎚(図8-1)は基部形態が凹基形で、残存長24.0mm、最大幅18.1mm、最大厚3.6mmを測る。基部の作りだしは平形裏面細部調整の後、平形表面細部調整によっている。調整は両面調整で、中央断面は両凸形である。整形は非極厚細部調整で、表面右縁、裏面左縁、裏面右縁、表面左縁の順に整形されている。尖端部と片脚部が折損している。

3.まとめ

今回の調査は、1985年の大阪府教育委員会の発掘調査の東側にあたるが、今回の調査で検出された河道は大阪府教育委員会の調査で検出された溝3に続く流路と考えられる。この調査では溝3の堆積を上・中・下の3層に分層し、上層部は茶褐色から暗茶褐色系の土、中層部は暗褐色から黄茶灰色系のシルト層、下層部は灰色系の粘土層と砂層が堆積していたことから、中層以下は流水堆積と判断し、また、下層部からサヌカイトが出土したと報告されている。今回の調査では河道1・2ともその堆積状況、および方向のどちらも大阪府教育委員会調査時の溝3と類似するが、その検出位置からみて河道1に続いていた可能性を考えられる。

(中辻亘・栗田薰)

(注)

- 大阪府教育委員会(1983)『毛人谷道路の調査』、『錦織遺跡発掘調査概要』、17~25頁
- 富田林市(1986)『毛人谷道路の調査から』、『富田林市広報-埋蔵文化財発掘レポート(その26)』
- 中村浩(1978)『和泉陶邑窯址出土物の時期編年』、『陶邑3』、大阪府教育委員会

III 喜志遺跡

喜志遺跡は羽曳野市の中央南端から富田林市の北端部に広がる遺跡で、石川の中流域西岸に立地する。過去数十度にわたる調査の結果、サヌカイト製品の多量に出土する遺跡として注目され、弥生時代の石器製作集団の集落址として位置づけられている。

K S94

調査地：富田林市木戸山町584他

調査面積：233.35m²



図9 喜志遺跡発掘調査地位置図



図10 喜志遺跡調査区位置図

今回の調査は喜志遺跡のはば中央に位置し、弥生集落の立地する中位段丘から低位段丘にいたる傾斜地にあたる。また、調査地の現況は西から東に大きく開く開析谷の中にあるひな壇状の水田である。中位段丘面との比高差は約3mある。住宅建設に伴い発掘調査を実施した。

1. 編序

調査区は中位段丘を切り込む開析谷の中に位置している。谷の底から現況の耕作面まで約3mの厚さがある。地表面から2.1mまでの間に3面の水田面が確認できる。もっとも古い水田は、谷に堆積したと思われる灰青色混砂質土および濁灰青色混砂質土層の上面に作られている。そして、谷の中央部では約0.3mの厚さで濁黄灰色弱粘質土および濁灰褐色黄色混砂質土層の整地を行った後、次の新しい水田が作られている。その後、黒灰色質土がブロック状に混じる褐色混砂質土を約1.2mの厚さで大規模に整地が行われ、現在の水田に至っている。

2. 遺構

工事の関係上、調査区の南半部のみで溝、土壤を検出している。北半部についてはトレンチ調査で止めた。

また、調査区南東端の水田整地層から大量のサヌカイト片が出土しており、埋土ごとに取りあげ、

洗浄フルイがけをおこなった。

溝1

溝2の南西肩付近で検出した東西方向の溝である。幅1.6m、深さ0.9mを測る。溝の南端から4.2m分を検出した。埋土は2層に分かれる。上層は濁褐色混疊土(厚さ0.6m)で、下層は濁灰黃色混疊土(厚さ0.3m)である。遺物には多量の埴輪とともに弥生土器、サヌカイトの他、近世の土器や土人形があり、大半が上層から出土している。

溝2

調査区の中央を西から東に流れる。調査区の南端で南肩を検出した。北肩は調査区外にあるが、北側の段丘崖がそれに該当するかと思われる。この溝は開析谷の底を流れるもので、調査区内での

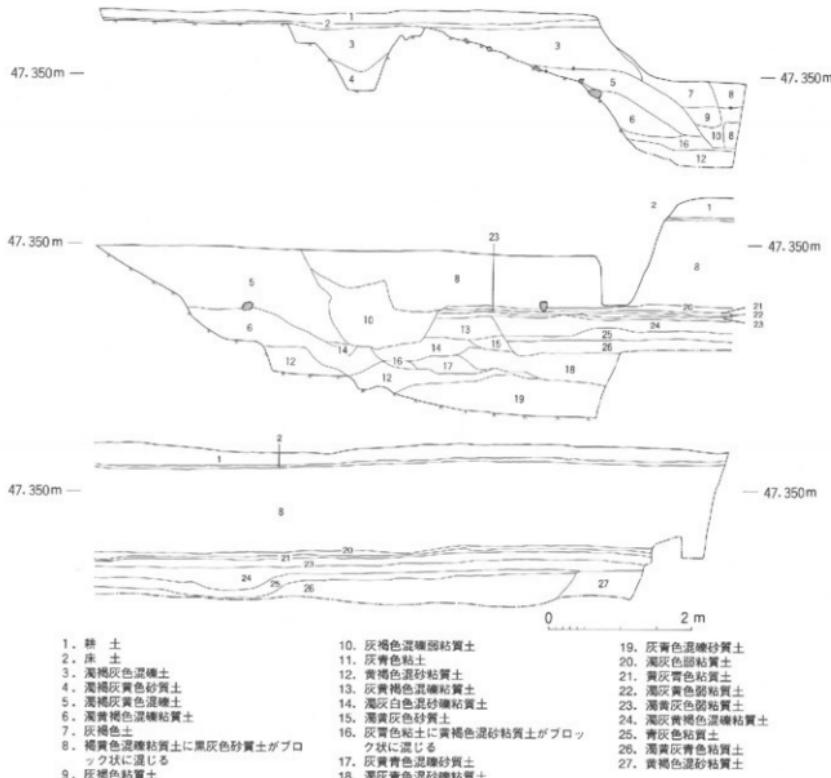


図11 西壁断面図

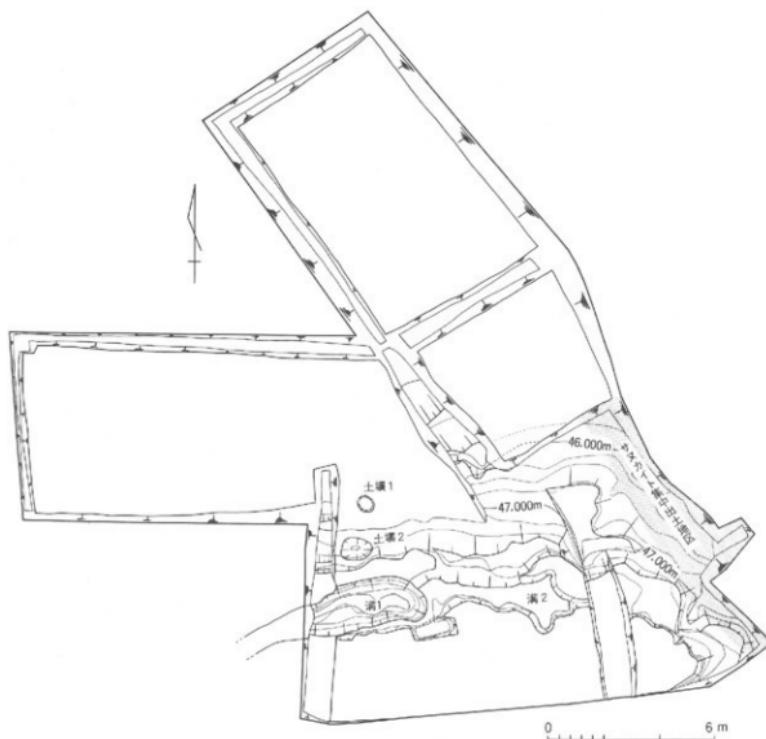


図12 遺構平面図

幅は約10mと推測される。現況の耕作面から溝底までの高低差は約3mを測る。

土壙 1

溝2の南肩から北に約5mの地点で検出した。濁褐色黄色混疊土層を掘り込んでいる。直径0.6mの円形を呈している。深さ0.25mを測る。灰褐色土の埋土中に多量の土師器の小皿が重なって出土している。

土壙 2

土壙1と溝1の中間に位置する。東西1.1m、南北0.8mの楕円形を呈している。深さ0.4mを測る。濁褐色灰色混疊土の埋土中から埴輪が出土している。

(中辻亘)

3. 出土遺物

今回の調査では弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器、石器、埴輪、土製品、銭貨、鉄製品、骨、炭片が出土している。

遺物の大半は溝1と溝2から出土している。これらの中でも、弥生土器とサヌカイトは溝2上層の南東端部からまとめて出土している。

ここでは出土遺物の中でもまとめて出土したもののみ、時期毎にまとめ、弥生時代の遺物として弥生土器と石器、古墳時代の遺物として埴輪、平安時代の遺物として土壙1出土の土師器について述べた後、近世の遺物として土製品と銭貨について概観する。

3-1 弥生時代の出土遺物

1. 弥生土器(図版18・19、図13・14-1~38、表25)

弥生土器には広口壺、細頸壺、無頸壺、水差し、高杯、鉢、器台、蜻蛉、甕などの容器類の他に円盤、紡錘車が出士している。図示したものについての細かい観察は表25を参照されたい。^(註1)

広口壺は口縁部が外反して大きく開く広口壺A(1~6)と外反した後、曲折して立ち上がる口縁部をもつ広口壺B(7~9)がある。広口壺Aの中には口縁部が下方に拡張するもの、上下に拡張するもの、ほとんど拡張しないものが認められるが、下方に拡張するものが圧倒的に多い。広口壺はA・Bともに頸部が大きく傾斜する形態をもつもので占め、筒状の頸部をもつものは認められない。

広口壺Aの紋様は口縁部に簾状紋、直線紋、波状紋、列点紋、斜格子紋、刺突紋、凹線紋、刻み目などがそれぞれ単独で、もしくは組み合わせて施されている。なお、凹線紋が施されているのは口縁部が上下に拡張された形態をもつものだけである。口縁部上面に紋様の施されたものは少ないが波状紋、列点紋、円形浮紋が認められる。頸部には簾状紋、直線紋が認められる。

広口壺Bの紋様は口縁部に簾状紋、波状紋、扇形紋、斜線紋、列点紋、刺突紋が施されている。頸部には直線紋、簾状紋が認められる。

広口壺の頸部から体部にかけての紋様には簾状紋、直線紋、波状紋、円形浮紋、指頭圧痕貼り付け凸帯が認められる。

細頸壺は頸部片が出土しているが、凹線紋と簾状紋が施されている。

無頸壺は図示したタイプ(10)の他に、段状口縁をもつ鉢Bに似たタイプで口縁直下に円孔を穿ったものも認められる。口縁部と体部には列点紋が施されている。

水差しは把手片が出土しているだけである。

高杯には浅い鉢状の形態をもつ高杯A(11, 12)と水平の口縁部に貼り付け凸帯がめぐる形態をもつ高杯B(13)がある。

高杯Aは紋様のあるものとないものがある。紋様のあるものには細かい列点紋が施されたものと一見、列点紋風の斜線紋、凹線紋の施されたものがある。

高杯Bの中で口縁部が残っているものはすべて垂下する形態をもつ。口縁部は無紋のものと有紋のものがある。紋様には斜線紋、斜格子紋、凹線紋がある。

高杯の脚柱部は中空のもの(22)と、半中実のものがある。据端部は拡張して面をもつものが多い。据部に紋様をもつものは少ないので、刺突紋を施したもの(24)、竹管紋を施したもののが各1点づつで

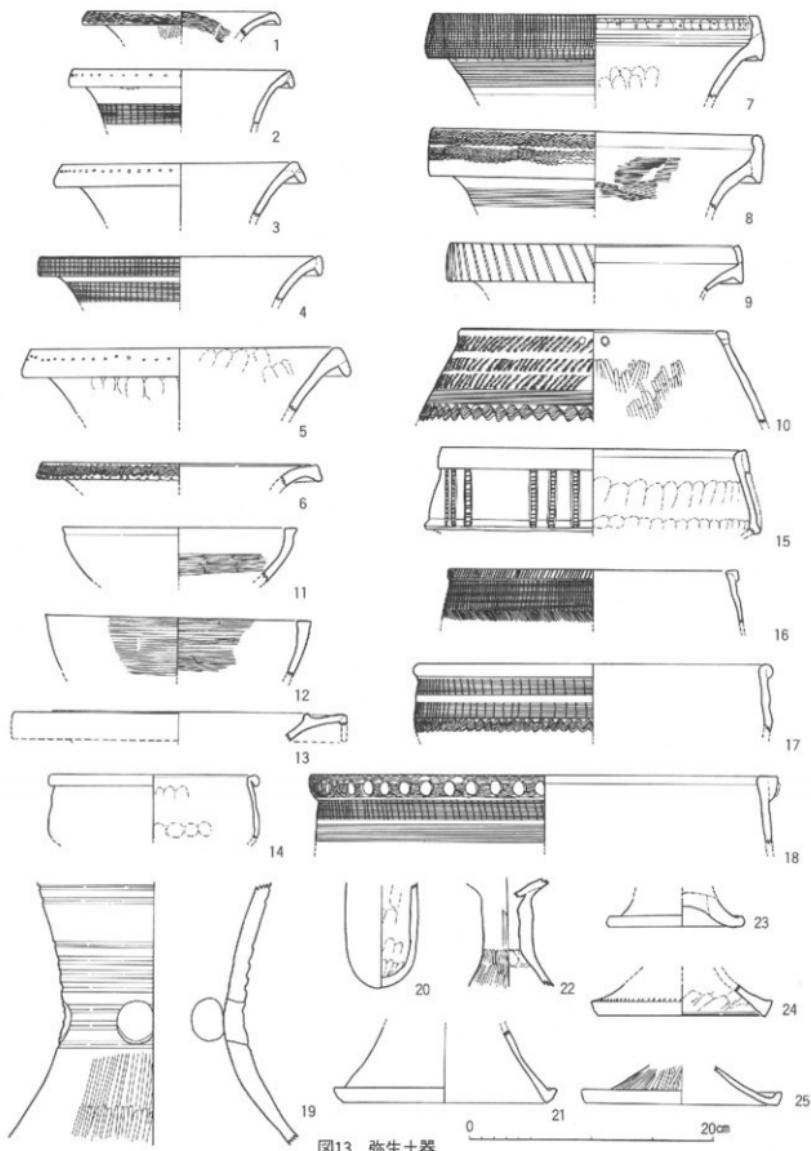


図13 弥生土器

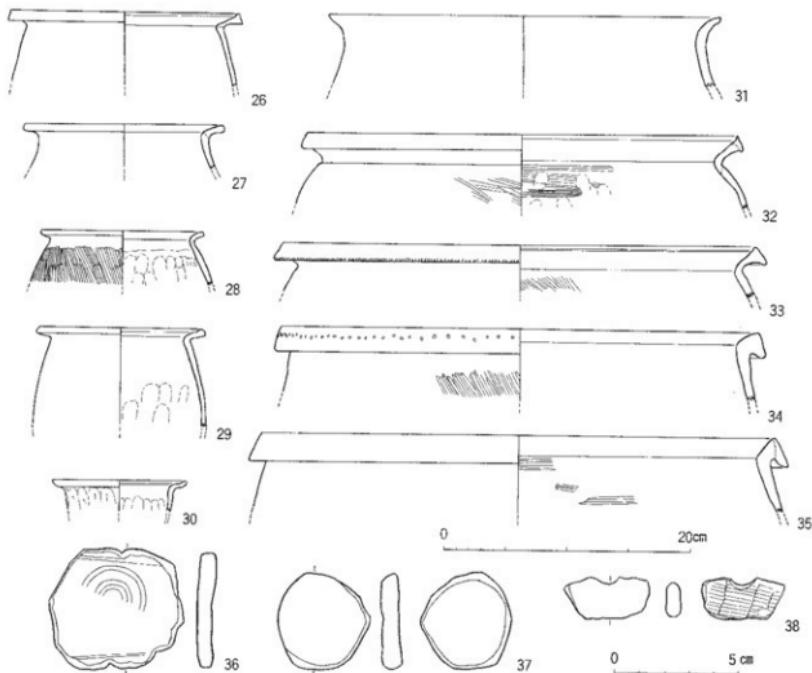


図14 弥生土器

はあるが認められる。なお、後者は生駒西麓産の胎土をもつものである。

鉢には直立する口縁部をもつ鉢A、段状の口縁部をもつ鉢B(14~18)、外反して下方へ拡張する口縁部をもつ鉢Cがある。鉢の中には把手の付くものも認められる。鉢Aは高杯と、鉢Cは大型の甕と区別がつき難いという理由もあるが、鉢Bが目立つ。また、台部の付くものと付かないものがある。

台部の中には高杯の脚部と区別が難しいものもあるが、据部の傾きのおおきいもの(21)、脚柱部の径の大きいもの(23)を鉢の台部と認定した。台部には円孔をあけたものが認められる。

鉢Aには凹線紋の施されたもの、波状紋と貼り付け凸帯の施されたものがある。

鉢Bの段状の口縁部には、巻き込むような形態をもつものと折り込んで平坦な面を作るものが認められるが、後者の方が多く出土している。後者の平坦面の幅の広さは様々あるが、狭いもので幅0.8cm、広いものでは2.4cmを測る。口縁部には紋様を施したものが多く認められるが、無紋のものも認められる。無紋のものの大半は口縁部が巻き込む形態のものである。紋様は列点紋、斜線紋が多いが、簾状紋、波状紋、円形浮紋も認められる。体部は簾状紋、直線紋、波状紋、列点紋のほか、棒状浮紋も認められる。

鉢Cは紋様の有無で甕と区別つけているため、すべて有紋のものに限られる。紋様には簾状紋と

刻み目が認められる。

器台(19)は1点出土している。凹線紋と円孔スカシの認められるものである。

蛸壺(20)は1点出土している。蛸壺は富田林市内での出土例としては、1988年度調査の甲田南遺跡から出土した例に統いて2例目である。

甕(26~30)には小型のものから大型のものまである。小型のものに生駒西麓産のものは少ないが、大型のものは生駒西麓産のものが多い。大型の甕の中には刻み目の施されたものと刺突紋の施されたものがある。

甕用蓋は2点出土している。高杯の裾部と類似するが、周縁部内面に煤が付着していることから認定した。

円盤(36, 37)は2点、紡錘車(38)は1点出土している。すべて土器の破片を再利用したものである。

(註)

赤生土器の分類は次の文献によっている。

1. 芝 進(1984), 「出土遺物」, 『中野遺跡調査概要V』.

2. 石器資料

出土した石器資料はサスカイト製の石器117点、剥片100,105点、石核182点、結晶片岩製の石包丁10点、粘板岩製の砥石1点、砂岩、チャート、紅麻片岩の石片などである。今回の調査で石器資料が最も多く出土したのは整地層からであるが、この他、溝1、溝2と現水田の床土(第2層)からも検出されている。調査区全体に約1.2mの厚さで堆積している整地層は平安時代末から近世に至る時期に形成されたと考えられるが、それらの中でも多量の石器資料を検出したのは調査区南東端の遺構平面図で網かけした範囲(図12)である。そこでサスカイトの集中して確認できる部分の発掘土を持ち帰り、洗浄フリイかけを行った。その結果、サスカイト製の石器110点・剥片97,037点・細部調整剥片208点・石核170点、結晶片岩製の石包丁9点、粘板岩製の砥石1点の他、紅麻片岩・チャート・砂岩などの石片を検出した。

以下、各々の石器について記述していくが^(註1)、個々の石器の詳しい製作技術については表26を参照されたい。また、今回出土の石器資料には多量の剥片と石核が含まれているが、剥片については項を改めて分析しているので、そちら(4-2)を参照されたい。なお、資料の観察に際して、実測図の左の図を(A)、右の図を(B)と呼称する。また、特に(A)、(B)を規定せず、右縁、左縁とだけ記述してある場合は(A)を基準にして左右を決めている。

石器の出土状況は表4の通りである。

石鎚(図版20・21, 図15~18-1~33, 表26)

表4 出土石器一覧表

	溝2	整地層	包含層	合計
石 鎚	4	44	48	
石 楠	1	11	12	
打製石剣	1	28	1	30
石 錐	1	7	8	
石 小 刀	2	2		
削 器	1	14	1	16
櫛	1	1		
石 包 丁	1	9	10	
砥 石	1	1		
合 計	9	117	2	128

石鎚は48点出土している。基部形態別に記述すると凹基式1点、円基式5点、平基式4点、凸基無茎式15点、凸基有茎式12点、不明11点である。点数が少ないので問題を残すかも知れないが、計測値の結果を示して石鎚の特色を示しておく。

推定長は非凸基式群(凹基式・円基式・平基式)が22~40mm、平均28.5mmであるが、凸基式群(凸基無茎式・凸基有茎式)は25

~57mm、平均40.6mmである。推定幅は非凸基式群が11~24mm、平均16mm、凸基式群は11~30mm、平均17mmである。厚さは非凸基式群で3~5mm、平均4mm、凸基式群は3~11mm、平均5mmである。このことから非凸基式群と凸基式群の間に大きな差異が長さに認められ、幅、厚さにはそれほど差異がないことが分かる。

図15は右鎚を基部形態別に長さ(推定長)と幅(推定幅)の相関関係を示したものである。図上のラインは長さと幅の比率が平均値を示す一次回帰線である。これによるとこのラインの下に非凸基式群が、ラインより上に凸基式群が多く分布する状況が見て取れる。すなわち、非凸基式群には小型のものが多く、凸基式群に大型のものが多いことを示し、他の遺跡出土の石鎚の分析結果と整合する。

図16は右鎚の基部形態別に長さと幅の復元値から割りだした長幅示数と厚幅示数の相関関係を示したものである。図上のラインはそれらの平均値を示す一次回帰線である。これによると、長幅示数が1.5~3.0に、厚幅示数が0.2~0.4のところに集中することが分かる。また基部形態別にみてみると、凸基有茎式には幅広であっても薄身のものが多く、凸基無茎式は幅狭で、厚身のものが多い。円基式と平基式はその中間の位置を占めることが分かる。

次に製作技術を観察する。

石鎚の約半数が両面、もしくは片面に素材面を残すことから、素材剥片の変形度が少ないことが分かる。基部形態別にみると円基式は80%、平基式は50%、凸基無茎式は53%、凸基有茎式は36%に素材面が残る。さらに、素材の厚みが分かる調整の施されていない石鎚11点を、両面に調整の施された石鎚18点と比較してみ

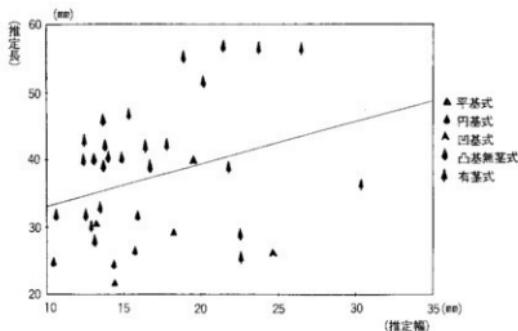


図15 基部形態別石鎚の長幅関係

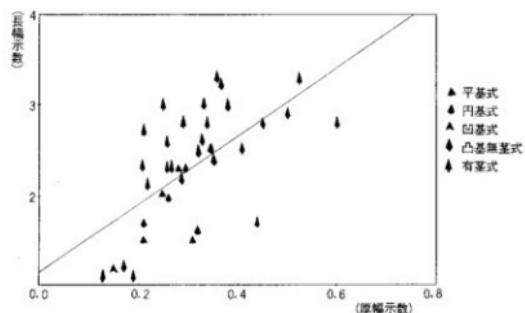


図16 基部形態別石鎚の長幅示数と厚幅示数の相関

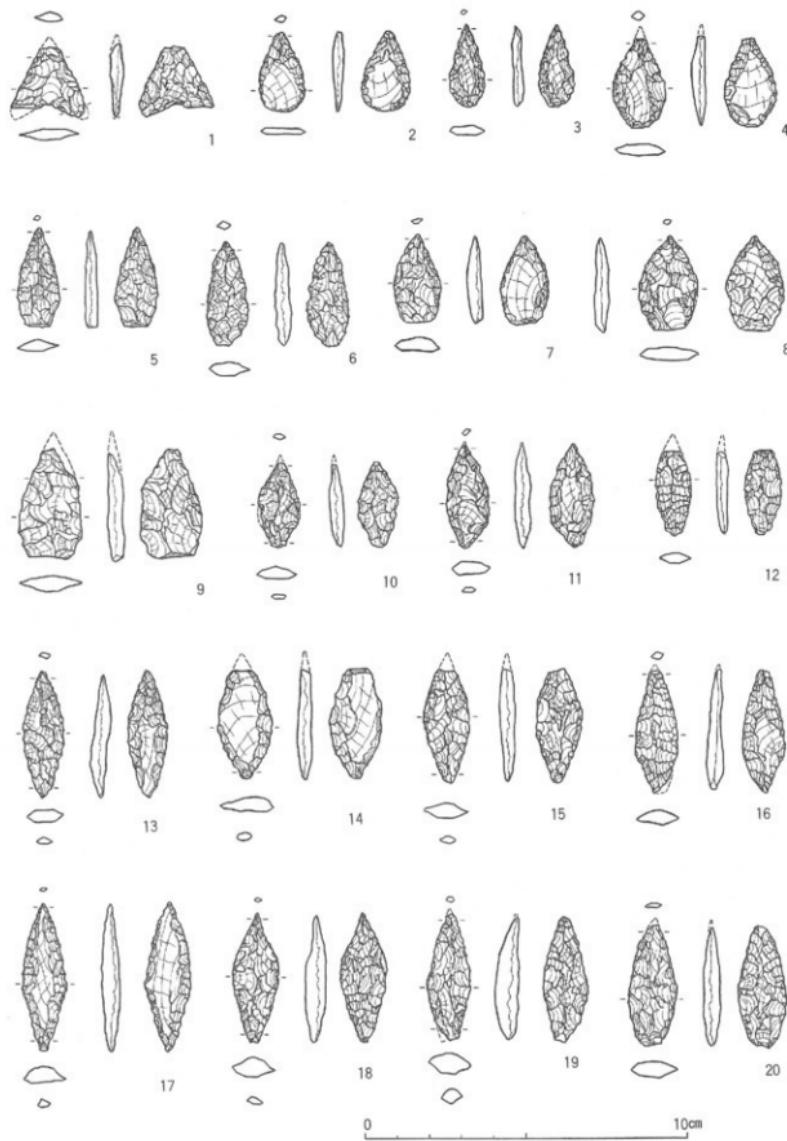


図17 石鏹

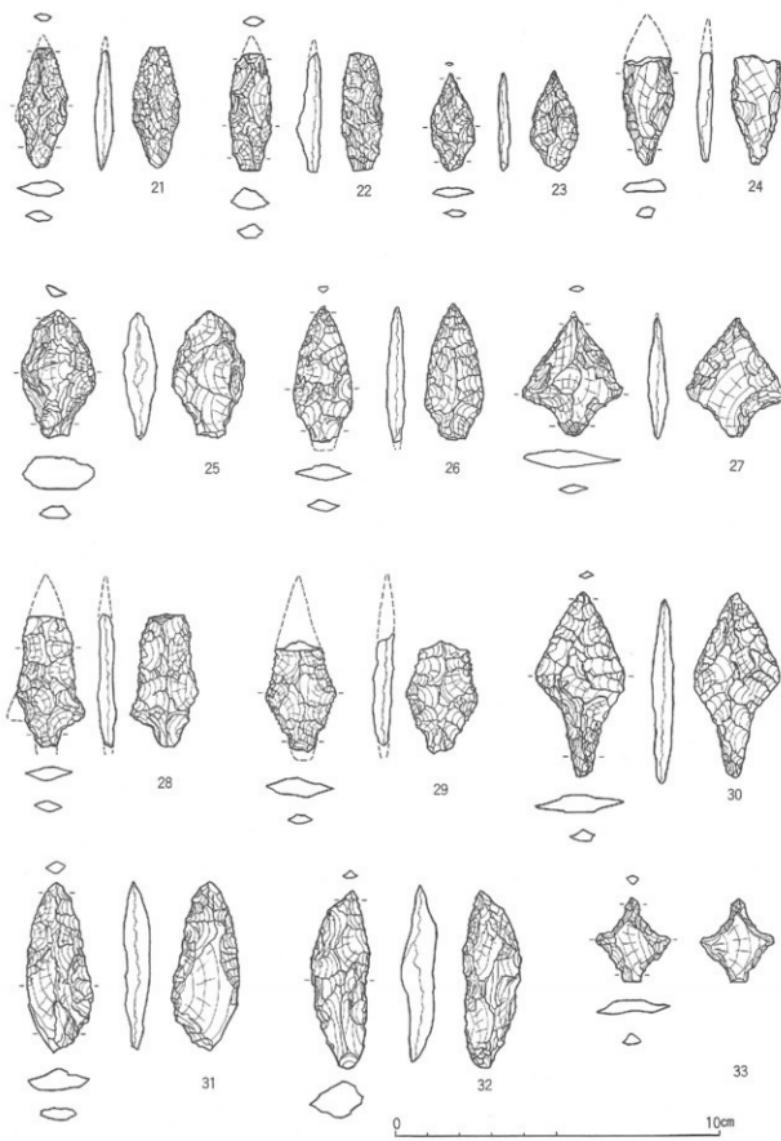


図18 石器

ると前者の長幅示数の平均値は2.19、厚幅示数は0.23、後者の長幅示数の平均値は2.46、厚幅示数の平均値は0.27になり、両面に調整の施された石鎚の方が細身の割に厚みがあり、調整の施されていない石鎚は前者より幅広の割に厚みのないことが分かる。すなわち、両面に調整の施された石鎚の素材は幅を狭めることによって厚みを減らしても、素材の厚さを残す石鎚ほど薄くなっていることを示し、逆に両面に調整の施されていない石鎚は素材に薄い剥片を選んだ結果、調整を施す必要がなく、形を整える作業だけですんだため、素材の幅も両面に調整の施された石鎚ほど狭められていないとも考えられる。以上のことと、両面調整の石鎚の方が幅の割に長さも長いことを合わせると、両面に調整の施された石鎚の方が素材に大きな剥片を選んでいることが分かる。素材の形態が分かるものは18点あるが、内訳は剥片が6点、横形剥片は12点である。原面の残るものは1点(9)だけである。

器体整形の技術はすべて平形および薄形細部調整で行われていて、角度の高い細部調整は認められない。ただし1点、図示できなかったが、凸器無茎式の石鎚の中に尖端部の片縁と基部の片縁のそれぞれ相対する位置関係で折れ面が認められるものがある。折れ面は細部調整後に形成されているが、それらの位置と折れの結果できあがった形態から、そして使用による折れではないと考えられ、折り取りによって整形した可能性も考えられる。

石槍(図版22、図19-34~42、表26)

長さが50mm以上、100mm以下のもので、側縁が平行せず、その輪郭が木の葉形のものを「石槍」と呼ぶ。12点出土している。これらの中には製品(34, 37, 40)とするよりも製作途中品と認定した方がよいものも存在する。その場合、石鎚の未製品としてもよいものもあるが(35, 36)、そうするには大きすぎるものもある。

打製石剣(図版23、図20~22-43~54、表26)

長さが100mm以上で、側縁が平行するものを打製石剣と呼ぶ。30点出土している。完形品はなく、その大半が製作中の事故品で、折れ面から確實に使用による欠損品(43, 47)と認定できるのは3点だけである。打製石剣に通常観察できる基部側縁の研磨の施されたものがないことは、完成品が尖端部片しか残っていないこと、また、その他のすべてが製作中の事故品であって、最終工程まで行われていないことが原因として考えられる。また、今回の出土品の中には製作途中に施される表面の研磨は認められなかった(註2)。なお、(48)は磨滅が著しいが、その磨滅が折れ面にもおよんでいることから、事故後についたものと考えられる。原面残存のものは11点あるが、そのうち基部側縁に残るものは7点、表面に残るものは4点ある。素材剥片の分かるものは2点だけで、いずれも横形剥片である。

石錐(図版24、図23-55~60、表26)

石錐は8点出土している。形態は4タイプ認められる。

- 1.頭部と錐部の境界がない棒状のもの。2点出土(55)。
- 2.頭部と錐部の境界が不明瞭で、全体の形状が涙滴形を呈するもの。2点出土(56, 57)。
- 3.頭部と錐部の境界が明瞭なもので、頭部はほとんど調整が行われず、整形も難で素材面を残

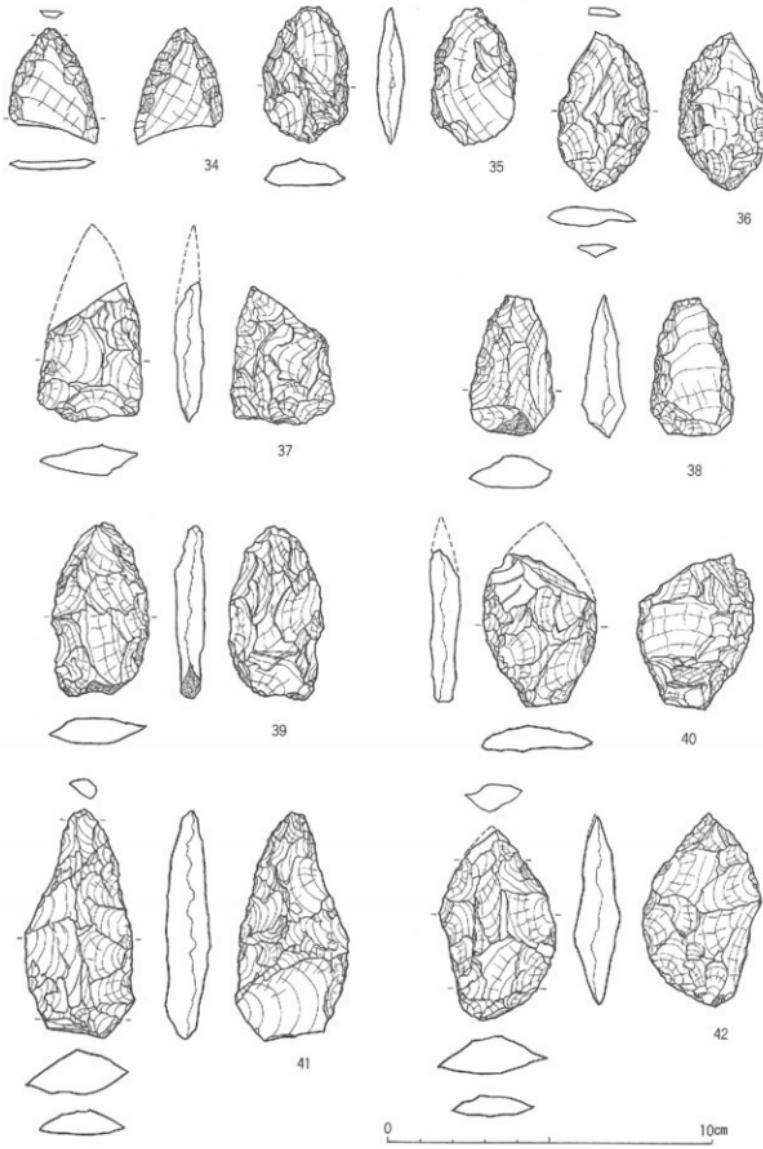


図19 石槍

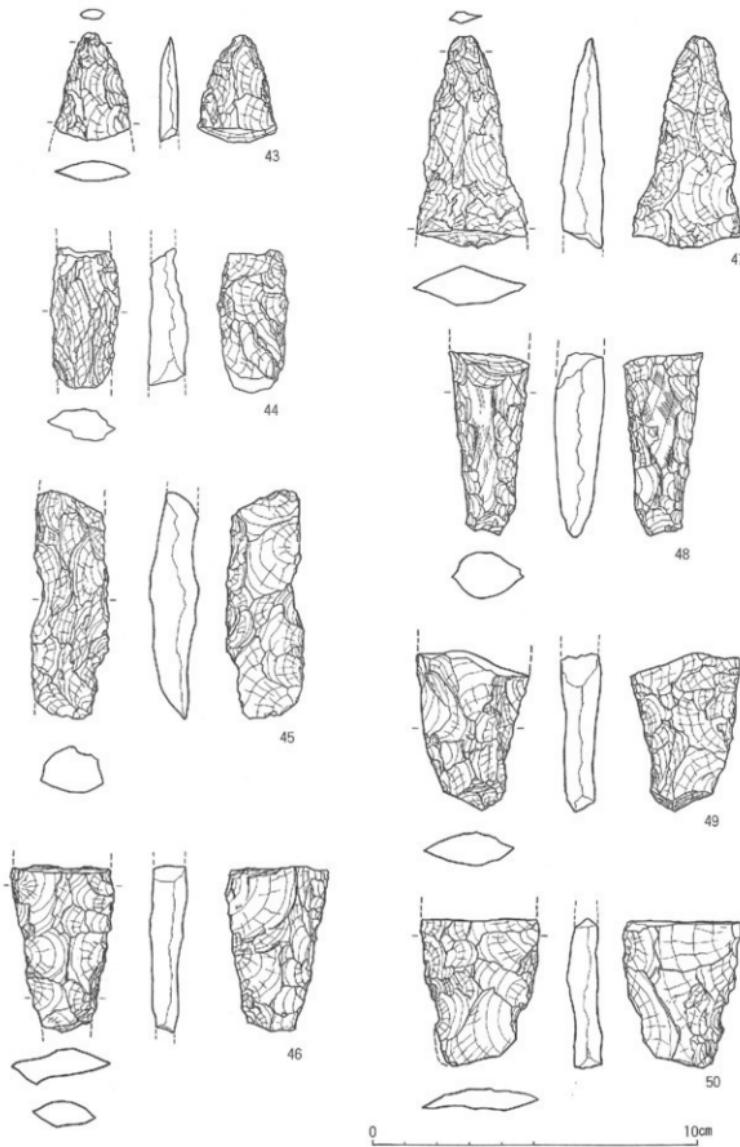
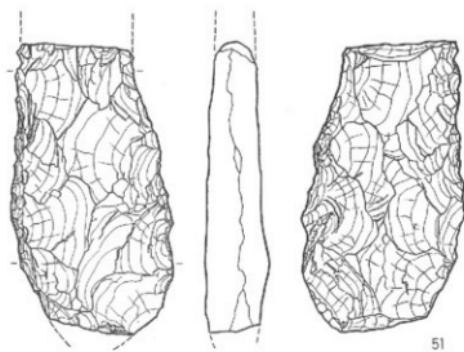
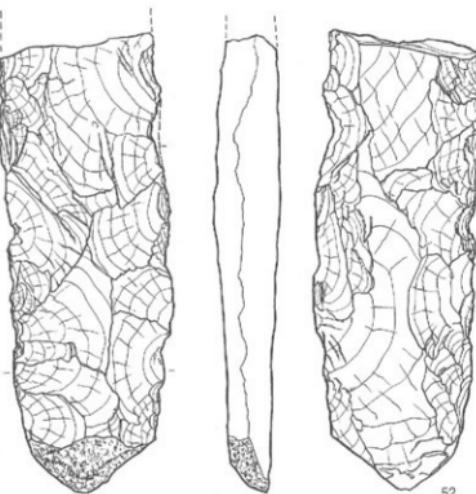


圖20 打製石劍



51

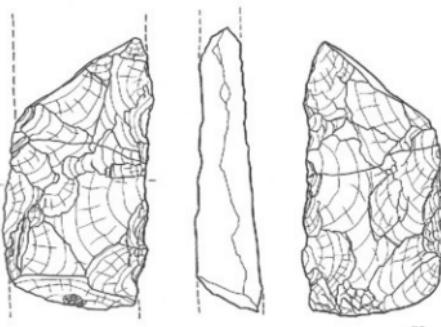


52

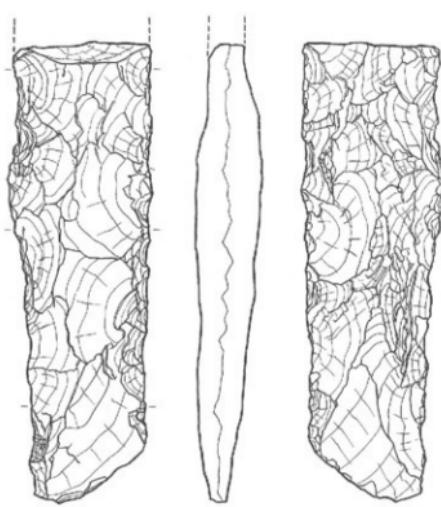


0 10cm

図21 打製石劍



53



54



0 10cm

圖22 打製石劍

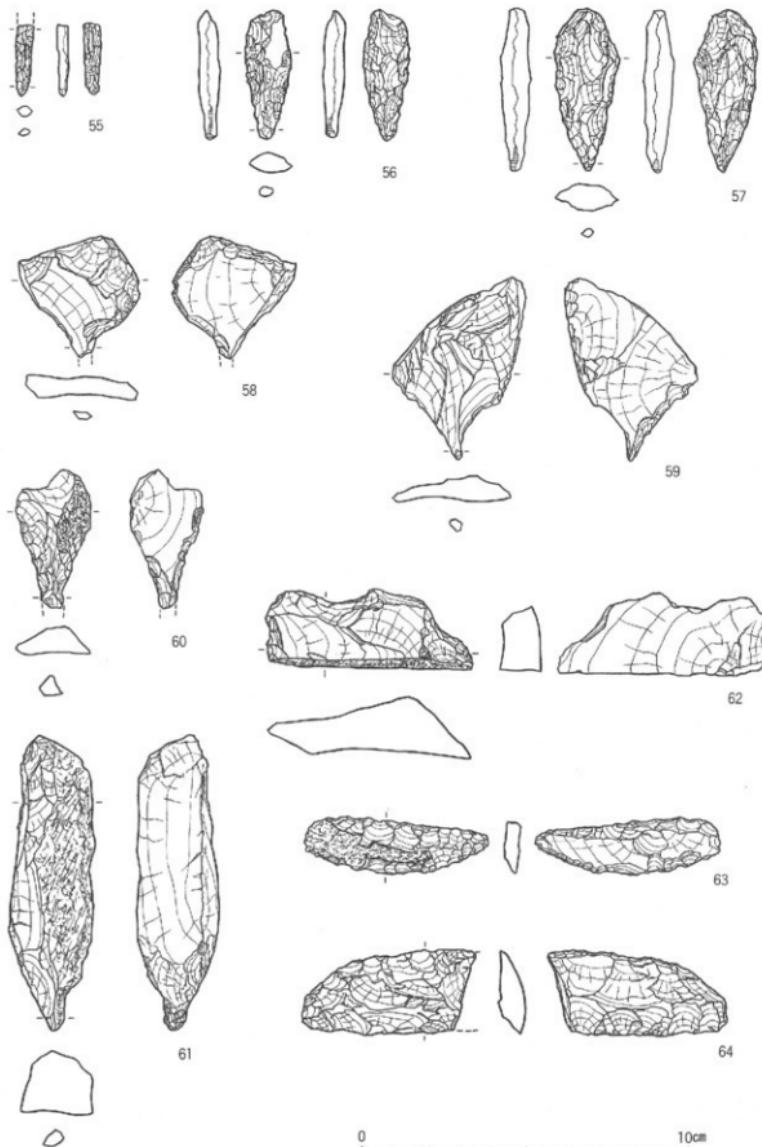


図23 石錐、ベック、ノッチ削器、石小刀

しているもの。3点出土(58~60)。

4.形態は3と類似するが、全体に厚みがあり、錐部の作りも頑丈でベックの範疇に入るもの。

1点出土(61)。

1.2のタイプは平形、および薄形細部調整で整形されている。3.4のタイプは機能部である錐部の整形だけをみれば極厚形、厚形、薄形細部調整が施されているが、それらが全体におよぶことなく、素材面も一部に残している。

使用痕と考えられる磨滅は1と2のタイプに認められる。1は尖端部にごく狭い範囲での磨滅で、側縁にまでおよぶものではない。2は錐部に回転痕として磨滅が認められる。回転痕は尖端から両側縁にかけて器軸に直交して認められる。さらに尖端部は丸みをもっている。この回転痕ははっきりと残っていて、かなり堅いものの穿孔に使用したと考えられる。これら石錐にみられる使用痕の差異は穿孔の対象物の差と考えられる。

石小刀(図版24、図23-63.64、表26)

2点出土している。(63)は石小刀としては通常の大きさであるが、(64)は推定長が10cm近くになると推定でき大型の部類に入る。

石小刀の側縁に研磨が認められるものはない。

削器(図版24・25、図23-25-62、65~71、表26)

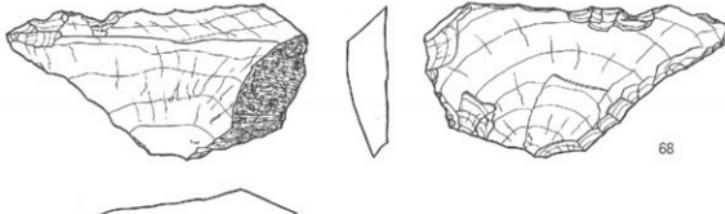
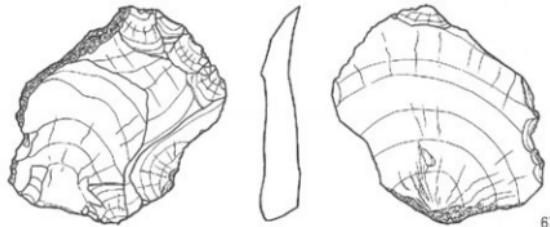
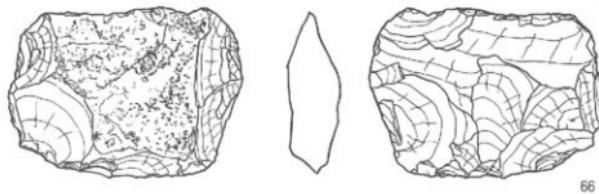
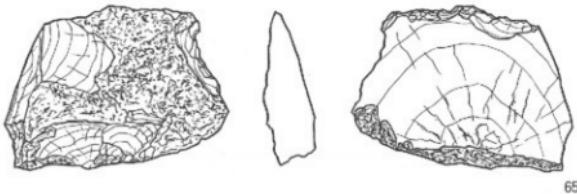
16点出土している。刃部の数と形態によって細分すると、ノッチ削器1点(62)、横形削器1点(65)、凸刃削器4点(69)、凹刃削器1点、複刃削器9点(66~68、70、71)が検出されている。削器と認定したものの中には石核との区別がつけてにくいものもあるが、そこから取られた剥片が石器の素材剥片として耐えられない大きさしかないと判断でき、なおかつ最終の細部調整が一辺に連続して認められるものをこの中にいたれた。

ノッチ削器は剥離面打面の横形剥片を素材にして、その先端右縁に高い角度で細部調整をノッチ状に施している。

凸刃削器としたものの中に1点、磨滅の認められるものがある。原面打面で先端部が段で終わる正方形に近い平面形をもつ横形剥片を素材にした削器で、刃部は左側縁に薄形・深形・連続・凸形・表面細部調整で作り出されている。使用痕と思われる磨滅は主剥離面の先端部左側に、約2.5cmの範囲に剥片剥離軸にほぼ直交する方向に認められる。この方向は刃部の方向と一致し、磨滅痕がつくぐらい堅い対象物を削るのに使用していたことを推測させる。

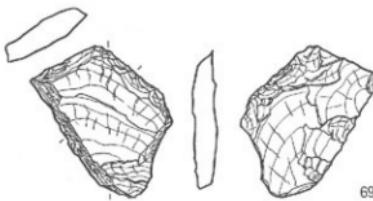
櫻(図版25、図25-72、表26)

1点出土している。先端部が左角から斜め方向に石器平面に垂直な折れ(表面からの節理割れ)で新しく失った横形剥片(剥片の可能性もある)で、右縁全体に打撃痕が連続して認められ、その対象である左縁には大きな表面への剥離痕がある。左縁を何らかのもの上において、この剥片をたてて右縁上に打撃を与えた時に生じる剥離である。すなわち、櫻としての使用を窺わせる。素材の打面は平坦な原面打面である。

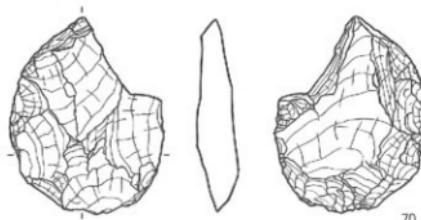


0 1 10cm

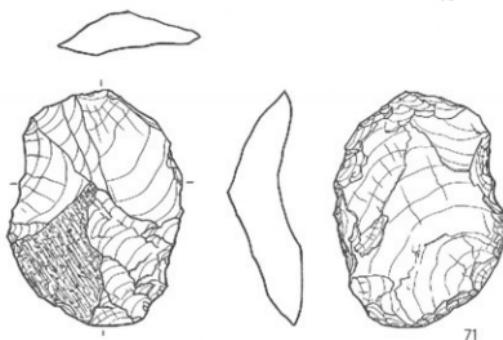
図24 削器



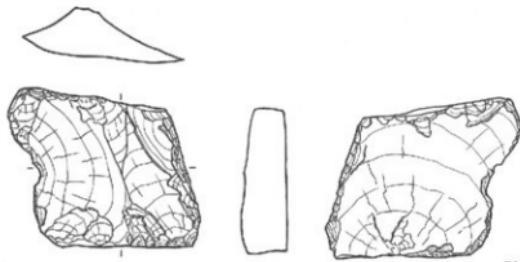
69



70



71



72

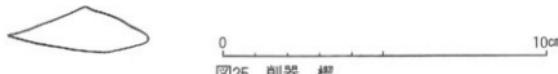


图25 削器、模

高さ(cm)	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	70-74	75-79	80-84	85-89	90-94	95-99	100-104	105-109	110-114	115-119	120-124	125-129	合計
最大幅(mm)																					
26-34																					1
35-39		1	1	1	2	2	1	1													9
40-44																					33
45-49																					20
50-54																					22
55-59																					22
60-64																					18
65-69																					10
70-74																					14
75-79																					9
80-84																					3
85-89																					1
90-94																					3
95-99																					1
100-104																					1
105-114																					3
合計	1	1	4	5	13	5	17	26	18	22	15	17	19	3	3	3	4	1	1	170	

表5 石核の単純最大長と単純最大幅の相関

石核(表5)

170点出土している。これらの中で剥片素材の石核は39点ある。表5は石核の単純最大長(第一長)と単純最大幅(第二長)の相関関係を集計したものである。

石包丁(図版26, 図26-73~75, 表26)

10点出土している。すべて結晶片岩製であるが、全体の形状の分かるものはない。かろうじて幅の計測できるものからみると、45mm程度の幅の狭いものと62mm程度の幅の広いものがあったことが分かる。

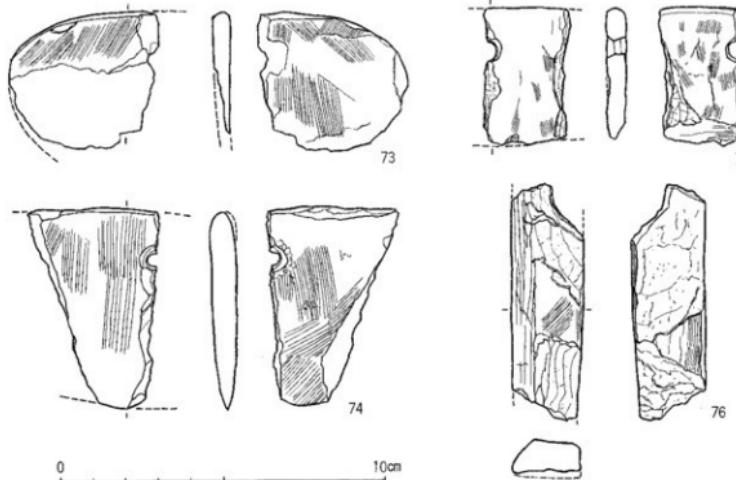


図26 石包丁, 砥石

砥石(図版26, 図26-76, 表26)

1点出土している。粘板岩製の砥石である。金属製品用の砥石と思われる。

(註)

1. 用語については基本的には山中一郎氏と森本晋氏に従っているが、一部の石器の型式名については必ずしもその定義に従っていないものもある。
山中一郎(1978)「森の宮遺跡出土の石器について」,『森の宮遺跡 第3.4次発掘調査報告書』, 雜誌宮城県考古会, 124~147頁。
山中一郎(1982)「石器遺物」,『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』, 勝田阪市文化財協会, 158~204頁。
森本晋(1983)「吉志遺跡80-3区の石器」,『吉志遺跡・東坂川遺跡発掘調査概要・VI』, 大阪府教育委員会, 31~46頁。
2. 萩田薰(1996)「打製石剣の製作技法」,『弥生文化博物館研究報告』, 第4集。
3. 萩田薰(1995)「打製石剣を観察するための新しい視点ー中間研磨と加工刃の変化ー」,『大阪府下埋蔵文化財研究会(第32回)資料』, 勝田阪府文化財調査研究センター, 35~42頁。

3-2 古墳時代の出土遺物

1. 塹輪

今回の調査で円筒埴輪と形象埴輪が出土している。そのほとんどは溝1と溝2の第1層目から検出された。遺構の項で述べたとおり、これらの出土状況は本来の姿ではなく、平安時代以降の整地によってこの場所に捨て去られたものである。

以下、円筒埴輪、形象埴輪の順に観察していく(註1)。なお、個々の埴輪の詳しい観察は表27を参照されたい。

円筒埴輪(図版27, 図27・28, 表27)

円筒埴輪は上田暁氏の分類によれば(註2)、すべて小型品の範疇に入るものばかりであるが、その中でも今回の出土埴輪をみてみると、大、小2つのサイズに分類することができる。ただし、このサイズの差は口径の差によるものではなく、段数の差と底径の差に起因するものである。なお、すべて無黒斑で、円形のスカシ孔をもつものばかりであるが、タガ形状、内外の調整方法から8タイプに分類できる。

Aタイプ(図版27, 図27-1, 2)

段数は5段で、出土した埴輪の中で最も古いタイプで、かつ大きなサイズに属するものである。口縁部がわずかに開く(1)と直立する(2)がある。スカシ孔は2段目と4段目に2孔づび千鳥状に配されている。タガは低い断面台形である。外面調整は静止痕が斜めに明瞭に傾くBd種横ハケが施されている。内面は1段目に斜め方向のハケ目が認められるが、2段目から基底部はなで調整である。なお、基底部外面は縦ハケ一次調整だけで、横ハケは施されていない。工具幅は6cm前後で、横ハケは1段目が2回、2~4段目が1回の操作で施されている。なお、各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。4点出土している。

Bタイプ(図27-3)

段数は不明。タガは低い断面台形であるが上方の方が突出度が高い。外面調整は縦ハケ一次調整の後、静止痕の認められない(全体の1/3しか残っていないが、その間に静止痕が認められない)ストロークの長いC種様の横ハケ二次調整が施されている。工具幅は3~4cm前後と狭く、横ハ

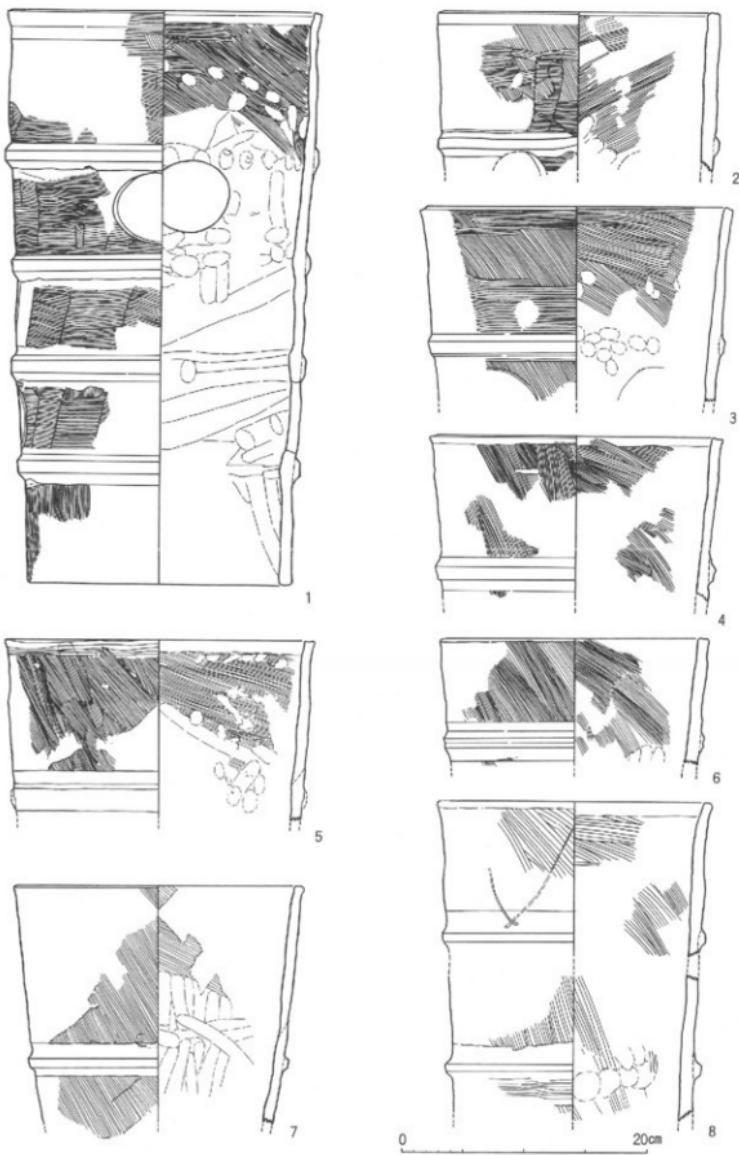


図27 円筒埴輪

ケは1回施されているだけで、最上段のタガ側に接して約1/2しか施されていない。なお、各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。1点出土している。

Cタイプ(図27-4~6)

段数は不明。タガは低い断面M字形である。1段目が長い(4, 5)と短い(6)がある。口縁部はほぼ直立する。外面調整は縦ハケ一次調整だけである。工具幅は狭く、3~4cm前後であるが、ハケの幅は細かく、7~18本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。なお、各調整ごとの工具の使い分けはなされていない。14点出土している。

Dタイプ(図27-7)

段数は不明。タガは低い断面台形である。出土した埴輪の中で1段目が最も長い。外面調整は縦ハケ一次調整だけである。工具幅は狭く、3~4cm前後であるが、ハケの幅は粗く、6本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。なお、各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。1点出土している。

Eタイプ(図27-8)

段数は不明。タガは低い断面台形である。口縁部はわずかに外反して開く。外面調整は縦ハケ一次調整と3段目に右から左方向に回転を利用して横ハケ調整が施されている。工具幅は狭く、2~3cm前後である。ハケの幅は粗く、5本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。1点出土している。

Fタイプ(図版27, 図28-9)

段数はおそらく4段である。タガは低い断面台形である。口縁部はわずかに内湾する。スカシ孔は2段目と3段目に千鳥状に配されている。外面調整は縦ハケ一次調整が施されている。工具幅は3~4cm前後である。ハケの幅は粗く、5本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。1点出土している。

Gタイプ(図版27, 図28-10)

段数はおそらく4段である。タガは低い断面M字形である。口縁部は外反する。基底部はすばまる形態をもつ。スカシ孔は2段目と4段目に千鳥状に配されている。外面調整は縦ハケ一次調整だけである。工具幅は4cm前後である。ハケの幅は粗く5本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。1点出土している。

Hタイプ(図版27, 図28-11, 12)

段数はおそらく4段である。タガは断面三角形である。口縁部は大きく外反する。基底部はすばまる形態をもつ。外面調整は縦ハケ一次調整だけである。工具の幅3~4cm前後である。ハケの幅は粗く5~6本/cmである。内面調整はなで調整である。ただし、口縁部は板状工具でなでている。9点出土している。

基底部片(図28-13~18)

基底部の破片の外面調整は縦ハケ一次調整だけである。内面調整はなで調整である。底端面の調整が施されているものと施されていないものがある。施されているものはなで調整がおこなわれている。底径は13~14cm前後のものと、20cm前後のものがある。基底部の破片は口縁部片に比べるとその出土量が少ない。このことはこれらの埴輪が廃棄された時の状況を推測させる。すなわち、墳丘に基底部を残したまま削平された土が、整地に使用されたと考えられる。

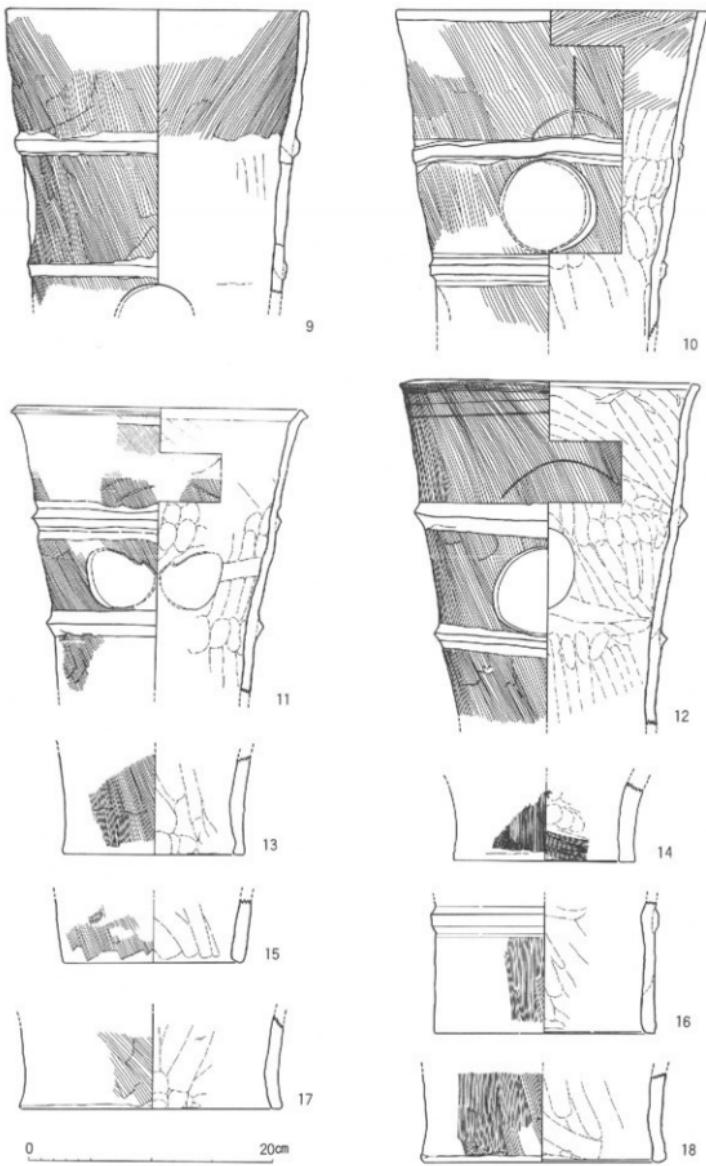


図28 円筒埴輪

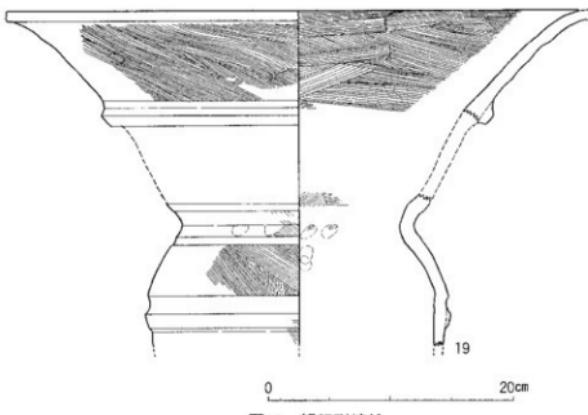


図29 朝顔形埴輪

円筒埴輪の中にはヘラ記号の施されているものが14点ある。図示したもの(図27-2.8, 図28-10~12)以外に曲線と刺突を組み合わせたものがある。

朝顔形埴輪(図版27, 図29-19, 表27)

2点出土している。2点とも同じタイプのものである。口縁部は大きく外反して開く。頸部に断面台形のタガがめぐる。肩部は張り出さず、体部のタガまでの長さは短い。体部のタガは頸部よりも低い断面台形である。

形象埴輪(図版28・29, 図30・31, 表27)

形象埴輪には人物形埴輪4~5点、草摺形埴輪1点、短甲形埴輪2点、冑形埴輪1点、鞆形埴輪2点、馬形埴輪2点、鳥形埴輪2点、蓋形埴輪4点の他、形態不明の形象埴輪が出土している。

人物形埴輪(図版28・29, 図30-20~25, 表27)

頭部と肩部残存のもの(20)、腕から手(21)と背部の衣装残存(22)のもの、耳片、衣装の裾部と考えられるもの(23)、衣装の一部と考えられるもの、みずらと考えられるもの(24)、眉庇付冑の一部と考えられるもの(25)が出土している。胎土と焼成具合からみて5~6体の人物埴輪があったと推測できる。

頭部と肩部残存の埴輪は巫女(20)を現している。頭部は粘土紐の巻き上げで球形に作り上げ、頭頂部に板状の髪を貼り付けている。髪にはヘラ工具で毛髪を表現し、髪のほぼ中央で毛髪を束ねていて、髪の束が表現されている。顔の表現は額、頬、額の部分をわずかに膨らみをもたせ、立体感のある表現を行っている。眉は突出させることであらわしている。目は切れ長の杏仁形に長さ2.6cm、最大幅0.8cmの大きさで、口は長さ3.1cm、幅0.2cmの大きさで横一文字に穴をあけて表現している。鼻は粘土を貼りたして、底辺1.8cm、一辺3.9cm、最大高0.9cmの二等辺三角形状に形づくっているが、鼻の膨らみのカーブと連続させることによって鼻筋の通った形になっている。鼻の穴は直径5mm、深さ5mmにあけている。耳は粘土紐を貼り付け、微妙に高低をつけて耳たぶの表現を行っている。

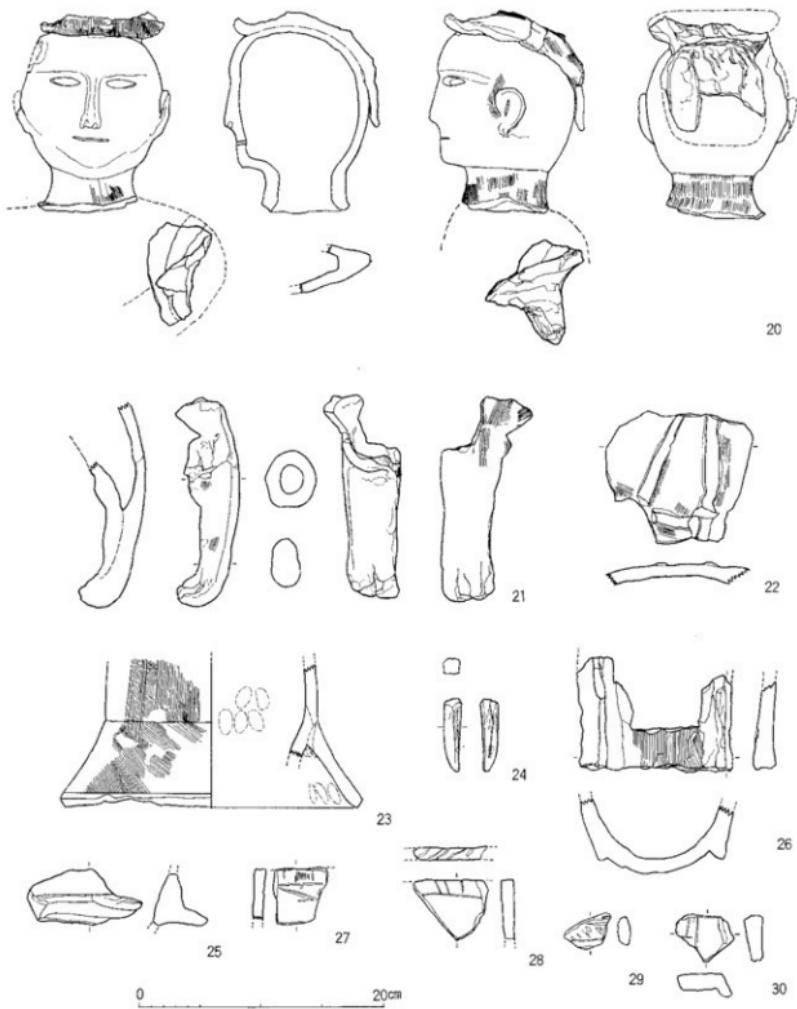


図30 形象埴輪

耳の中央には縦長方向に長さ1.2cm、最大幅0.3cmの杏仁形の穴をあけている。肩部は襟を掛け、腕を前に廻す表現がとられている。肩と腕は直接つなぐ方法が取られている。調整はハケなどなどで行われている。

腕から手にかけて残存のもの(21)は、まず粘土板を丸めて手をつくり、指は4本分を粘土紐で貼りつけて表現している。上腕から肩にかけては粘土帯を巻き上げて作っているため中空である。調

整はハケなどで行われている。

背部の衣装と考えられるもの(22)は前述の腕から手にかけて残存のもの、耳片と焼成や色調が似ていることから、これらは1体のものと推測できる。衣装は結び目を伴う縦が粘土紐で貼り付けられている。残存部分のカーブから背部と推定した。調整はなでとハケで行われている。耳片は前述の巫女の表現と同じである。

衣装の裾部と考えられる破片(23)の焼成と色調は後述のみずらの破片に似る。もし男性の埴輪があったとすれば、その埴輪の衣装と考えられる。調整はハケなどで行われている。スカート状の裾部は別に作り、本体に貼りつけている。貼り付けの際、密着度を高めるために施したと考えられる粗いハケ調整(6本/cm)が認められる。

他に衣装の一部と考えられる破片が出土している。焼成、色調からみて前述のどの人物埴輪とも違い、黄橙色の焼きの甘いものである。なだらかなカーブをもつ破片に、縦方向に長く縫と考えられる粘土紐の貼り付けが認められる。調整は磨滅が著しいため不明である。

みずら(24)と考えられる破片は先端の尖る四角柱で角状を呈する。表裏2面に毛髪の表現と考えられるヘラ工具で施された沈線がみとめられる。焼成や色調は前述の巫女と類似するが、明らかに巫女とは別個体なので、もしこの破片が確実にみずらであれば、男性の埴輪があったことが推測できる。調整はハケなどで行われている。

(25)を眉庇付背の破片と考えたので、武人埴輪を想定した。しかし、馬の鞍の可能性も考えられる。調整は磨滅が著しいため不明である。

草摺形埴輪(図版29、図30-29、表27)

1点出土している。小破片であるため断定できないが、横方向に平行線を引き、その間に左上がりの斜線を上下2段にずらせて施している。

短甲形埴輪(図版29、図30-27、28、表27)

2点出土している。ともに短甲の上部の破片で革紐覆輪の表現が認められる。(27)はさらに三角の地板を革で縫じて表現がなされており、いわゆる三角板革紐短甲を表したものであることが分かる。(28)は地板形態が分からぬが、覆輪に施された革紐の表現が上端面にも認められ、革紐で巻き縫じてある様子が表されている。

鞠形埴輪(図版29、図30-30、表27)

3点出土している。筒部の破片と背板の一部が出土している。筒部の周縁部の飾りを表現したと考えられる(28)は2本の縦方向の平行線の間に直交する横方向の分割線が施されている。背板の破片は張り出し部に表現される円弧紋を表現した破片と考えられる。円弧紋は粘土紐を貼り付けて表現している。

鳥形埴輪(図版28、図31-31、表27)

3点出土している。頭部と体部の大半が欠失しているため鳥の種類は分からぬが、円筒部の2段目の体部を表現したと考えられる前後の開き角から推測すると、鶴の可能性が高い。1段目と2

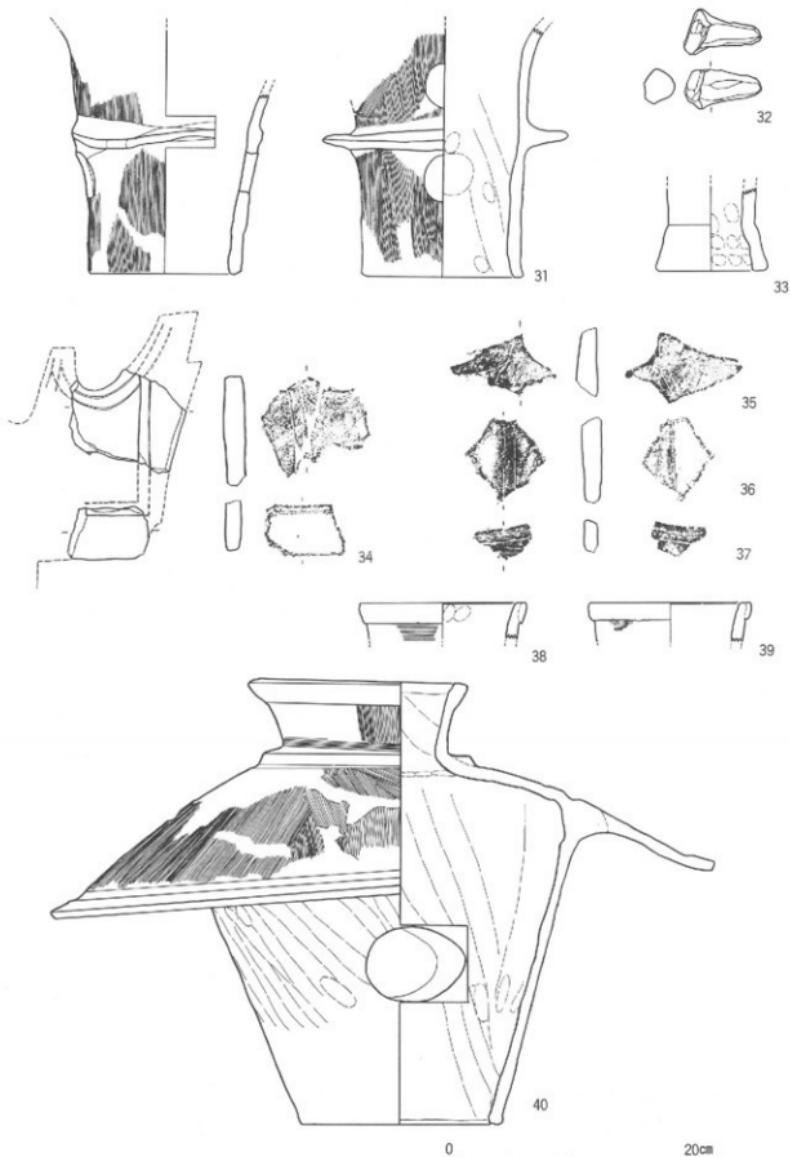


図31 形象埴輪

段目の間の凸帯は低い三角形に近い台形で、その凸帯の相対する位置(鳥の顔の位置を正面とすれば、左右の位置)に半円形の粘土板が貼り付けられている。これらに鳥の足としての表現が認められないが、足を表現したと考えておきたい。この半円形の粘土板と類似のものが、このほかに3点出土しているが、これらの内2点は前述のものより大きく、一組と考えられる。あと1点は前述のものと同じサイズであることから、大きめの鳥が1羽、小さめの鳥が2羽あったことが推測できる。

馬形埴輪(図版29、図31-32, 33、表27)

尾を表現したと考えられるもの(32)と脚部を表現したと考えられるもの(33)がある。尾は形態的には角状を呈していて、馬形埴輪の尾として通有の形ではあるが、体部との接合部にあたる部分の残存状況がきわめてきれいで、剥がれた痕跡を残していないことから、馬の尾と断定することに躊躇しないわけでもない。例えば、上部に切り込みなどが認められれば韓式土器の可能性を考えたりもできるが、今のところ、胎土、焼成、色調からみて形象埴輪の一部として考えておく。脚部を表現したと考えられる(33)は円筒形に段の付く形態で、段は蹄を表現していると考えられる。

蓋形埴輪(図版29、図31-34~40、表27)

立ち飾り部を除く部分が復元できたもの(40)、軸受け部分の破片(38, 39)、立ち飾り部の破片(34~37)があるが、それらの胎土、色調、焼成からみて4個体分の蓋形埴輪があったと推測できる。

軸受け部はすべて同じ形態で、口縁部に凸帯が貼り付けられている。立ち飾り部片(34, 35, 37)は胎土、色調が類似していることから、同一個体片と考えられる。また、(40)とも胎土、色調が類似していることから、この蓋形埴輪の立ち飾りの可能性が高い。

不明形象埴輪(図30-29、表27)

不明の形象埴輪は図示したもの以外に数十点ある。図示したような形態は1点だけである。図上の側面に貼り付けた平坦な板が、前面にも延びていた痕跡が残っているが、どのような形態であつたのか不明である。

(註)

1. 用語については下記の文献に従っている。なお、円筒埴輪の残存状況が悪いため、段数は1段落から数えている。

川西宏幸(昭和53年)「円筒埴輪総論」、『考古学雑誌』、第64巻、第2号、日本考古學會、1~164頁。

・瀧和夫(1968)、「吉山古墳群における大型古墳埴輪集成」、『大水川改修にともなう発掘調査概要・V』、大阪府教育委員会、65~98頁。

・上田 雄(1992)、「吉山古墳群出土円筒埴輪の様相」、『古代文化』、vol.44、明治書院、13~22頁。

2. 上田 雄 前掲書

3-3. 平安時代の出土遺物

1. 土壙 1 出土土師器(図版30、図32)

土壙 1 から土師器の皿2点、小皿41点が出土している。

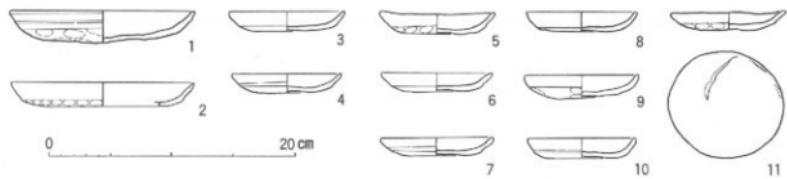


図32 土壌1出土の皿、小皿

皿は口径15cm前後、器高は2.7cm前後をはかる。2点とも同じ胎土で作られ、橙色を呈す。製作技術も同じで、口縁部に2回の横なで調整が施されているため、2条の凹帯が認められる。外底面に粘土の接合痕が残る。

小皿は口径9.0~10.3cm、器高1.3~2.2cmをはかる。形態からみると2つのタイプが認められる。口縁部が外反して、端部が丸くおさまり、口縁部と底部の境に段をもつものタイプと、口縁部がなだらかにたちあがって、端部が丸くおさまり、口縁部と底部の境が不明瞭なタイプがある。これらの製作技術をみると、両タイプとも成形後、底部内面に横なで調整を施した後、口縁部内外面にも横なで調整を施していることがわかる。このことからここでみられるタイプの差異は単に最終調整であるなで調整時の力のいれ方によって口縁部の形状、すなわち外反具合と体部の境の明瞭さと不明瞭さに影響していると考えられる。なお、調整は粗雑で小皿の大半に成形時の粘土の接合痕が認められる。すべて同じ胎土で、黄橙色を呈す。

3-4. 近世の出土遺物

1. 錢貨(図版30, 図33-1, 2)

2点出土している。共に「寛永通寶」であるが、1は直径26.7mm、厚さ0.15mmである。2は直径21.2mm、厚さ0.13mmである。



1



2



図33 錢貨

2. 土人形(図版30, 図34)

1点出土している。型合わせづくりの「狛犬」で、底部に直径2mmの孔があいている。類似品は大阪城旧三の丸地区から出土している(註1)。この大阪城出土の土人形から推測すると、本来は台座がついていたと考えられる。

(栗田 薫)

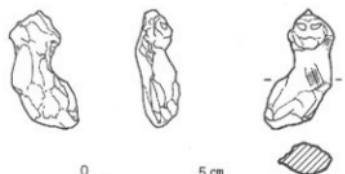


図34 土人形

(註)

1. 中川信作(1966)「大阪城の土人形とミニチュア製品」,『薪火』, 5

0大阪市文化財協会, 6~7頁。

4.まとめ

今回の調査地は、喜志遺跡の弥生集落が立地する中位段丘面を切り込む開析谷にあたる。1987年に実施した調査では、遺跡の中央を走る東高野街道に接して西側に幅3m、深さ1.5mを測る断面がV字形を呈する溝が検出されている。東高野街道の路肩改良工事に伴う調査でもこの溝を境に、南には弥生時代の遺構は確認されていないことと、その規模からみて集落を画する環濠的な性格をもつと考えられることから、この延長に該当する調査地で検出した溝2は自然地形を利用した環濠の一部とも推測される。今後、西側延長を確認することで、溝のもつ性格がより明確になるだろう。

また、今回の調査では、予想もしなかった多量の埴輪が出土した。調査地周辺の字名が「高塚」と称することから、その姿をとどめていない古墳があったことがうかがえ、古墳時代の喜志遺跡の一端を知ることができた成果は大きいといえる。

以上のような調査成果があったが、以下、整理過程で気づいた点を1. 弥生土器の所属時期とその特色、2. サスカイト製剝片の属性分析、3. 石川中流域、段丘上の埋没古墳と題してまとめてみる。

(中辻 亘)

4-1.弥生土器の所属時期とその特色

1.はじめに

今回の調査で出土した弥生土器の状況は(Ⅲ, 3-1)に述べた通りである。中河内の弥生時代中期(第Ⅲ～第Ⅳ様式)の土器編年は生駒西麓産の胎土をもつ土器(以下、生駒西麓産土器)の変化を基本に、平野部の土器と組み合わることによってそれらから画期を見いだし、かなり精緻な編年ができるつつある(註1)。喜志遺跡の所在する石川流域の弥生土器は従来から生駒西麓産土器と胎土は異なりながら形態的に類似することが指摘されていることから、前述の編年に対応させて所属時期を推測する事が可能である。

以下、喜志遺跡出土土器の中から生駒西麓産土器を抽出してその特徴を概観し、同時にそれ以外の土器、すなわち、在地の土器と生駒西麓産以外の搬入土器(以下、非生駒西麓産土器と呼称する)の状況を整理することによって、喜志遺跡出土土器(KS94)出土土器の所属時期とその特徴を確認しておきたい。

2.喜志遺跡(KS94地区)出土弥生土器の特徴

広口壺はAタイプとBタイプがあるがAタイプが圧倒的におおい。

広口壺Aは長頸のタイプが全く認められず、頸部の短いタイプで占められている。口縁部はほとんどが下外方に拡張するものである。喜志遺跡出土の生駒西麓産土器はすべてこのタイプで、口縁部は断面三角形を呈するもの、厚みをもたずく垂下するものがある。口縁部端面は簾状紋が施されたものが多いが、簾状紋と刻み目、波状紋と刻み目を組み合わせたりものほか、少量ではあるが無紋のものも散見する。非生駒西麓産土器も同様に口縁部が下外方に拡張するものが多いが、上下に拡張するもの、ほとんど拡張しないものがある。下外方に拡張するものは簾状紋だけもしくは、簾状紋と刺突紋の組み合せたものが多いが、波状紋、簾状紋と刻み目、波状紋と刻み目、刻み目

だけが施されたものの他、口縁部端面に簾状紋と刺突紋、口縁部上面に円形浮紋の施されたものがある。また、少量であるが無紋のものも散見する。紋様構成は生駒西麓産土器と非生駒西麓産土器の間にあまり大きな差異がないが、生駒西麓産土器に多く認められる刺突紋だけを施すものが生駒西麓産土器の中に認められなかつた。口縁部が上下に拡張するものは外面に凹線紋だけ、または外面に凹線紋、上面に列点紋を施すもの、その組み合わせにさらに凹線紋の上から縦線紋を付加するもの、外面に簾状紋だけ、もしくは簾状紋と刻み目、簾状紋と円形浮紋の組み合わせに上面に列点紋が加わるものその他、無紋のものもある。口縁部がほとんど拡張しないが面をもつものは量的に少ないが、斜格子紋が施されているものと無紋のものがある。

広口壺Bは生駒西麓産土器と非生駒西麓産土器には1点を除いて、基本的には製作技術に相違はない。すなわち、広口壺Aの上方に粘土を貼りたすか、広口壺Aほどしっかりした口縁部ではないが、それに近い状態まで作り上げた口縁部に粘土帯を貼りたす方法で作り上げられている。紋様は生駒西麓産土器は列点紋を2段に施すものが最も多く、その他、列点紋と簾状紋、簾状紋を2段、波状紋を2段、扇形紋を2段に施すものがある。非生駒西麓産土器は縦位置に扇形紋に近い列点紋を7段に配置したものを巡らせるもの他、簾状紋、波状紋を施すものがある。この他、その他の土器の中には口縁部の製作技術の異なるものが1点出土している。すなわち前述の様な擬山縁に粘土を貼り足すのではなく、口縁部を折り曲げ、上方にのばすことによって受け口状の口縁部を作り出す方法である。この方法によると、口縁端部は上方にのみ拡張し、下方に突出することはない。なお、この土器は口縁部下端に刻み目を施しているだけである。

生駒西麓産土器の広口壺の紋様の中で時期的な変化を顕著にあらわす簾状紋を取りあげてみると、頸部や広口壺Bなど広い範囲に施紋する場合、工具の幅が3.0cm前後で、施紋のストロークの短いものが多くなる。

石川流域の非生駒西麓産土器も簾状紋が多く用いられる地域であることはすでに指摘されているが(註2)、しかし、生駒西麓産土器と異なる点も注目しなければいけない。つまり、その施紋原体の幅の違いである。確かに、生駒西麓産土器の施紋原体幅が広がる時期に非生駒西麓産に施された簾状紋の中にも幅広になったものが認められるが、幅の広い工具で描いたのではなく、2つの工具を合わせて1つの紋様帶を構成したかのように紋様帶内に断絶を感じさせる線がはいったり、その間線の上下で縦線のわずかなズレが認められる場合がある。さらにこの幅広の簾状紋と同時に依然と幅の狭い(1.5cm前後)簾状紋が通用されていることから、間に合わせの施紋工具で生駒西麓産土器を模倣していると解釈しておきたい。この他、生駒西麓産土器では衰退はじめている彌描直線紋が非生駒西麓産土器では依然と施されていること、また、量は少ないが凹線紋の施された土器も認められる。

今回の調査で出土した生駒西麓産土器には確認できなかつたが、無紋化現象の指標ともされている口縁部に刺突紋だけを施した広口壺Aが非生駒西麓産土器の中に認められた。

広口壺以外の器種では無頸壺や鉢にみられる段状口縁の盛行、それらの器種に多用される列点紋に似た斜線紋、そして棒状浮紋の出現。これらは生駒西麓産土器と非生駒西麓産土器に等しくみとめられる状況である。非生駒西麓産土器だけにみられるものとしては器台と蜻窓がある。また、高杯は生駒西麓産のものが少ない。

3. 小結

以上のことから、今回の調査で出土した土器の所属時期は広口壺Bの減少と生駒西麓産土器に認められる施紋幅の広い簾状紋の盛行、および棒状浮紋の出現、さらに無紋化現象がまだ定着していないことから、濱田氏の編年^(註3)の第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式古段階に比定できると考えておきたい。

今回は胎土分析を行わず、肉眼による分類であったが、今後、科学的分析を行うことによって生駒西麓産と類似の非生駒西麓産の確実な弁別とともに、非生駒西麓産から在地産の抽出を行い、今回提示した生駒西麓産と非生駒西麓産の間に認められる類似点と差異の検証とともに、在地産の特色を明らかにしていきたい。

(栗田 薫)

(註)

- 以下の中文献によって生駒西麓産土器の特徴をとらえた。

濱田延光(1993)「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『入府宮弥生文化博物館研究報告第2集』。弥生文化博物館、111~126頁。

国分政子(1992)「河内地方弥生中期土器の検討—第Ⅲ様式広口壺形土器の地域性と変遷」、『長岡京古文化論叢Ⅱ』、353~364頁。

三好孝一(1993)「河内における弥生中期土器様相—危井遺跡を中心にして—」、『第11回 近畿地方埋蔵文化財研究会資料』、06大阪文化財センター。

- 佐原 真(1980)「河内の土器」、『東山遺跡』、大阪府教育委員会、65~74頁。

井藤晩子(1987)「畿内の櫛撫紋土器」、『弥生文化の研究』、4、巻山閣、83~88頁。

- 濱田延光 前掲書。

4-2. 整地層出土のサヌカイト製剝片の属性分析

1. はじめに

喜志遺跡(K S94地区)の石器資料は溝1、溝2、旧水田、床土の他、整地層から検出されているが、その中でもまとまって出土した調査区南東端の整地層のものに限って分析する(註1)。

洗浄フルイかけを行って得られた石器を除くサヌカイト製の石片は総数97,245点を数える。まず、単純最大長(第一長)30.0mmを境に2つに分類した。それらの内訳は30.1mm以上が6,331点、30.0mm以下のものが90,914点で、後者の小型品はすべて剥片である。次に30.0mm以下の剥片を10mmごとの階級に分類した。それらの大きさの内訳は10mm以下が39,432点(40.5%)、10.1mm以上20.0mm以下が43,284点(44.5%)、20.1mm以上30.0mm以下が8,198点(8.5%)である。なお、30.1mm以上のもの6,331点の内訳は細部調整剥片208点、剥片5,953点、石核170点である。

出土点数の多いことと、さらに10.0mm以下の微細剥片が40.5%を占めていることは、石器製作が確実に行われていたことを裏付けるが、出土地が整地層という極めて不利な検出状況であるため、その場所での製作状況を分析することはできない。しかし、共伴する土器の土器型式が第Ⅲ様式新段階~第Ⅳ様式古段階と、きわめて限られた時期に限定できることから、製作技術に関するデータを提示することは意味があると思われる。そこで対象を30.1mm以上のものに限定して分析してみる。なお、30.1mm以上としたのは、石器の素材として用いられる剥片の可能性のあるものの剥離

最大幅 最大幅 組成	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60~64	65~69	70~74	75~79	80~84	85~89	90~94	95~99	100~104	105~109	合計
5~9																					7
10~14		5	19	11			2														81
15~19	2	26	47	21	8	4	1	1													103
20~24	19	89	148	149	19	6	4	2	2												274
25~29	4	28	36	148	126	36	25	18	5	6	2		2								510
30~34	71	96	145	137	106	82	31	19	9	10	5	1	1	2	1	1					637
35~39	5	29	67	104	68	36	22	22	16	7	9	5	1								405
40~44	4	10	35	52	46	25	23	16	4	6	4	3	1								362
45~49	1	4	17	15	21	25	27	15	9	4	6	2	1	1							157
50~54		3	15	14	14	11	8	10	6	5	1		2								103
55~59	1	8	11	15	15	11	5	4	2	2	1		1								29
60~64	2	1	1	7	3	6	1	2	1	1	2		2	1	1						40
65~69	1		4	4	4	5	3	1	5	2	1		2								32
70~74		1	3	4	2	1	4	2	1				2	2							22
75~79							2	1	1												5
80~84						2	1					1									5
85~89					1	1				1	1	2		1							4
90~94						1				1			1								3
95~99							1														2
100~104		1	1								1							1			3
105~109																					2
110~114																					1
合計	80	175	582	602	576	330	261	144	1	86	56	39	25	14	10	12	4	4	2	4	2,707

表6 最大長と最大幅の相関(実数)

状況を分析することに主眼をおいたからである。しかし、実際には単純最大長30.1mm以上と限定しただけで、その幅を問わなかつたため抽出した剥片の中には石器の素材として不十分なものも含まれている。また、それぞれの大きさでのデータを明確にするため、それらの中でも完形品か、ほぼ完形品に資料を限定した。ただし、細部調整剥片は単純最大長30.1mm以上のものすべてを対象に含めた。

2. 属性分析

前述の資料操作を行った剥片2,706点と細部調整剥片208点の合計2,914点分の分析結果をまとめた。なお、分析内容によって資料総数が異なるのは、前述の資料の中からそれぞれの分析に耐えるものだけさらに抽出したためである。

剥片の大きさ

総数2,702点の剥片の最大長と最大幅を5mmごとの階級に分け、その相関関係をあらわしたのが表6である。それによると最大長が20mm~34mm、最大幅が25mm~39mmの大きさの剥片が多く出土している。そしてそれら分布は最大長25mm~34mm、最大幅25mm~34mmのほぼ正方形状の剥片を中心にして、長さが長くなればなるほど縦に長い剥片が取れ、長さが短くなればなるほど横に長い横形剥片になっている。そのことは最大長が19mm以下の剥片210点すべてが横形剥片であること、また、長さが80mmを越える大きな剥片27点の内25点が形態分類的にいう「剥片」で占められていることからも見て取れる。

表7は前述の剥片の長幅示数(長/幅)と厚幅示数(厚/幅)の相関関係を示したものである。それによると横長で厚みの薄いものが圧倒的に多いことが分かる。また、厚さが厚くなればなるほど、縦に長い剥片が取れていることが分かる。長幅示数は0.6~1.09に、厚幅示数は0.1~0.29に分布の集中がみられる。また、長幅示数は0.6~1.09の集中範囲からバランスよく分布の広がりが読み取れるのに対して、厚幅示数は0.1~0.3のものが全体の約90%を占め、0.4以上になると剥片の数は激減する。このことから、ほぼ均質な厚みの剥片を取ることを目的にして剥離作業を行っていたと解釈で

厚幅示数		横幅示数											合計		
	0.1未満	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	2.0	2.1	
0.3		4	8	1	1									14	
0.4		31	12	6	2									51	
0.5	2	92	61	16		1	1				1			174	
0.6	3	133	89	20			1							246	
0.7	1	134	144	32	4	3			2					318	
0.8	3	110	149	36	9	1								310	
0.9	2	102	132	47	17	1			1					305	
1.0		72	113	43	10	1				1				240	
1.1	4	64	86	41	9	9					1			214	
1.2	1	46	61	47	11	1					1	168			
1.3	4	22	72	36	17	3			1					155	
1.4	1	21	41	25	11	4	1	1	1					106	
1.5	1	14	29	21	6	6	1							79	
1.6	1	8	23	22	11	3	1		2					71	
1.7		4	16	11	5	6	1							44	
1.8		6	10	18	8	2	1	1						46	
1.9		2	8	9	3	4				1				27	
2.0		1	9	7	4	3	1			1				26	
2.1		1	8	6	5	1								21	
2.2		1	1	3	4	2	2							13	
2.3				5	2	2								9	
2.4			3	4	4	2								13	
2.5	1		1	3	1									6	
2.6		2	2	3	1	2	1	1						10	
2.7		1	3	1	1	1								7	
2.8			1		1	2								4	
2.9		1		2	1					1				5	
3.0				1		1								2	
3.1				1	1					1	1			4	
3.2			1							1				2	
3.3					1									1	
3.4							1							1	
3.5					1	1	1							3	
4.0				2										2	
4.5				1										1	
4.6					1					1				2	
4.9						1				1				1	
6.1										1				1	
合計		23	872	1080	468	151	62	17	6	7	6	4	1	1	2702

表7 長幅示数と厚幅示数の相関(実数)

縦断面形—三角形、四角形、多角形、直角三角形、それらのカテゴリーごとの点数は表8、9、10で、それらの数比をグラフに示したのが図35、36、37である。

平面形	円形・部分円形	三角形	四角形	多角形	直角形	合計
横幅示数						
横幅示数	31	130	510	887	58	1676
縦幅示数	16	75	369	557	37	1054
石刃状剥片	2	11	58	29	5	109
合計	49	216	991	1483	100	2829

表8 平面形と形態分類(実数)

(単位: %)

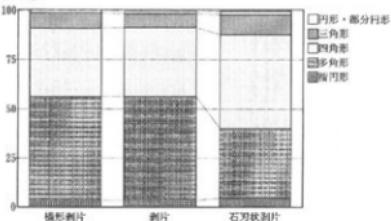


図35 平面形と形態分類(百分比)

きる。

形態

総数2,839点の剥片(以下、細部調整剥片も含む)を形態別に分類した。それらの内訳は横形剥片1,676点(59.0%)、石刃状剥片109点(4.0%)、剥片1,054点(37.0%)である。次にそれぞれの形態を平面形、中央断面形、縦断面形の属性別に以下のカテゴリーで分類した。

平面形—円形、部分円形、三角形、四角形、多角形、橢円形。

中央断面形—レンズ形、弓形、四角形、多角形、等脚台形、二等辺三角形、不等辺、部分円形。

まず、平面形をみてみる(表8、図35)。それぞれの剥片の形態に関係なく平面形の85%前後を多角形と四角形で占める。多角形と四角形の間にある差異は角が4つか5つ以上かというだけで剥片剥離を行う中で大きな意識的な差はない。そのことを考慮にいれると自由な剥片剥離の生産物であることが指摘できる。円形・部分円形としたのは先行剥離面がほとんど原面でおおわれているもので、礫面から初期の段階にとられたものと考えられる。

中央断面形(表9、図36)も剥片の形態に関係なく、不等辺三角形と四角形で70~80%近くを占める。この断面形態は先行剥離面に1~2本の稜が通ると一般的に考えられるが、平面形にこの稜が反映されていないことをみると、平面形が示して

いたように自由な剥片剥離の生産物であることをより確実に裏付けている。なお石刃状剥片の中央断面形に

二等辺三角形が20%認めら

れ、また、平面形に三角形を呈するものが10%を占めているのは、剥片の長さと背後の関係を示すものとして従来から指摘されているとおりである。

縦断面形(表10、図37)の約半数が四角形を呈することは、剥片の約半数が先端部がいわゆるフェザーを呈するものでないことを示している。このことは通常、板状の剥片の存在を推測させるが、しかし分析対象の剥片の中に大きな板状の剥片がそれほど多く認められないことから、剥離時の事故として折れ面、段、ヒンジ・フラクチャ、ウットラ・バセが頻繁に生じた可能性を考えなければいけない。

打撃角

打撃角は5°単位で計測した。総数2,225点の剥片の形態分類別打撃角の点数は表11で、それらの度数分布を図38に示した。それによると打撃角と剥片形態との間にそれほど密接なつながりはなく、どの形態の剥片でも105度から120度あたりに大きな山がみられ、その中でも110度に大きな集中がみられる。また90度に小さな集中がみられることも剥片形態に関わりなく認められる。これは求める形が打撃角に支配されているのではなく、サヌカイトという石質に左右されている結果と判断することができる。あるいは従来から「打撃角」と呼ばれてきた打面と主剥離面がなす角度は、その剥片がとれるときに割れていった石の割れに支配された結果ということになろうか。

次に打撃角と打面形態の相関関係をみてみる。打面形態は原面上打面、剥離面打面、調整打面、口唇状打面の4つのカテゴリーで分類した。総数2,242点分の打面形態別打撃角の相関関係を集計したものが表12で、それらの度数分布をグラフにしたもののが図39である。それによると口唇状打面を除く、他の打面形態をもつ剥片には90度にまず小さな山がみられる。また、原面上打面をもつも

中央断面形 形態分類	レンズ形	弓形	四角形	多角形	等脚台形	二等辺二 角形	不等辺三 角形	部分円形	合計
鏡形剥片	215	20	516	125	12	56	655	76	1675
鉄片	24	15	320	38	2	61	500	49	1050
石刃状剥片	4	0	27	2	1	22	50	3	106
合計	233	35	863	155	15	139	1205	119	2834

表9 中央断面形と形態分類(実数)

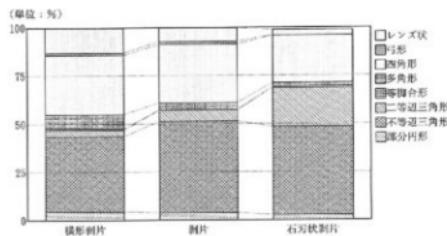


図36 中央断面形と形態分類(百分比)

横断面形 形態分類	三角形	四角形	多角形	直角三角形	合計
鏡形剥片	585	843	265	43	1626
剥片	333	582	119	20	1054
石刃状剥片	31	52	20	6	109
合計	949	1477	344	69	2839

表10 縦断面形と形態分類(実数)

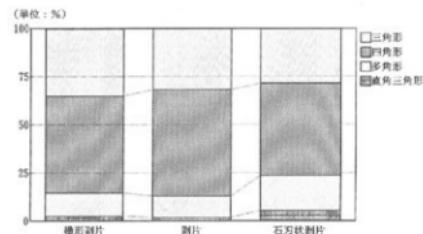


図37 縦断面形と形態分類(百分比)

打撃角(度)	機械剥片	剥片	石刀状剥片	合計
50-54	2	0	0	2
55-59	4	0	0	4
60-64	3	4	0	7
65-69	8	19	0	36
70-74	8	9	1	18
75-79	3	4	1	8
80-84	2	6	0	15
85-89	0	2	1	3
90-94	79	51	9	139
95-99	45	15	1	62
100-104	197	54	16	211
105-109	185	150	14	285
110-114	223	144	13	380
115-119	166	115	7	308
120-124	298	109	9	316
125-129	130	26	2	158
130-134	105	41	5	142
135-139	32	22	0	54
140-144	22	2	0	24
145-149	5	4	0	9
150-154	6	2	0	8
155-159	1	1	0	2
合計	1363	792	73	2225

表11 打撃角と形態分類

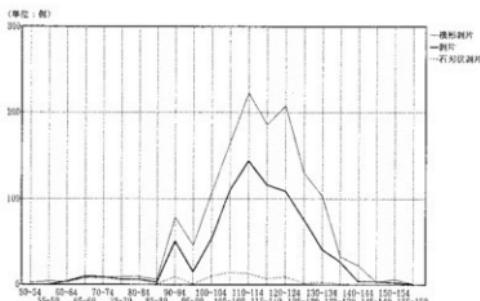


図38 打撃角と形態分類

打面形態	原面上	口唇状	調整	剥離面	合計
50-54	2	0	0	0	2
55-59	3	0	0	-	3
60-64	4	0	1	2	7
65-69	14	0	1	3	18
70-74	7	0	1	10	18
75-79	11	0	2	8	21
80-84	10	0	0	5	15
85-89	3	0	0	2	5
90-94	53	0	11	27	139
95-99	46	0	5	17	62
100-104	92	2	28	50	172
105-109	165	0	52	23	250
110-114	163	1	39	131	354
115-119	106	6	61	144	217
120-124	93	1	81	145	327
125-129	50	11	61	91	212
130-134	28	7	39	82	147
135-139	16	3	34	5	54
140-144	10	5	5	12	25
145-149	6	0	4	2	7
150-154	4	0	0	4	8
155-159	2	0	0	0	2
合計	918	44	439	841	2924

表12 打撃角と打面形態

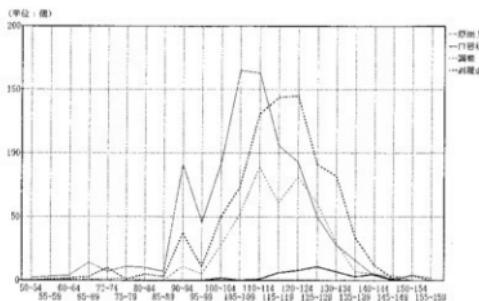


図39 打撃角と打面形態

のは100度から120度に大きな山が認められ、前述の剥片の打撃角の一般的な分布の山と一致する。それに比べて剥離面打面のものには110度から125度に、調整打面をもつものには105度から115度から125度に2つの山がみられ、原面上打面のものの山より大きい打撃角に集中していることがわかる。また口唇上打面を呈する剥片は120度から130度というさらに大きい打撃角に分布の山をもつ。これらのこととは表面形態が不安定な原面を打面とするときの打撃角は変異幅が大きいといえるが、打面調整のみられる剥離面打面、調整打面のものがより大きい打撃角、そしてさらに意図的な剥離と考えさせる口唇状打面をもつ剥片が最も大きな打撃角を示すことから、石を割り取る時の意識が打撃角に反映しているとも可能である。しかし、一方、安山岩の打撃角は110度から130度に分布の山があるという指摘がなされていることから考えると、製作者の意識だけでなくサヌカイトの石割れの性質を反映していることも考慮にいれ、剥片の大きさと平面形態なども含めて判断しなければならないだろう。

次に打撃角と打面の平面形の相関関係をみてみる。打面の平面形を三角形、四角形、部分円形の

打面平面形	三角形	四角形	部分円形	合計
50-54	0	2	0	2
55-59	1	3	0	4
60-64	1	4	2	7
65-69	5	11	2	18
70-74	0	22	6	28
75-79	2	9	7	18
80-84	4	11	1	16
85-89	4	5	1	10
90-94	29	94	18	141
95-99	15	28	1	44
100-104	45	125	3	173
105-109	79	125	2	206
110-114	81	268	16	365
115-119	62	243	11	316
120-124	41	224	13	328
125-129	57	144	13	213
130-134	44	98	7	149
135-139	10	44	7	61
140-144	3	20	3	26
145-149	1	6	0	7
150-154	2	9	1	8
合計	565	1582	124	2551

表13 打撃角と打面平面形

3つのカテゴリーに分類し、総数2,251点の打面平面形別打撃角の相関関係を集計したものが表13で、それらの度数分布をグラフにしたもののが図40である。どの打面平面形も打撃角の山は100度から125度にあり、打撃角と打面平面形の間に特定の結びつきはない。

次に打撃角と打面の縁部形の相関関係をみてみる。打面縁部形は四形、水平形、凸形の3つのカテゴリーに分類し、総数2,255点の打面縁部形別打撃角の相関関係を集計したものが表14で、それらの度数分布をグラフにしたもののが図41である。どの打面縁部形も打撃角の山は100度から125度にあり、打撃角と打面縁部形の間に特定の結びつきはない。ただし、凸形の分布状況が先にみた調整打面と打撃角の相関関係でみた分布状況と類似する。調整打面が凸形をなす打面形態になることが影響を与えている可能性がある。

次に打撃角と打面の傾きの相関関係をみてみる。打面の傾きは水平、裏側に傾斜、裏側に傾斜の3つのカテゴリーに分類し、総数2,255点の打面傾き別打撃角の相関関係を集計したものが表15で、それらの度数分布をグラフにしたもののが図42である。約85%の打面は裏側に傾斜し、打撃角も100度から125度に分布の山をもち、110度で最高に集中する。打面が水平形のものは分布の山が90度に

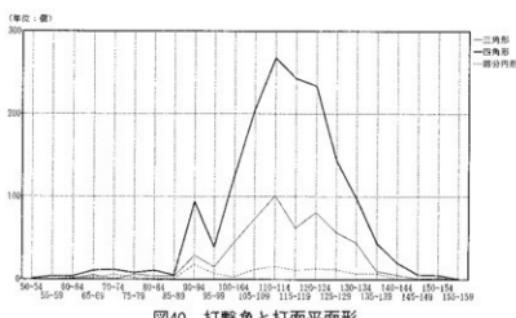


図40 打撃角と打面平面形

打面縁部形	四形	水平形	凸形	合計
50-54	0	2	0	2
55-59	1	3	0	4
60-64	1	4	2	7
65-69	4	9	5	18
70-74	2	11	5	18
75-79	3	12	2	17
80-84	9	19	1	16
85-89	2	6	2	10
90-94	6	114	33	151
95-99	1	44	17	62
100-104	17	115	41	172
105-109	60	186	66	292
110-114	43	234	108	385
115-119	53	194	70	317
120-124	52	194	62	328
125-129	61	117	56	213
130-134	31	45	36	112
135-139	19	32	19	61
140-144	3	16	7	26
145-149	1	5	1	7
150-154	1	1	0	2
合計	328	1298	534	2256

表14 打撃角と打面縁部形

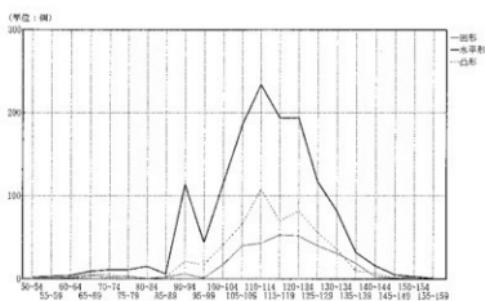


図41 打撃角と打面縁部形

打撃角の傾き		水平	直角	裏側	合計
打撃角(度)	件数				
30~54	0	2	0	2	2
55~59	1	3	0	4	4
60~64	1	5	1	7	7
65~69	0	16	2	18	18
70~74	0	18	0	18	18
75~79	9	16	0	15	15
80~84	2	13	1	16	16
85~89	1	8	1	10	10
90~94	132	2	7	141	141
95~99	29	1	32	62	62
100~104	23	1	149	173	173
105~109	29	2	265	292	292
110~114	24	3	358	385	385
115~119	14	2	201	217	217
120~124	10	1	217	228	228
125~129	3	6	216	223	223
130~134	1	6	168	169	169
135~139	0	6	61	61	61
140~144	0	6	25	26	26
145~149	0	6	7	7	7
150~154	1	6	7	8	8
155~159	0	0	2	2	2
合計	267	93	186	255	255

表15 打撃角と打面の傾き

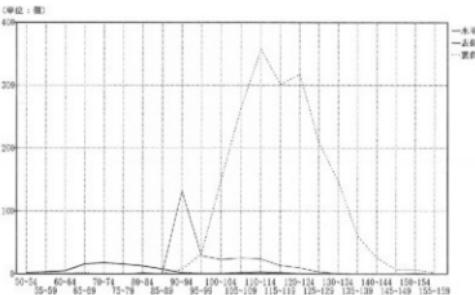


図42 打撃角と打面の傾き

集中する。打面が表側に傾斜するものは分布の山が65度から75度にある。このことは打撃角が打面と主剥離面の成す角度を計測していることからすれば自明のことであるが、裏側に傾斜するものが85%を占めていることから、この傾きがサスカイトを割り取りやすい、あるいはサスカイトが一般に割れていくときの角度であることを示しているとも考えられる。

以上の結果、打撃角が剥片に特別な結びつきをみせたのは打面形態と打面の傾きで、打面の平面形も縁部形も打撃角に影響を及ぼしていないことがうかがわれた。すなわち、剥離に際して打面形態を整えることは目的的な剥片剥離を行う上で、重要な要素になるかもしれないが、打面を裏側に傾斜させた角度でなければ剥片剥離が行えない、つまり110度という打撃角がサスカイトの最も割り取りやすい角度を示しているといえる。

打面形態	ハジケ	原面上	口唇状	線状	調整	点状	剥離面	合計
切入(%)	4	8	1	1	9	3	12	26
15~19	37	37	14	45	5	56	178	178
20~24	36	6	35	78	14	142	380	380
25~29	76	168	37	64	127	15	175	315
30~34	75	168	14	69	81	21	186	300
35~39	36	135	2	22	37	19	54	345
40~44	18	89	3	14	27	3	69	218
45~49	6	47	2	14	3	41	46	148
50~54	46	5	5	11	1	24	10	86
55~59	3	46	0	1	5	2	22	60
60~64	2	24	0	1	3	1	11	42
65~69	1	17	1	1	1	8	30	30
70~74	3	12	0	6	0	1	12	31
75~79	1	4	0	0	0	0	5	12
80~84	0	9	0	0	1	0	9	10
85~89	0	5	0	0	0	0	0	5
90~94	0	1	0	0	0	0	0	3
95~99	0	2	0	0	0	0	0	2
100~104	0	3	0	0	0	0	1	4
105~109	0	1	0	0	0	0	0	1
合計	226	922	44	210	423	90	542	2882

表16 打面形態と最大長(実数)

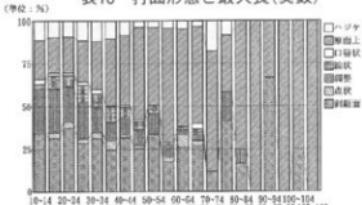


図43 打面形態と最大長(百分比)

打面

打面形態が判断できるものをハジケ、原面上打面、口唇状打面、線状打面、調整打面、点状打面、剥離面打面の7つのカテゴリーに分類した。総数2,832点の打面形態をみてみると原面上打面が最も多く、33.1%を占める。次に剥離面打面が29.8%、調整打面が15.6%と続く。口唇状打面は意図的な剥離行為に対応する打面なので除外するとして、残りのハジケ、点状打面、線状打面はあわせて20%程度である。これらは剥片が石核に用意された打面をもつていかなかったものであるが、剥離行為の意図に結びつく結果かもしれない。原面上打面が多い

ことは、原縞の皮表面を剥いだ時に生じる剥片が多いことを語つてよい。また先に除外した口唇状打面は両面調整の石器の細部調整時に生み出されることが多く、いわゆるポイント・フレイクと呼ばれる剥片の打面に多くみられる形態である。それらが1.5%であることもこの資料の性格を示している。

そこで打面形態と最大長の相関関係をみてみる。最大長を5mmごとの階級に分類し、打面形態をハジケ、原面上打面、口唇状打面、線状打面、調整打面、点状打面、剥離面打面の7つのカテゴリーに分類して、総数2,822点の最大長と打面形態の相関関係を集計したものが表16で、それらの数比をグラフにしたもののが図43である。それによると最大長20mm～39.9mmの剥片が全体の69%を占めるが、それらの剥片についてはどの打面形態も同じような比率を示し、特定の打面との結びつきはない。しかし、打面形態を主体に剥片の最大長をみた場合、点状打面、線状打面、調整打面、ハジケに分類される打面形態の剥片の80%は39.9mm以下である。それに対して50mmを越える剥片の比率が20%を越えるのは原面上打面の剥片だけである。次に10%を越えるものに剥離面打面の剥片があげられるが、他はほとんどが5%前後である。このことは大きさのある原縞などから割り取りを始めれば、大きな剥片が取れるのは自明のこと、打面調整をおこなえばおこなうほど石核は小さくなり、割り取れる剥片も小さくなること、ハジケのような事故的な剥離はいうまでもなく、石核の端をかすめるようにしてたたいて薄い剥片を取ろうとした結果できる点状打面や線状打面のような打面形態には長さの長い剥片が取れないことを考えさせてくれる。なお、点状打面が生じることに間接打撃の可能性をみると、分析対象にした剥片の大ささからみて無理があると思われる。

次に打面形態と剥片の形態分類の相関関係をみてみる。形態分類は横形剥片、剥片、石刃状剥片の3つのカテゴリーに、打面形態はハジケ、原面上打面、口唇状打面、線状打面、調整打面、点状打面、剥離面打面の7つのカテゴリーで分類した。総数2,786点の形態分類と打面形態の相関関係を集計したものが表17で、それらの数比をグラフにしたもののが図44である。どの打面形態をとっても横形剥片の比率が高いが、細かくみると2つの傾向があらわれている。すなわち、横形剥片の比率の基準線を60%においていた場合、点状打面、線状打面、原面上打面、ハジケのものは下に、剥離面打面、調整打面、口唇状打面のものは上になるという傾向である。また、60%を越える後者の打面形態のものもさらに細かくみてみると、横形剥片の比率が最も多いものが調整打面で、次に口唇状打面、そして剥離面打面をもつものが続く。以上のことから判断すると、サヌカイトの石質から横形剥片が取れやすいことはすでに指摘されているし、また、この分析結果にもあらわれているが、製作者の意識が最も反映していて、かつ素材剥片として使用できる厚さの薄い大きな剥片が取れる可能性のある打面形態であると考えられる調整打面および剥離面打面に、横形剥片がより多くみられるといえよう。製作者の意識の中にも石器の素材に使える剥片としての横形剥片を目的として剥

形態分類 打面形態	剥片				合計
	横形剥片	剥片	石刃状剥片	合計	
ハジケ	184	117	11	206	206
原面上	495	271	41	707	707
口唇状	35	13	1	44	44
線状	118	88	5	211	211
調整	252	107	5	364	364
点状	44	30	5	79	79
剥離面	313	294	24	631	631
合計	1869	1028	106	2786	2786

表17 打面形態別の剥片の形態分類(実数)

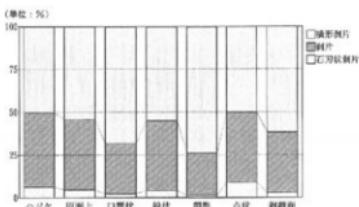


図44 打面形態別の剥片の形態分類(百分比)

離がなされていたことは否定できないであろう。

次に打面形態と打点位置の相関関係をみてみる。打点位置は右、右端、左、左端、中央の5つのカテゴリーに、打面形態は原面上打面、口唇状打面、調整打面、剥離面打面の4つのカテゴリーで分類した。総数2,242点の打点位置と打面形態の相関関係を集計したものが表18で、それらの数比をグラフにしたのが図45である。それによると打面形態と打点位置の間に特定の結びつきはなく、それぞれの比率で似かよった傾向を示している。また、打点位置に打撃者の意識が反映していると考えられるのは右端と左端にくるものが考えられるが、それらの比率を合計しても12.0%しかない。また、これらの点数から垂直割れのものを差し引くとその実数はさらに少なくななる。これらのことから製作者の意識としては中央で打撃を行おうとしているが、実際には左右へのずれが認められると解釈するのがよいであろう。

表18 打面形態別の打点位置の分布(実数)

打面形態	打点位置					合計
	右	右 端	左	左 端	中 央	
原面上	263	54	196	64	484	800
口唇状	19	9	5	2	42	45
調整	95	12	105	11	295	428
剥離面	399	60	133	68	315	832
合 計	824	126	500	145	943	2242

図45 打面形態別の打点位置の分布(百分比)

打面の傾きと形態分類(実数)

打面の傾きと剥片の形態との相関関係をみてみる。

形態分類は横形剥片、剥片、石刃状剥片の3つのカテゴリーに、打面の傾きは水平、表側、裏側の3つのカテゴリーで分類した。総数2,229点の剥片形態と打面の傾きの相関関係を集計したものが表19で、それらの数比をグラフにしたものが図46である。それによるとどの剥片形態であっても最も多いの打面が裏側に傾くもので、次に水平なもの、そして表側に傾くもの順になるが、打面の傾きを主体にした場合、横形剥片では裏側に傾くものと水平なものに、剥片では表側に傾くものとの結びつきが強く、石刃状剥片は裏側に傾くものとの結びつきが少ないという傾向がでている。

このことは打面の傾きが表側に傾くほど、縦に長い剥片がとれやすいようにも考えられるが、全体の個数との比率からみると必ずしもそうとはなっていないので縦に長い剥片類の分析例の増加を待って判断しなければならない。

打面の傾きと平面形の相関関係をみてみる。

平面形はすでにみたように円形・部分円形、三角形、四角形、多角形、楕円形の5つのカテゴリーで、打面の傾きは前述と同じく3つのカテゴリーで分類した。総数2,259点の平面形と打面の傾きの相関関係を集計したものが表20で、それらの数比をグラフにしたものが図47である。それによるとどの平面形であっても、最も

形態分類 打面の傾き	剥片			合計
	横形剥片	剥片	石刃状剥片	
水 平	182	91	34	297
表 側	89	29	5	123
裏 側	134	664	50	849
合 計	305	754	99	2229

表19 打面の傾きと形態分類(実数)

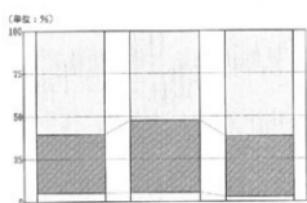


図46 打面の傾きと形態分類(百分比)

多いのが、打面が裏側に傾くもの、次に水平なもの、そして表側に傾くものの順をとる。しかし、打面の傾きを主体にみた場合、最も多く出土している多角形のものが裏側に傾くものと水平なものに、次に多い四角形のものでは表側に傾くものとの結びつきが強く、円形・部分円形と楕円形のものは表側に傾くものと、三角形のものは裏側に傾くものと結びつく傾向が認められる。これらの中で、三角形の平面形態に注目しながら、すでにみてきた平面形と剥片の形態分類の相関関係と、先にみた打面の傾きと剥片の形態分類の相関関係の結果を合わせみると、食い違う結果が生じている。すなわち、平面形と剥片形態の相関関係では三角形を呈するものと石刃状剥片、打面の傾きと剥片形態との相関関係では縦に長い剥片と表側に傾く打面という結びつきを見せていたのに、ここでは三角形をとるものと裏側に打面が傾くものとの結びつきを見せている。これらのことと総合して判断すると、打面の傾きが、剥片の形態や、平面形に影響することなく、打撃角のところでみたように、単にサスカイトの石割れの性質がその傾きを求めていくと解釈すべきかも知れない。

バルブの発達

バルブの発達は全体的にみて発達をみないものが多い。発達度を極大発達、発達、やや発達、発達なし、の4つのカテゴリーに分類すると極大発達と発達を合わせても全体の20%しかない。

そこでバルブの発達度と最大長の相関関係をみてみる。最大長を5mmごとの階級に分類し、バルブの発達度は前述と同じく4つのカテゴリーに分類した。総数2,841点の最大長別バルブの発達度の点数を集計したものが表21で、それらの数比を示したものが図48である。それによるとどのカテゴリーであっても、長さが20.0mm~35.0mmの剥片が多く、20.0mm以下の剥片についてはバルブの発達しないものが圧倒的に多い。これらのことから、小さな剥片については剥片の大きさがバルブの発達に影響して

平面形	円形・部分円形	三 角 形	四 角 形	多 角 形	椭 圆 形	合 计
打面が裏側に傾く	29	89	123	8	35	209
表側に傾く	6	5	40	27	7	93
水平	31	147	616	191	62	1017
合 计	42	175	799	1271	77	2259

表20 打面の傾きと平面形(実数)

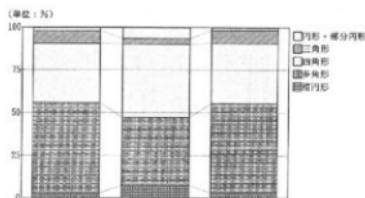


図47 打面の傾きと平面形(百分比)

最大長(ミリ)	極大発達	発達	やや発達	発達なし	合計
10~19	1	6	17	11	35
20~29	6	31	92	59	178
30~39	12	47	122	107	388
40~49	20	76	290	225	611
50~59	29	75	270	176	600
60~69	30	27	142	121	350
70~79	15	43	89	73	230
80~89	15	36	62	58	166
90~99	8	29	34	31	102
100~109	5	15	21	29	68
110~119	6	7	19	12	44
120~129	4	5	9	12	30
130~139	1	5	8	5	18
140~149	1	3	2	2	8
150~159	2	5	5	3	12
160~169	9	3	9	3	24
170~179	1	1	9	0	2
180~189	1	0	1	0	2
190~199	0	0	1	2	4
200~209	0	0	2	0	2
合計	148	422	1286	1053	3841

表21 バルブの発達度と最大長(実数)

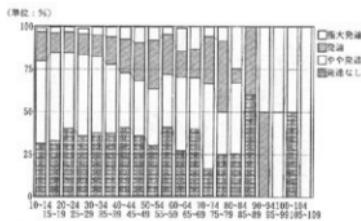


図48 バルブの発達度と最大長(百分比)

打面形態		バルブの発達度				
	極大発達	発達	やや発達	発達なし	合計	
ハジケ	6	8	32	140	200	
原面上	76	105	389	272	930	
口唇状	8	1	18	25	44	
線状	5	38	27	126	216	
調整	16	71	212	140	439	
点状	2	2	27	48	81	
剥離面	44	147	282	201	674	
合計	148	422	1190	1023	2810	

表22 打面形態とバルブの発達度(実数)

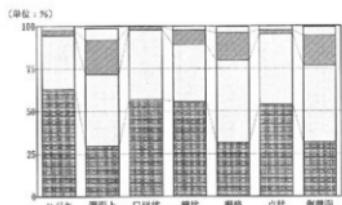


図49 打面形態とバルブの発達度(百分比)

に示したのが図49である。それによると点状打面、線状打面、口唇状打面、ハジケと分類される打面をもつものの90%、もしくは95%以上が「発達なし」と「やや発達」とされるバルブ発達度を呈する。また、原面上打面、剥離面打面、調整打面もその70%以上が同じカテゴリーのバルブの発達度を示すが、「極大発達」と「発達」とされるものの合計が20%~30%あり、原面上打面、剥離面打面、調整打面をもつものの順にその数が減ることがわかる。これらのことから、通常大きな剥片が取れていない前者のような打面形態をもつものにバルブの発達がみられず、調整打面をもつものを別にして、ある程度の大きさの剥片も取れている後者のような打面形態をもつものにバルブの発達がみられるものが多いことは、打面形態がバルブの発達に影響するのではなく、先にみたように剥片の大きさと打撃のされ方、そして石の目に影響されていることを裏付けていよう。

原面

最大長(cm)	0	25	40	55	70	85	100	合計
10~14	31	2	0	0	1	1	35	
15~19	48	10	6	8	5	8	140	
20~24	19	11	9	12	12	17	80	
25~29	52	50	15	7	12	18	624	
30~34	69	55	22	7	10	19	694	
35~39	262	43	21	7	12	15	359	
40~44	158	17	17	7	6	19	291	
45~49	98	21	15	8	9	11	152	
50~54	72	13	7	5	9	2	135	
55~59	36	12	9	5	4	1	79	
60~64	24	4	4	3	2	4	46	
65~69	13	5	2	3	1	6	39	
70~74	9	0	3	2	2	2	18	
75~79	2	1	3	2	2	2	37	
80~84	4	1	0	2	0	5	12	
85~89	2	1	0	1	1	1	6	
90~94	8	1	0	0	0	6	14	
95~99	0	1	0	1	0	0	2	
100~104	1	0	1	1	0	1	4	
105~109	0	1	0	0	0	0	1	
合計	2212	257	137	74	86	135	2999	

表23 原面残存率と最大長(実数)

いるとも考えられるが、ある程度以上の大きさの剥片を取る場合、剥片の大きさだけでなく、打撃の状態によってはどんなバルブの発達度も生じさせ得るということを示唆している。また、同時に最も大きな剥片のバルブが「発達なし」であることは剥片の大きさと打撃の状態だけでなく、サヌカイトの石の目ともあわせて考えないといけないことを示している。

次にバルブの発達度と打面形態の相関関係をみてみる。バルブの発達度は前述と同じく4つのカテゴリーに、打面形態はハジケ、原面上打面、口唇状打面、線状打面、調整打面、点状打面、剥離面打面の7つのカテゴリーに分類した。総数2,810点分の打面形態とバルブの発達度の相関関係を集計したものが表22で、それらの数比をグラ

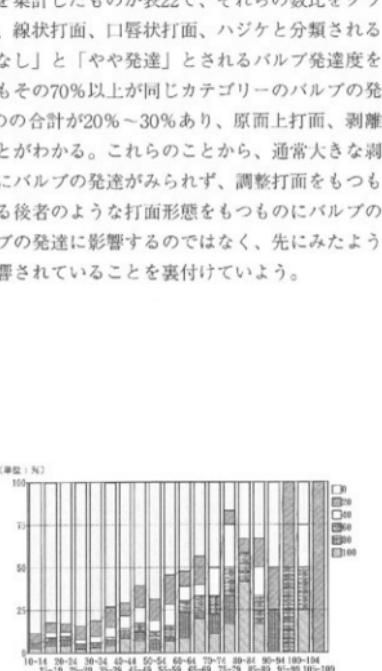


表23 原面残存率と最大長(実数)

剥離長(cm)	10mm	10-14	15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	59-64	65-69	70-74	75-79	80-84	85-89	90-94	95-99	100-104	105-109	合計
あ り	1	5	8	5	6	32	26	5	6	5	9	8	2	1	0	1	2	0	1	0	0	106
な し	1	95	179	296	529	375	308	221	158	96	62	61	78	17	17	11	4	3	2	3	1	2880
合 計	2	96	179	296	528	375	308	222	162	105	71	66	85	30	35	18	12	12	6	3	2	2986

表24 垂直割れと最大長(実数)

総数2,899点のうち表面に原面の残るものは24% (687点) あるが、残りの76% (2,212点) には全く認められない。また、表面以外に先端面や側面に原面が残る場合もある。これらは530点あり、全体の18% にあたる。それらの残り方は、右側面211点(40%)、左側面235点(44%)、両側面36点(7%)、右側面・先端面9点(1.9%)、左側面・先端面9点(1.9%)、先端面25点(5%)、両側面・先端面1点(0.2%)である。これらの他に2点だけであるが、主剥離面に接して裏面側に原面を取り込んでいる例がある。

表面に認められる原面の残存率と最大長の相関関係をみてみる。原面の残存率を20%ごとの階級に、最大長は5.0mmごとの階級に分類して、総数2,899点分の最大長別原面残存率の点数を集計したものが表23で、それらの数比をグラフに示したのが図50である。それによると原面の残るもののは比率は小さい剥片ほど低く、大きいものほど高いことが分かる。このことは原縫から剥離が行われたときほど大きな剥片が取られていることを示している。

垂直割れ

剥離時の事故のひとつとして垂直割れがある。垂直割れをおこした剥片は106点あり、全体の4% である。

垂直割れと最大長の相関関係をみてみる。最大長は5.0mmごとの階級に分類して、総数2,909点分の最大長別垂直割れの点数を集計したものが表24である。それによると10mm未満の剥片は数が少ないので除くとして、30mm以上の剥片からほぼ一定量、生じたようになっている。これはすでに指摘されているように打撃の方に比例しておこることを示していよう。

その他の属性

今回分析対象にした剥片の中には、両極手法を示すようなものはなかった。また、打撃による剥離ではなく、自然現象(例えば、温度変化など)によってひきおこされたと考えていい、割れの痕跡を残すものが3点認められた。

3. 剥片の属性分析からみた喜志遺跡(K S 94)の石器製作状況

以上、剥片を対象にして属性分析を行った結果と石核の観察結果をまとめてみる。

剥片剥離に際して、厚みに対する意識がいかに強いか、すなわち、薄くて大きな剥片を取るために打撃力と打撃の角度をコントロールしていることがうかがえた。しかし実際には、従来から指摘されているとおり、サヌカイト特有の石の目が剥片剥離に際して製作者の意志以上にいかに大きく影響するかが再認識させられた。このことは検出された剥片がごく一般的な割れ方しか残していないことを示していて、そこには何等、目的的な剥片を取るための特殊な技法を窺うことことができなかつたともいえる。このことが弥生時代の剥片剥離技術全般を通じていえることなのか、この時期

(第Ⅲ様式期新段階～第Ⅳ様式期古段階)だけの現象なのか、またここに捨てられた剥片だけに認められる現象なのか、データの蓄積を待つて結論を下したい。

さて、今回の調査で出土したサヌカイト製の石器はすべて喜志遺跡内で製作したと考えられるが、分析対象にした整地層出土の剥片では最も大きな剥片でも最大長105mm、最大幅140mm、また、石核の最も長いものでも135mmしかなく、打製石剣を作れる大きさのものは見つからなかった。しかし、製作途中の事故品の存在から打製石剣を遺跡内で製作していることは確実である。それではその素材をどのような形で獲得したのか?問題として残したままである。

以上のような問題を残したままではあるが、今回出土した整地層の石器資料がどのような意味をもつかを考えてみたい。少なくとも剥片類については、一般的な割れ方しか示しておらず、石器製作中の石屑的、すなわち廃棄処分のものとしてしか評価を与えることができないが、石器類については製品としてまだまだ使えるものが出土していることから単に捨てたとは考えがたい。つまり、これらの整地層から出土したものは石器製作址からだけではなく、それ以外の場所からのものも含まれている可能性があるということである。ただ供伴土器の時期が第Ⅲ様式期新段階から第Ⅳ様式期古段階と限定されることも考え合わせると、石器製作址に近接した集落址、もしくは集落址内の石器製作址から整地層の土がもってこられたと推測できるであろう。

(栗田 薫)

(注)

1. 属性分析の方法は次の文献によっている。

山中一郎(1994)『石器研究のダイナミズム』、大阪文化研究会。

4-3. 石川中流域、段丘上の埋没古墳

1.はじめに

石川中流域の段丘上の埋没古墳の存在に関心がもたれたのは、大阪府教育委員会の調査で検出された「新堂古墳」が最初であろう。それ以前に消滅時期の分かる段丘上の古墳として川西古墳の記録が残されていたが(文献1)、現存する新家古墳を除いて、段丘上に古墳が点在する景色は想像されていなかったといっても過言ではない。

新堂古墳の調査による周濠らしきものの発見は段丘上に埋没古墳が存在する事を暗示させた。しかしながら、この調査と前後して数度の調査で埴輪片がバラバラと出土しているものの、その出土量の少なさと確実な遺構の未検出から、埋没古墳への関心はもたれたものの、議論されることはなかった。そんな中、今回、喜志遺跡の調査で、多量の埴輪が出土したことにより、改めて埋没古墳の存在を考えてみる必要が生じた。そこで既往の調査における埴輪の出土例を紹介することで、石川中流域における埋没古墳の状況を改めて考えてみたい。

2. 既往の調査における埴輪出土例

出土例1・(文献2)

1979年、大阪府教育委員会によって、羽曳野市東阪田に所在する石川の形成した下位段丘面の南端部が分譲住宅開発にともなって調査された。遺跡名は「東阪田遺跡」である。埴輪は調査区の南西部で検出された土壙(SK-01)と調査区南部中央隅で検出された土壙(SK-04)で出土した。

土壙(SK-01)からは人物埴輪を含む多量の埴輪と1点の須恵器が出土している。これらの所属時期は須恵器の杯身から5世紀末と比定されている。

土壙(SK-04)からは多量の埴輪と少量の土器片が出土している。埴輪は小片であるというものの、円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、楯形埴輪が確認されている。円筒埴輪はやや斜行する縦ハケで調整されていること、円筒埴輪の中に須恵質のものが存在すること、及び出土土器の時期から合わせて6世紀前半に属すると結論づけられている。

なお、この調査区では古墳時代前期に比定されている土器棺墓も3基、検出されている。

出土例2. (文献3)

1980年、羽曳野市教育委員会が出土例1のすぐ南側を調査した。遺跡名は「東阪田遺跡」である。埴輪は調査区の中央部西辺にある方形の土壙(SX1)から出土している。埴輪の詳細は不明である。

出土例3. (文献4)

1978年、大阪府教育委員会が喜志小学校の北方200m、東高野街道から東に100m下った地点で、「喜志遺跡」の東縁にあたる斜面地を調査した時に盛土から埴輪が検出されている。埴輪は須恵質の円筒埴輪で、断面M字形のタガがめぐる。外面調整は斜めハケの後、横ハケが施されている。

出土例4. (文献4)

1978年、大阪府教育委員会が下水管埋設工事に伴う調査(Bトレンチ)を行ったときに埴輪が検出されている。遺跡名は「喜志遺跡」である。埴輪は円筒埴輪で、Bトレンチと設定された調査区の盛土から検出されているが、6世紀前半に比定されている。

出土例5. (図版27、図-51)

1986年、富田林教育委員会が下水道管理設工事に伴い、今回の調査区の南西隣、中位段丘上を調査した。遺跡名は「喜志遺跡」である。調査区は東西方向にのびる開析谷の真ん中にあたり、埴輪はこの谷の中から検出された。

今回の調査区はこの時の調査区で検出した開析谷の続きにあたり、また、埴輪の出土状況も今回の出土状況と類似する。出土した埴輪は円筒埴輪と蓋形埴輪があるが、出土量は少ない。

円筒埴輪(1, 3~7)は口径28.8cm、底径12.5~15.7cmを測る小型品ばかりである。タガの断面は低い四角形、台形の他、三角形も認められる。外面調整は粗い縦ハケ一次調整だけで、二次調整の横ハケの施されたものはなかった。基底部の調整は施されているものと施されていないものがある。

蓋形埴輪(2)は1点だけ出土している。軸受け部の破片であるが、口縁部に凸帯が貼り付けられている。口頭部の調整は横ハケ調整である。

この調査区で出土した埴輪は、今回の調査区であるKS94出土の埴輪と類似している。埴輪の所属時期は5世紀後半から6世紀初頭に比定できる。

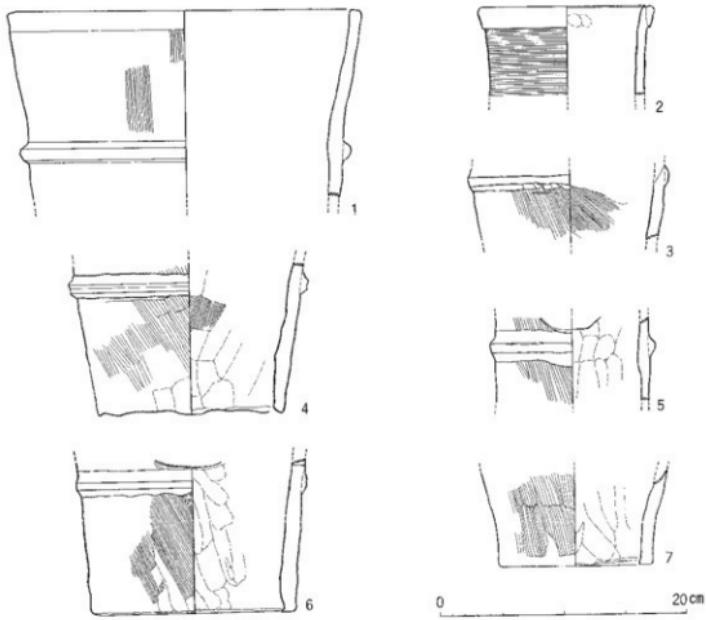


図51 喜志遺跡(KS86地区)出土の埴輪

出土例6.

1985年、富田林市教育委員会が喜志町2丁目を調査した時に埴輪が検出されている。遺跡名は「喜志西遺跡」である。調査区の小字名が「高塚」で、今回の調査区と同じである。埴輪は円筒埴輪で中世の東西溝から出土している。

出土例7. (文献5)

1991年、富田林市教育委員会が喜志駅東口新設工事及び喜志バイパス道路事業に伴う調査で包含層から埴輪が出土している。遺跡名は「喜志西遺跡」である。埴輪は円筒埴輪で5世紀後半～6世紀初頭に比定できる。

出土例8.

1990年、富田林市教育委員会が住宅建設に伴う調査で埴輪が検出されている。遺跡名は「喜志西遺跡」である。埴輪は円筒埴輪で、包含層から出土している。

出土例9.

1990年、富田林市教育委員会が桜井町2丁目に所在する店舗建設に伴う調査で古墳時代の溝から

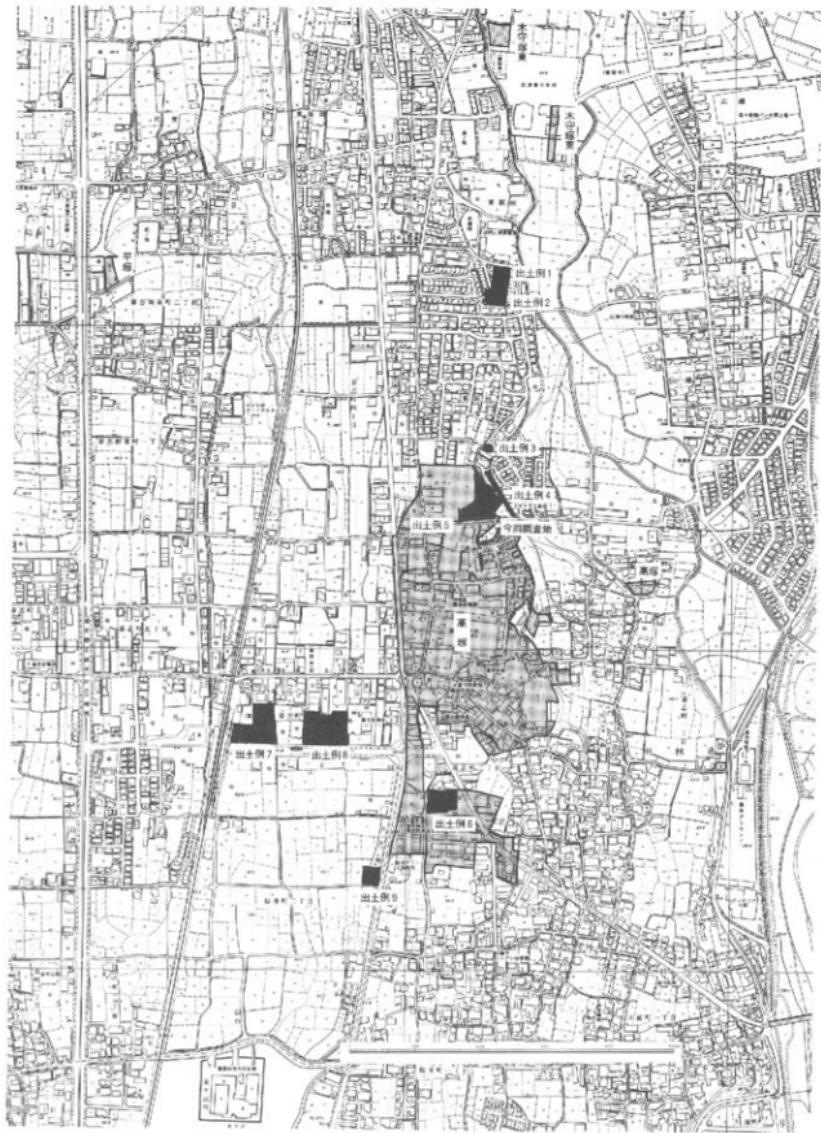


図52 喜志遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布図状況

1点だけであるが出土している。遺跡名は「桜井北遺跡」で、前述の出土例4の地点から南西部に約150m離れた地点にある。

出土した埴輪は円筒埴輪で外面調整にB種横ハケの施されたもので、所属時期は5世紀後半に比定できる。

出土例10. (文献6)

1981年、大阪府教育委員会が国道170号線の歩道設置に伴う調査を行った時にCトレンチから古墳が検出されている(註1)。遺跡名は「中野遺跡」である。「新堂古墳」と名づけられているが、墳丘と考えられる高まりと周溝と考えられる落ち込みが検出され、落ち込みからは埴輪と須恵器などが出土している。これらの所属時期から6世紀前半の時期が与えられている。

出土例11. (文献7)

1979年、富田林市教育委員会が大谷女子大学資料館の協力で行った調査で埴輪が出土している。遺跡名は「中野遺跡」である。埴輪は2点あるが、1点は石列暗渠(SD-004)から、あと1点は表探資料である。前者は形象埴輪で、後者は円筒埴輪である。形象埴輪は磨滅が著しく、器種も不明である。円筒埴輪はタガがかなり崩れていって、残存部の復元径から推測する限り小型品と考えられる。外面調整は縦ハケが施されている。これらのことから所属時期は6世紀前半と考えられる。

なお、この時の調査で6世紀に比定されている土壙墓が2基、検出されている。一つは土壙1(SK-001)で、楕円形のプランをもつ。内部から須恵器の甕と土師器の鍋片が出土している。あと一つは土壙(SK-003)で不整形なプランをもつ。内部から2個体分の口頸部を欠く須恵器の甕の破片が出土している。報告者は遺存状況に問題を残すしながらも、甕棺としての機能を考えている。

出土例12. (文献8)

1981年、富田林市教育委員会が国道170号線と東高野街道に挟まれた地域を調査した時に、古墳時代の溝と包含層から埴輪が検出されている。遺跡名は「中野遺跡」である。埴輪は合計14点出土しているが、すべて円筒埴輪で外面調整に斜方向の縦ハケ一次調整が施されているだけで、二次調整は認められない。タガの突出度も低く、黒班の認められるものもない。須恵質のものが混じる。これらのことから埴輪の所属時期は6世紀前半に比定できる。

出土例13. (文献9)

1992年、富田林市教育委員会が「寺内町遺跡」(G C91-4)を発掘調査を行った時に近世のビットから埴輪が1点出土している。埴輪は円筒埴輪の口縁部の破片で外面調整に横ハケが施されている。小片であるから断定できないものの、埴輪の所属時期は5世紀後半と考えられる。

出土例14. (文献9)

1992年、富田林市教育委員会が「寺内町遺跡」(G C91-2)を発掘調査をおこなった時に包含層から埴輪が1点出土している。埴輪は円筒埴輪で、タガは断面が偏平な台形で、外面調整はBd種横ハケが施されている。これらのことから埴輪の所属時期は5世紀後半に比定できる。



図53 中野遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布状況

出土例15.

1990年、富田林市教育委員会が行った調査で包含層から埴輪が1点出土している。遺跡名は「新家遺跡」である。現存する「新家古墳」の北西70mの所である。円筒埴輪の外面調整は継ハケ一次調整だけが施されている。

なお、新家古墳からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、甲冑形埴輪などが採集されている。円筒埴輪は実測図から判断すると、かなりしっかりととした断面四角形のタガがめぐり、外面調整に斜め方向のハケが施されている。底部を1段目とすると2段目の半ばまでしか残っていないので、断定できないが底径が18cmということから、中型品に近い小型品ということができる。また、黒班も認められることから(文献1)、前述の新家遺跡から出土した埴輪はこの新家古墳よりも後で造られた古墳のものと考えられる。

また、前述の埴輪出土地点から南約150mの地点で国道309号線建設に伴う調査を大阪府教育委員会が行っているが、その時に古墳時代から鎌倉時代にかけての土壙墓が総数433基検出されていている(文献10)。

出土例16～18.

1928年に消滅したと記録されている「川西古墳」と、その周辺の埋葬施設を含めてここで紹介する。「川西古墳」は明治維新前に一度発掘され、1928年、敷地整備で墳丘が破壊されたが、その直前に、末永雅雄氏によって、遺物の採集と墳丘見取り図作製が行われている。この時の記録によると川西古墳は直径20m、高さ3mの円墳で、墳頂から約1m下方のところに小堅穴式石室状の内部構造が設けられていたこと、石室内部から鉄製の眉庇付冑、短甲、鉄刀、鉄剣、鎧、金銅金具などが出土したと記録されているが、ここにある記録の様子は二次埋葬の結果らしく、古墳塗造当初の埋葬状況を示すものではない(註2)。しかし、副葬品自体は川西古墳のものと考えられることから、古墳の所属時期を5世紀中葉から後半に比定されている(文献1)。その後、1989年府営住宅の建て替えに伴う大阪府教育委員会の調査(出土例16)で、川西古墳の周濠と考えられる溝が(文献11)、1991年、1992年には市営住宅建て替えに伴う富田林市教育委員会の調査(出土例17)で、1989年の大阪府教育委員会調査時の溝に続くと考えられる溝が検出され、その結果、この古墳が外周溝をもち、墳丘が帆立貝式もしくは造り出し付き円墳であったことが確認されている(文献12)。

出土した埴輪は円筒埴輪と形象埴輪があるが、形象埴輪は家形埴輪、草摺部分が出土しているが、種類も數も少ない。円筒埴輪は大型品、中型品、小型品と様々なサイズが混在するが、小型品が圧倒的に多い。外面調整はB種横ハケの施されたものと、継ハケ一次調整だけの両方が認められるが、大型品についてはすべて二次調整が認められる。半須恵質のものもあり、所属時期は5世紀後半に比定されている。

「川西古墳」の外周溝の外側からは円筒埴輪棺が3基、検出されている。それらのうちの1基は外周溝の肩部から(文献11)、他の2基は南部で(出土例18)で検出されている。なお、後者の2基の埴輪棺が出土した地域の遺跡名は「錦織遺跡」である。この2基の円筒埴輪棺のうち、1基(円筒棺1)は棺の周囲を河原石で取り囲む構造を呈している。あと1基(円筒棺2)には須恵器の蓋杯が副葬されていて、その時期から6世紀中頃と比定されている(文献12)。

また、1989年に大阪府教育委員会が行った調査区では、これら周濠と外周溝の他に溝が2本(溝

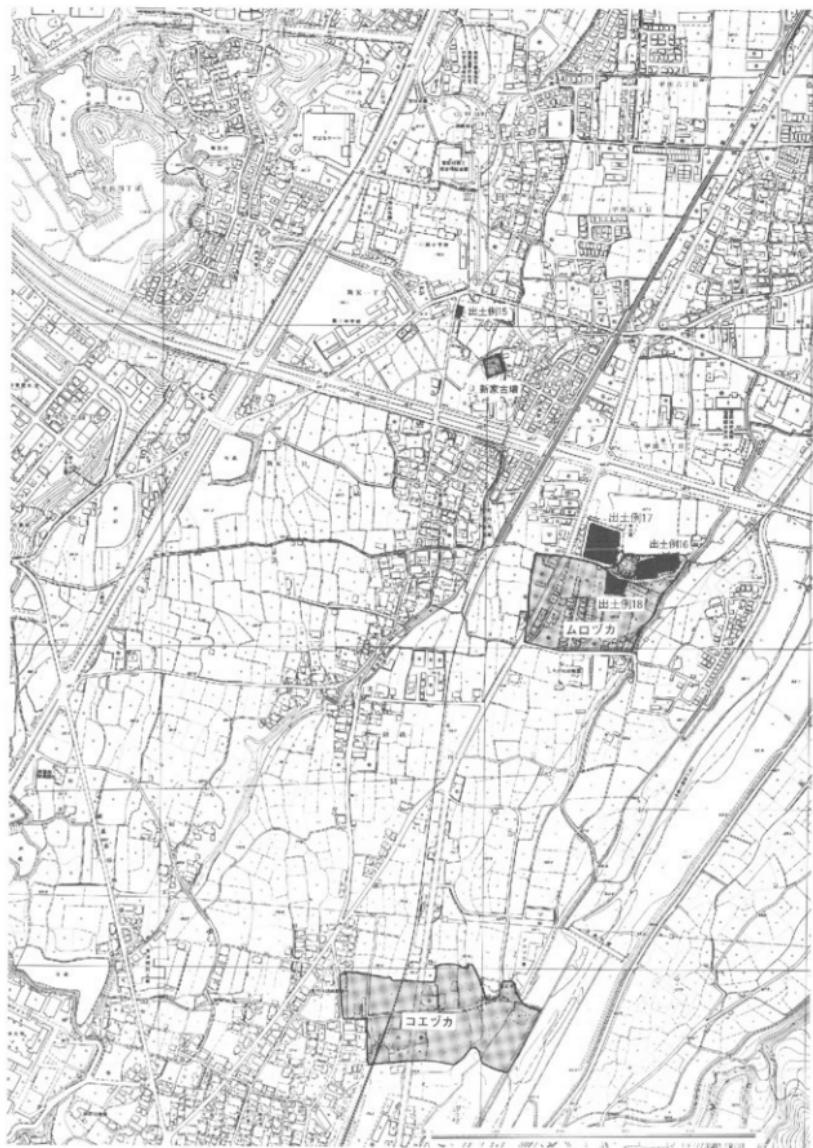


図54 甲田南遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布状況

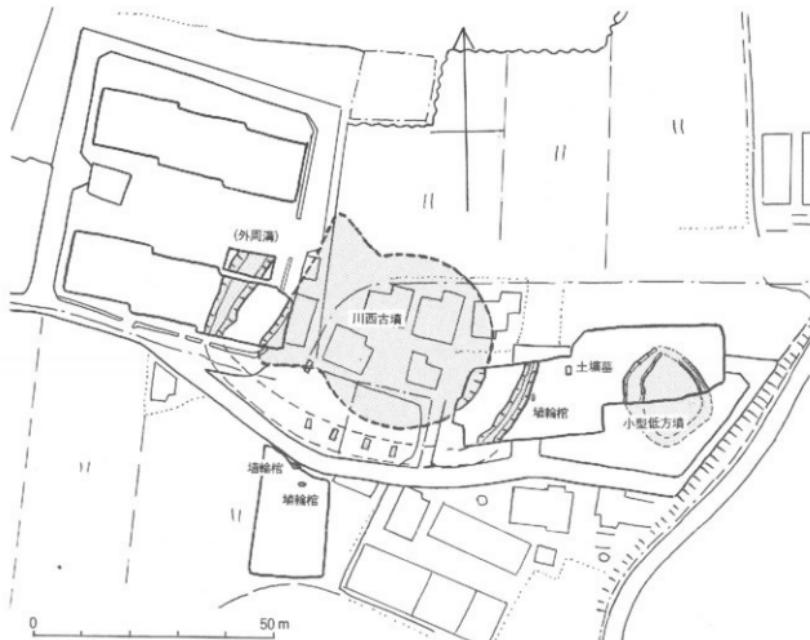


図55 「川西古墳群」の墓域構成(文献12 挿図15に一部修正、加筆)

3、溝4)検出されているが、これらは周溝を構成する可能性が指摘されている。もし、これが周溝として成り立つなら、この溝は方形区画墓を構成するものと考えられ、墳丘の状態がわからないものの小型低方墳を取り囲む溝の機能が想定される。なお、溝4からは韓式系土器や土師器、須恵器が出土しているが、それらからみて、この小型低方墳の所属時期は5世紀後半から6世紀に比定できると考えられる。この他、この時の調査区では土壇が1基、確認されている。骨、副葬品の出土はみないものの墓壙の可能性も示唆されている(文献11)。

これらを総合して考えると、「川西古墳」を主長墳としてその下に小型低方墳、埴輪棺墓、そして土壇墓で構成される古墳群としてとらえることが可能である(図55)。そして主長墳に埋納された豊富な副葬品、特に眉庇付冑、短甲などの甲冑一式の他、武器類などの副葬から考えると、この古墳の被葬者は生前、ヤマト政権から軍事的職掌を与えられた在地の小豪族の地位を想定することも可能であろう。また、小型低方墳については溝から出土した韓式土器から考えると朝鮮半島から甲田地域に移住してきた渡来人の存在を、そして円筒埴輪棺については墳丘をもつことが許されなかつた人々の墓を、さらに埴輪棺、土器棺すらもつことの許されなかつた階層、すなわち、共同体の一般構成員の土壇墓で構成された「川西古墳群」ともいるべき墓域を形成していたと考えられる。

以上が既往の調査における埴輪の検出例であるが、次にこれらの埴輪の状況からみた石川中流域の埋没古墳の存在意義について考えてみたい。

2. 埋没古墳の存在意義

石川中流域に埴輪が検出された地点は、喜志遺跡から錦織遺跡まで点々とではあるが、かなりの数になっている。しかし、「川西古墳群」を除いて、その実態はほとんど解明できていない。

そこで一つの試みとして埴輪の出土地点に古墳の存在を推測させる「塚」のつく小字名を付加した地図(図52, 53, 54)を作成してみた^(註3)。地図で網がけした範囲がそれにあたる。それによると羽曳野市域に「木守塚東」、富田林市の喜志新家町に「平塚」、喜志小学校を中心にして南北560m、東西260mの範囲に「高塚」、川西古墳周辺に南北150m、東西230mの範囲に「ムロヅカ」、錦織遺跡を中心に南北150m、東西290mの範囲に「コエヅカ」という名が残っている。このうち、「高塚」、「ムロヅカ」については、それらが名付けられた範囲から埴輪の出土が認められている。他の地域については、今のところ、埴輪の検出が認められないことから、墓域との関係は分かっていない。また、中野遺跡周辺に「塚」のつく小字名がまったく認められないにもかかわらず埴輪が検出されたり、古墳が存在する場合もある。この他、現存する「新家古墳」に「塚」の名が認められないことは^(註4)、小字名の付けられた当時の周辺の様子、伝承の問題と絡めて考えなくてはならないことを示していて、短絡的に古墳の存在と結び付けられないかもしれない。しかし、古墳が存在した可能性もまったく捨てることはできない。今後の調査を待って結論を下さなければならない問題の一つである。

さて、従来から、石川中流域には古墳時代中期の古墳が少ないことが指摘されている(文献1)。やはり今回の埴輪の出土状況をみてみても、中期でも後半に比定されるものしかなく、中期前半についてはその状況は大きく変わらないことが示されている。しかし、後半期については石川の段丘上に古墳が点在した可能性が指摘できる資料が集まった。そしてそれらの立地を考える時、古墳群は弥生時代以降の農村集落を単位にした勢力基盤をもつ地城ごとにそれぞれグルーピングできることが確認された。すなわち、喜志遺跡の地域に出土例1～9、中野遺跡の地域に出土例10～13^(註5)、そして甲田南遺跡の地域に出土例14～18がそれぞれがあてはまる。これらのうち、喜志遺跡の地域と甲田南遺跡の地域については古墳時代前期からこれらの地域を勢力基盤にしていたと考えられる首長の古墳が、羽曳野丘陵上に築造されていることが指摘されている(文献1)。このことが、中期後半から後期前半の時期に比定される埋没古墳とどう関係してくるのかは明らかではないが、石川中流域の中期後半の古墳と前期古墳の間には立地に差異が認められるものの、同じ勢力基盤のもとに古墳が形成されているという事実は興味深い。また、その古墳群の構成形態は「川西古墳群」の場合、帆立貝式古墳もしくは円墳の形態をとる首長墳のものに、それらの形態の古墳を造ることが許されなかつた人々の小型低方墳、そして墳丘をもつことが認められないさらに下層の人々の円筒埴輪棺墓、土壙墓という複数の階層の人々で構成されている。おそらく、他の地域についても同様の墓制形態をもつと考えられるが、具体的な状況は分かっていない。しかし、喜志遺跡地域については埴輪の出土量の多さ、そしてそれらの構成から考えて、直径30m前後の円墳が数基、存在していたと想定できるし、おそらく古墳時代前期に所属時期が比定されているような土器棺墓のような土壙墓がこの時期にも認められたことは想像に難くない。中野遺跡地域についても同様で、今のところ、やはり新堂古墳と同時期の土器棺墓が検出されている。

以上のことから総合して考えてみると、5世紀後半から6世紀前半のごく限られた時期に、弥生時代以来の農村集落を勢力基盤にもつ有力家父長を頂点にした共同体構成員の墓域が、集落に近接

して階級を如実に示す複雑な墓制形態をとりながら存在したことが指摘できる。そして埴輪をもつような墳墓が、5世紀前半にはほとんど認められず、5世紀後半に急増する背景として、この時期に社会に大きな変化がおこり、有力家父長クラスまで造墓活動が許されたことが推測できる。

さらに石川中流域、段丘上の古墳が築造される背景として、下流域の古市古墳群の存在を考える時、当然、古市古墳群の造営にこの石川中流域の農村集落の構成員が関わりのあったことは推測できる。しかもこれらの中には造墓活動時の労役だけでなく、「川西古墳」の被葬者のようにヤマト政権の軍事的職掌を担う小豪族の出現も認められるのである。

以上のように古墳建築の背景をみてきたが、古市古墳群造営が石川流域の段丘上の集落にどのような影響をおよぼしたのかは具体的に示すことができなかった。さらに6世紀の後半に石川中流域の段丘上に古墳が築造されなくなり、このあと新たな場所に墓域を移していったことを指摘することはできるが、この変化をどのように解釈するかは問題として残したままである。今後の課題としたい。

(栗田 薫)

(註)

1. 国53の分布図の範囲は新堂古墳の検出された位置だけである。この時の調査は実際には南北にもっと長く設定されている。
2. 北野耕平氏による。
3. 国53の中の清町に「石塚」という小字名が残っているが、ここは石川の氾濫源にあたり、河原石が多量に積まれてあったという伝承があり、古墳との関係は認められないで済んでいた。
4. 新家古墳が存在する場所の小字名は「宮口」である。これはすぐ近くにある萬歳神社との関連が推測される。
5. 甲田南道路については甲田・萬歳地区とする方が適切かもしれない。また、出土例13、14は中野道跡に含めたが、1994年の大阪府教育委員会が行った大阪府立宮林高等学校の改築に伴う調査で「谷川道路」から弥生時代後期から古墳時代の集落跡が確認されている。そのことから考えると中野道跡と甲田南道路の間に谷川道路地区(をもう)、そこにこの出土例が属する基盤集落を求めるべきかも知れないが、結論は谷川道路の正式報告を待って下さい。

(文献)

1. 北野耕平(1985),『富田林市史』,富田林市史編纂委員会。
2. 尾上実(1981),『東阪田遺跡—1979年度第4区の調査一』,大阪府教育委員会。
3. 笠井敏光(1980),『東阪田遺跡—1980一』,羽曳野市埋蔵文化財調査報告書6,羽曳野市教育委員会。
4. 芝生圭之助・渡邊昌宏(1978),『谷川道路発掘調査概要』,大阪府教育委員会。
5. 中辻元・松本徹・栗田薰(1993),『奈良西道路発掘調査概要』,富田林市埋蔵文化財調査報告23,富田林市。
6. 玉井功(1982),『中野道跡発掘調査概要—近江170万石歩道設置に伴う調査一』,大阪府教育委員会。
7. 中村浩(1979),『中野道跡発掘調査報告書』,富田林市教育委員会。
8. 中辻元・栗田薰(1982),『中野道跡発掘調査概要』,富田林市埋蔵文化財調査報告7,富田林市教育委員会。
9. 松本徹・田川友美(1992),『平成3年春 富田林市内道路群発掘調査概要』,富田林市埋蔵文化財調査報告21,富田林市教育委員会。
10. 今村道夫(1981),『新家道跡発掘調査概要・Ⅲ』,大阪府教育委員会。
11. 阿部幸一(1989),『一府百景葉住宅建替に伴う甲田南道路発掘調査概要』,大阪府教育委員会。
12. 中辻元・田川友美(1994),『甲田南道路』,富田林市埋蔵文化財調査報告25,富田林市。

番号	出土地点	器種	口径(cm)	器高(cm)	側面状(cm)	技法(内面)	技法(外面)	紋様	色調	備考
1	整地層	広口壺A	15.6	2.0	口縁部：横なで 腹部：なで	口縁部：横なで、 頭部：横方向の刷毛目	口縁部上面、外面：波状紋 (底体8本)	に赤い褐色		
2	整地層	広口壺A	18.0	4.5	口縁部：横なで、 腹部：なで	調整不明	口縁部：斜交紋、頭部：横 状紋(底体8本/1cm)	に赤い褐色		
3	整地層	広口壺A	19.4	4.6	調整不明	調整不明	口縁部：斜交紋	褐色		
4	整地層	広口壺A	23.1	3.6	調整不明	調整不明	口縁部：輪状紋(底体 13本/1.6cm)	褐色		
5	整地層	広口壺A	24.7	5.3	調整不明	頭部：斜交印、 他は調整不明	口縁部：斜交紋	に赤い褐色		
6	整地層	広口壺A	22.8	1.9	口縁部：横なで	口縁部：横なで	口縁部外側：波状紋(底体 5本)、口縁部下端：削み口	灰褐色	生陶内施釉	
7	整地層	広口壺B	26.8	7.1	口縁部：横なで 腹部：指留印痕	調整不明	口縁部：輪状紋(底体19本 /3.6cm)、腹部：直線紋	に赤い褐色		
8	整地層	広口壺A	26.7	6.3	口縁部：横なで 腹部：横方向の刷毛目	口縁部：横なで 腹部：横方向の刷毛目	口縁部：波状紋2条(底体 2本/1.1cm)、腹部：直線紋	明赤褐色	生陶西施釉	
9	整地層	広口壺B	24.4	2.4	調整不明	調整不明	口縁部：斜交紋	明赤褐色	牛乳西施釉	
10	整地層	無頭壺	21.8	7.6	口縁部：横なで 体部：なで	口縁部：横なで 体部：横方向のへら書き	体部：列点紋3条、直線紋 (底体12本/14.5cm)、波状紋	に赤い褐色		
11	溝 2 高杯	A	19.4	4.5	口縁部：横なで 体部：横方向のへら書き	口縁部：横なで 体部：横方向のへら書き	口縁部：横なで 体部：横方向のへら書き	に赤い褐色		
12	整地層	高杯A	21.9	4.7	口縁部：横なで 体部：横方向のへら書き	口縁部：横なで 体部：横方向のへら書き	口縁部：横なで 体部：横方向のへら書き	灰褐色		
13	溝 2 高杯B		21.0	2.4	調整不明	調整不明		暗褐色	生陶内施釉	
14	整地層	鉢 B	16.7	5.3	口縁部：横なで 体部：なで、指留印痕	口縁部：横なで、 他は調整不明		褐色		
15	整地層	鉢 B	25.1	6.6	体部：指留印痕	調整不明	体部：波状浮紋(1単位3本 /3.6cm)、波状紋	に赤い褐色		
16	整地層	鉢 B	23.8	4.2	体部：なで	調整不明	口縁部：列点紋、体部：輪状 紋(底体18本/2.5cm)、列点紋	褐色		
17	整地層	鉢 B	28.8	5.2	体部：なで	調整不明	体部：輪状紋2条(底体9 本/1.3cm)、波状紋	褐色		
18	整地層	鉢 B	38.5	5.7	口縁部：横なで 体部：なで	口縁部：横なで 他は調整不明	口縁部：波状紋の上に円形 浮紋、体部：輪状紋、直線紋	褐色		
19	整地層	器 台	20.8		調整不明	体部上半：横なで、下 半：横方向へら書き	円線紋：8方向に円孔	褐色	器部に墨跡	
20	整地層	鉢 台	8.8		指留印痕	なで		浅黃褐色		
21	整地層	台 頭	6.1	16.8	調整不明	調整不明		明赤褐色		
22	整地層	器 部	8.9		調整不明	上半：なで、下半：横 方向のへら書き		に赤い褐色		
23	整地層	台 部	2.4	10.0	なで			に赤い褐色		
24	整地層	器 部	2.7	13.8	へら書き。瓶端部に 沈線	横なで	刺突紋	に赤い褐色		
25	整地層	器 部	3.2	15.6	なで	横方向のへら書き、なで		褐色		
26	整地層	器	18.8	5.8	口縁部：横なで 体部：調整不明	口縁部：横なで 体部：調整不明		灰褐色		
27	整地層	器	13.3	8.4	口縁部：横なで 体部：指留印痕	口縁部：横なで 体部：指留印痕		に赤い褐色		
28	整地層	器	13.2	4.4	口縁部：横なで 体部：指留印痕	口縁部：横なで、体部 体部：横方向のへら書き		明赤褐色 器内面に 粘土粒の軋 割りあり		
29	整地層	器	13.3	8.4	口縁部：横なで 体部：指留印痕	口縁部：横なで、 体部：調整不明		に赤い褐色	体部外面に 棍付着	
30	整地層	器	10.9	2.5	体部：指留印痕 他は調整不明	体部：へら書き		褐色		
31	整地層	器	32.1	5.6	調整不明	調整不明		褐色	生陶内施釉	
32	整地層	器	35.2	6.0	口縁部：横なで、 体部：横方向の刷毛目 指留印痕	口縁部：横なで、 体部：横方向の刷毛目	口縁部：横なで、 体部：横方向の刷毛目	褐色		
33	整地層	器	38.6	4.0	口縁部：横なで、 体部：横方向の刷毛目	口縁部：横なで、 体部：調整不明	口縁部：横なで、 体部：横方向の刷毛目	に赤い褐色		
34	整地層	器	39.0	5.5	口縁部：体部：横なで 体部：横方向のへら書き	口縁部：横なで 体部：横方向のへら書き	口縁部：刺突紋	褐色	生陶内施釉	
35	整地層	器	41.8	6.1	体部：横方向のへら 書き	調整不明		灰褐色	生陶内施釉	

表25 喜志遺跡出土弥生土器観察表

番号	出土地点	型式名	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	素材	中 央 部 形	原 面	調 整	整 形	折 損	備 考
1	整地層	石 破	21.4	22.1	3.9	1.6	陶	両凸形	×	両面	非 極	尖端・両側面	円基式
2	整地層	石 破	24.4	14.4	3.1	1.1	陶	平凸形	×	×	非 極	×	円基式
3	整地層	石 破	24.8	10.5	3.2	1.0	素	半凸形	×	×	非 極	×	円基式
4	整地層	石 破	27.5	16.0	4.3	1.9	陶	平凸形	×	×	非 極	尖 端	円基式
5	整地層	石 破	30.5	13.3	3.9	1.5	陶	両凸形	×	両面	非 極	×	平基式
6	整地層	石 破	31.5	12.6	4.5	1.8	陶	両凸形	×	両面	非 極	×	円基式
7	整地層	石 破	21.8	14.5	4.5	1.9	横 形	半凸形	×	片面	非 極	×	平基式
8	整地層	石 破	29.0	18.2	4.0	2.2	素	半凸形	×	片面	非 極	×	平基式
9	整地層	石 破	33.6	19.7	5.0	3.2	陶	両凸形	基底部	両面	非 極	尖 端	平基式
10	整地層	石 破	25.9	12.4	3.8	1.2	陶	両凸形	×	両面	非 極	先 端	凸基式
11	整地層	石 破	31.7	13.4	4.7	2.0	横 形	半凸形	×	×	非 極	×	凸基式
12	整地層	石 破	25.7	10.6	3.5	1.0	陶	両凸形	×	両面	非 極	尖 端	凸基式
13	整地層	石 破	38.3	12.5	4.7	2.0	横 形	半凸形	×	片面	非 極	×	凸基式
14	整地層	石 破	33.5	16.7	4.6	2.8	横 形	半凸形	×	×	非 極	尖 端	円基式
15	整地層	石 破	36.2	14.0	4.8	2.2	陶	両凸形	×	両面	非 極	尖 端	凸基式
16	整地層	石 破	37.4	13.0	5.0	2.2	陶	両凸形	×	両面	非 極	尖端・基部	凸基式
17	整地層	石 破	45.7	13.7	5.0	2.9	横 形	半凸形	×	非 極	×	尖 端	凸基式
18	整地層	石 破	39.1	13.7	6.3	2.7	陶	両凸形	×	両面	非 極	×	凸基式
19	整地層	石 破	38.5	13.8	7.0	3.3	陶	両凸形	×	両面	非 極	尖 端	凸基式
20	整地層	石 破	36.9	15.0	5.0	2.8	横 形	両凸形	：	片面	非 極	尖 端	凸基式
21	溝 2	石 破	36.8	14.7	4.8	2.3	横 形	両凸形	×	片面	非 極	尖 端	有字式・銅銘線
22	溝 2	石 破	36.1	12.5	6.6	2.8	陶	両凸形	×	両面	非 極	尖 端	有字式
23	整地層	石 破	30.2	13.6	2.8	1.1	陶	両凸形	：	両面	非 極	基 部	有字式
24	溝 2	石 破	33.2	15.4	3.9	2.5	横 形	半凸形	：	×	非 極	尖 端	有字式
25	溝 2	石 破	38.6	21.8	9.6	7.4	陶	半凸形	：	両面	非 極	：	有字式
26	整地層	石 破	41.2	17.9	4.7	3.1	陶	両凸形	：	両面	非 極	基 部	有字式
27	整地層	石 破	36.1	30.3	5.0	4.0	横 形	両凸形	：	片面	非 極	尖 端	有字式
28	整地層	石 破	39.5	20.2	5.1	4.0	陶	両凸形	：	両面	非 極	尖端・左縁	有字式
29	整地層	石 破	33.9	21.4	5.7	3.8	陶	両凸形	：	両面	非 極	尖端・基部	有字式・銅銘線
30	整地層	石 破	56.3	26.5	5.9	6.1	陶	両凸形	：	両面	非 極	：	有字式
31	整地層	石 破	51.1	20.2	8.3	8.3	横 形	両凸形	：	×	非 極	：	凸基式
32	整地層	石 破	54.8	18.9	11.4	8.9	陶	両凸形	：	両面	非 極	：	凸基式
33	整地層	石 破	25.4	22.6	4.3	1.9	横 形	半凸形	：	×	非 極	基 部	有字式・十字形
34	整地層	石 破	35.4	27.1	3.4	3.5	横 形	半凸形	：	×	非 極	基 部	有字式
35	整地層	石 破	14.1	26.1	7.9	8.7	横 形	両凸形	：	×	非 極	：	有字式
36	整地層	石 破	48.0	27.8	6.3	7.7	陶	両凸形	基底部	：	非 極	：	有字式
37	整地層	石 破	47.3	31.2	9.5	12.4	陶	両凸形	：	両面	非 極	尖 端	有字式
38	整地層	石 破	41.2	25.0	11.4	11.1	陶	両凸形	基 部	：	非 極	尖 端	有字式
39	整地層	石 破	53.8	29.2	8.6	15.0	横 形	半凸形	基底部	：	非 極	尖 端	有字式
40	溝 2	石 破	44.6	35.5	8.2	13.8	陶	両凸形	基底部	片面	非 極	尖 端	有字式
41	整地層	石 破	70.8	33.0	13.7	31.5	陶	両凸形	：	両面	非 極	：	有字式
42	整地層	石 破	58.5	34.0	13.1	21.2	横 形	両凸形	：	両面	非 極	：	有字式
43	整地層	打製石劍	33.2	23.3	6.3	4.5	陶	両凸形	：	両面	非 極	先 端	使用による欠損
44	整地層	打製石劍	44.2	21.9	12.0	12.9	陶	両凸形	：	両面	非 極	中央部	欠損は新しい
45	整地層	打製石劍	67.2	24.8	14.4	23.5	陶	両凸形	：	両面	非 極	基 部	折損にリタッチ
46	整地層	打製石劍	51.4	32.3	10.0	17.6	陶	両凸形	：	両面	非 極	基 部	製作中の事故品
47	整地層	打製石劍	65.4	32.9	11.6	20.3	陶	両凸形	：	両面	非 極	尖 端	使用による欠損
48	西 鋸 鋸	打製石劍	53.3	24.0	14.2	19.2	陶	両凸形	：	両面	非 極	尖 端 中 火 部	製作中の事故品、磨滅著しい

表26 喜志遺跡出土石器觀察表

番号	出土地点	型式名	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	素材	中央 断面形	前面	調整	整 形	折損	備 考
49	整 地 層	打製石劍	47.6	34.7	11.6	18.3		両凸形	基端部	片面	非 極	尖 端 ・中央部	欠損は新しい
50	整 地 層	打製石劍	4.6	36.3	9.3	15.6	横 形	両凸形	基端部	片面	非 極	尖 端 ・中央部	製作中の事故品
51	整 地 層	打製石劍	90.4	49.4	17.3	92.5		両凸形	×	両面	非 極	尖 端 ・中央部	製作中の事故品
52	整 地 層	打製石劍	140.4	49.6	20.0	162.5		両凸形	基 部	両面	非 極	尖 端	製作中の事故品
53	整 地 層	打製石劍	85.1	44.8	20.4	75.3		両凸形	×	両面	非 極	尖 端 ・基 部	製作中の事故品
54	整 地 层	打製石劍	142.6	45.3	20.3	127.0		両凸形	基端部	両面	非 極	尖 端	製作中の事故品
55	整 地 层	石 鋸	21.8	5.6	3.6	0.5		両凸形	×	両面	非 極	頭 部	棒状鋸
56	整 地 层	石 鋸	39.5	14.1	6.6	3.4	横 形	両凸形	×	片面	非 極	頭 部	連続度・1/4、回転痕 有り
57	清 2	石 鋸	50.1	19.6	8.5	7.7	横形?	平凸形	頭端部	×	非 極	×	連続度・1/5、回転痕 有り
58	整 地 层	石 鋸	36.5	36.9	7.9	9.0	横 形	平凸形	左側縁	×	非 極	尖 端	連続度・1/3?
59	整 地 层	石 鋸	57.5	34.5	8.2	13.1		平凸形	頭端部	片面	非 極	尖 端	連続度・1/3
60	整 地 层	石 鋸	43.0	23.0	9.2	7.1	横 形	台 形	頭 部	×	鋸部:右縁一極以 表。左縁一両脇。他は非極	連続度・1/3?	
61	整 地 层	バッタ	90.7	28.5	23.0	64.3	横 形	台 形	右半分	×	非 極	×	連続度・1/7
62	整 地 层	ノッチ削器	24.5	65.0	17.9	26.7	圓 形	四角形	左縁部	×	極厚表・背面	ノッチは2ヶ所	
63	整 地 层	石 小 刃	16.6	56.6	6.1	6.0	横 形	四角形	中 央	×	非 極	×	
64	整 地 层	石 小 刃	26.0	53.8	16.1	14.5		四角形	左縁部	両面	非 極	右半分	
65	整 地 层	横形削器	50.4	68.2	16.3	51.9	横 形	不等邊 三角形	基 部	×	薄・深・凸・裏	尖 端	
66	整 地 层	複刃削器	52.4	72.9	17.3	73.5		両凸形	中 央	片面	1-薄・深・直・ 両。2-薄・鋸 (深)・直・裏	尖 端	
67	整 地 层	複刃削器	64.7	70.0	13.3	50.8	溝	臺 形	基 部	尖 端	1-薄・深・直・ 両。2-薄・深・ S・裏	尖 端	
68	整 地 层	複刃削器	50.2	93.7	17.0	56.1	横 形	不等邊 三角形	右側縁	×	1-薄・深・凹・ 裏。2-薄・深・ 直・裏	尖 端	
69	整 地 层	凸刃削器	47.6	41.8	9.5	16.0	溝 ?	不等邊 三角形	左側縁	×	薄・深・凸・両	尖 端	
70	整 地 层	複刃削器	60.5	46.6	12.3	34.2	溝 ?	三角形	×	片面	薄・深・凸・両	先 端	
71	整 地 层	複刃削器	72.1	53.0	17.5	73.9	溝 ?	台 形	表 面	片面	薄・深・凸・裏	尖 端	
72	整 地 层	櫛	49.4	60.5	14.7	46.1	横 形?	両凸形	基 部	×	尖 端	尖 端	使用によって内縁が潰れ ている
73	整 地 层	石 包 丁	41.0	50.3	5.5	14.4		台 形			右半分 刀 頭	縫泥変岩製	
74	整 地 层	石 包 丁	62.1	40.5	7.9	30.1					内 側 縁	縫泥変岩製。耕穴外径 9.4mm、内径4.4mm	
75	清 2	石 包 丁	42.8	26.6	6.4	12.8					内 側 縁	結晶変岩製。耕穴外径 7.2mm、内径6.3mm	
76	整 地 层	砥 石 ?	73.7	21.6	10.7	22.3					内 端	粘板岩製	

表26 喜志遺跡出土石器観察表

番号	出土地点	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内部調整		外部調整		タガの形状	胎土	焼成	色調	備考
						内側	外側	内側	外側					
1	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	24.4	46.7	20.9	口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±9度/a), なで	口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±9度/a), なで	1次脚部は履方角のハケ, 2次は脚方向のハケ(B種類ハケ)	1次脚部は履方角のハケ, 2次は脚方向のハケ(B種類ハケ)	直形	新羅割合5%	良好	深褐色	
2	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	21.7	13.2		口縁部は斜方角(右・左)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は履方角のハケ(±10度/a), なで		直形	新羅割合5%	良好	黄褐色	口縫部に白テラ記号
3	唐 2 (第1層)	円筒埴輪	24.2	16.1		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±9度/a), なで		斜方角(左→右)のハケ, 脚方向のなで	斜方角(左→右)のハケ, 脚方向のなで	直形	新羅割合5%	良好	深褐色	
4	唐 2 (第1層)	円筒埴輪	22.2	13.5		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±18度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±18度/a), なで		直字形	新羅割合10%	良好	深褐色	
5	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	24.7	14.8		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±10度/a), なで		直形	新羅割合5%	良好	深褐色	
6	唐 2 (第1層)	円筒埴輪	20.5	10.7		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±10度/a), なで		直字形	新羅割合10%	良好	深褐色	
7	唐 2 (第1層)	円筒埴輪	23.3	20.8		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±6度/a), なで		直形	新羅割合10%	良好	深褐色	
8	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	21.4	26.5		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±5度/a), なで		直形	新羅割合5%	良好	深褐色	口縫部に白テラ記号
9	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	21.4	24.5		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±4度/a), なで		直形	新羅割合20%	良好	深褐色	
10	唐 2 (第1層)	円筒埴輪	25.0	27.4		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±5度/a), なで		直字形	新羅割合5%	良好	青褐色	口縫部に白テラ記号
11	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	23.0	23.3		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±6度/a), なで		直形	新羅割合5%	良好	青褐色	口縫部に白テラ記号
12	唐 2 (第1層)	円筒埴輪	24.5	28.2		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±5度/a), なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	口縫部に白テラ記号
13	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	8.3	14.6		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±8度/a), なで		口縁部は斜方角(左・右)のハケ(±5度/a), なで		直字形	新羅割合5%	良好	青褐色	口縫部に白テラ記号
14	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	6.6	14.7		なで, 底端面なで		底端面は斜方角(左・右)のハケ(±6度/a), なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	
15	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	5.3	14.2		なで, 底端面未調整		底端面は斜方角(左・右)のハケ(±7度/a), なで		直形	新羅割合20%	良好	青褐色	
16	第2層 第2層	円筒埴輪	11.0	17.8		なで, 底端面なで		底端面は斜方角(左・右)のハケ(±6度/a), なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	
17	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	5.9	13.3		なで, 底端面未調整		底端面は斜方角(左・右)のハケ(±5度/a), なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	
18	唐 1 (第1層)	円筒埴輪	7.3	20.6		なで, 底端面未調整		底端面は斜方角(左・右)のハケ(±9度/a), なで		直形	新羅割合20%	良好	青褐色	
19	第2層 第2層	円筒埴輪 (鉛灰)	46.9			口縁部は不定方向のハケ(±7度/a), なで		口縁部は履方角(左・右)のハケ(±4度/a), なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	
20	唐 2 (第1層)	形埴輪 (動物)				主翼部分はハケ(±8度/a), 背はなで		主翼部分はハケ(±8度/a), 背は不定方向のハケ(±4度/a), なで		直形	新羅割合5%	良好	青褐色	車の部品と記号
21	唐 1 (第1層)	形埴輪 (動物)				なで		なで, ハケ(±12度/cm)		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	
22	唐 1 (第1層)	形埴輪 (動物)				なで		なで, ハケ(±12度/cm)		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	凶の人物の衣装の背中模様
23	第2層 (鉛灰)	形埴輪				なで		なで, ハケ(±6度/cm)		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	衣装?
24	第2層	形埴輪				なで, ハケ(±8度/cm)		なで, ハケ(±8度/cm)		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	みずら?
25	地盤	形埴輪 (動物)				なで		なで		直形	新羅割合5%	良好	青褐色	廻底付背
26	第2層 (第1層)	小形形象				なで		なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	
27		形埴輪 (動物)				なで		なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	頭巾
28	唐 1 (第1層)	形埴輪 (動物)				なで		なで		直形	新羅割合5%	良好	青褐色	頭巾
29	唐 1 (第1層)	形埴輪 (動物)				なで		なで?		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	草履
30	第2層 (第1層)	形埴輪 (動物)				なで		なで, ハケ(±10度/cm)		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	首
31	唐 1 (第1層)	形埴輪 (動物)	20.5	12.3		なで		ハケ(±10度/cm)		直形	新羅割合5%	良好	青褐色	?
32	唐 1 (第1層)	形埴輪 (動物?)				なで		なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	馬の足?
33	唐 2 (第1層)	形埴輪 (動物)	7.2	8.7		なで		なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	馬の足
34		形埴輪 (動物)				なで		なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	?
35		形埴輪 (動物)				なで		なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	?
36		形埴輪 (動物)				なで		なで		直形	新羅割合15%	良好	青褐色	?
37		形埴輪 (動物)				なで		なで		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	?
38	唐 2 (第1層)	形埴輪 (動物)	13.5			なで		口縁部は横方向のハケ(±9度/cm)		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	?
39	唐 2 (第1層)	形埴輪 (動物)	13.2			なで		口縁部は履方角と横方向のハケ(±9度/cm)		直形	新羅割合10%	良好	青褐色	?
40	唐 2 (第2層)	形埴輪 (動物)	17.9	36.3	16.6	なで		口縁部は履方角と横方向のハケ(±9度/cm)		三角形	新羅割合10%	良好	青褐色	?

表27 喜志遺跡出土埴輪觀察表

IV. 中野遺跡

中野遺跡は、市域の中央部に位置し、市内を南北に抜ける東高野街道の東西、中野町から若松町にかけて広がっている。その範囲は、東西約1.1km、南北約0.9kmと広範囲にわたり、石川西岸の中位段丘上に立地している。

本遺跡では1970年代後半から宅地開発が急増し、今回調査地の周辺北西側では、1979年から1982年に行われた分譲住宅建設に伴う調査で弥生時代中期の堅穴住居址群や甕棺墓、6世紀中頃から7世紀中頃の掘立柱建物群などの遺構が検出されている(註1)。また、北側では、1987年から1989年に行われた都市計画道路建設に先立つ調査で弥生時代の井戸や古墳時代の溝とともに、奈良時代から中世にかけて寺院があつたと推測できる塔心礎や礎石と多量の瓦が検出されている。

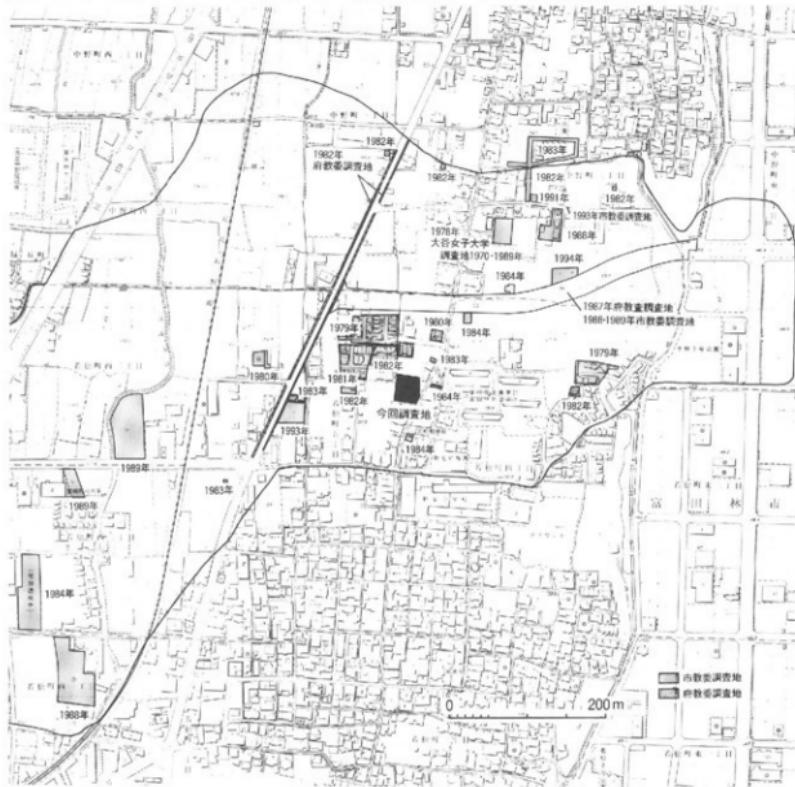


図56 中野遺跡発掘調査地位置図



図57 中野遺跡発掘調査区位置図

N N94-1

調査地：富田林市若松町5丁目629-1他

調査面積：47.1m² / 1160m²

調査地は、遺跡の中央部にあって、東高野街道の西側に隣接している。現況は、水田である。今回は、共同住宅建設に先立ち地下埋設管の敷設部分の発掘調査を実施した。なお、調査区は、F字状の地下埋設管部分をA～Cの地区に分割し調査を行った。

1. 層序

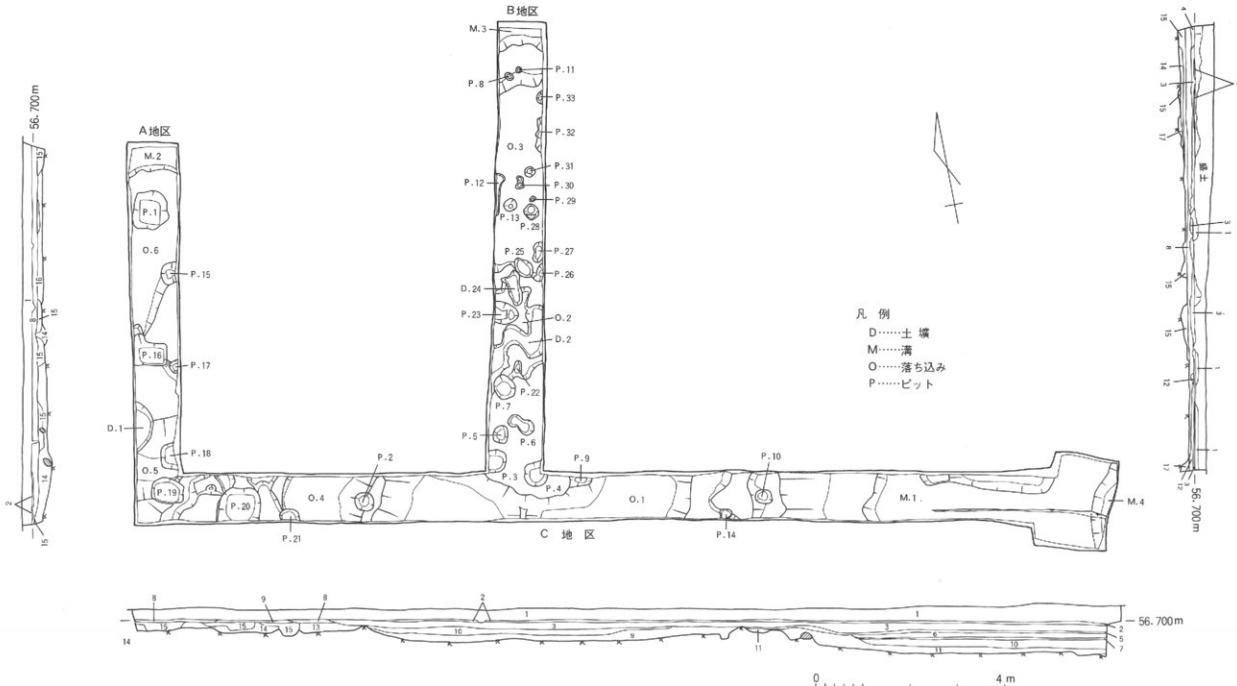
調査区の地形は、東側を北流する石川に向かって緩やかに傾斜しているため、調査区の東側(C地区)では6層、西側(A地区)では2層の堆積が確認できる。全域に、第1層(耕土・約4～36cm)、所々に第2層(床土・約4cm)が堆積している。東側(C地区)では、第3層(濁灰褐色土・約2～16cm)、第4層(濁灰黄色土・約4cm)、第5層(灰褐色土・約14cm)第6層(灰黄色土・約4cm)が堆積している。C地区西側では第3層の直下に第6層よりも古いと考えられる堆積、第7層(暗褐色灰色粘質土・約6cm、あるいは黃灰色粘質土が混じる灰褐色粘質土・約16cm)が堆積している。調査区北側(B地区)では、第3層(濁灰褐色土が約2～8cm、北側では暗褐色粘質土が混じる濁灰褐色土・約8cm)下に、第7層(暗褐色灰色粘質土・約2～12cm)が南に薄く北に厚く堆積している。さらに調査区の北西側(A地区)では第1層(耕土)直下に第7層(暗褐色灰色粘質土・約12～18cm)が堆積している。第7層からは弥生時代から奈良時代の遺物が、第5・6層からは弥生時代から中世の遺物が、第3・4層からは弥生時代から近世の遺物が出土している。

2. 遺構

溝4条、落ち込み6カ所、土壤2カ所、ピット33カ所検出した。以下、各遺構毎に記述し、ピットについては表28にまとめた。

溝1

C地区東半部で検出した南北方向の溝である。西側の肩部長さ約0.96m、幅約7.83m分を検出した。深さは約0.49～0.72mを測り、比高差は約0.25mあり北流する。埋土は第1層が灰褐色弱粘質土、第2層が灰色砂礫が混じる暗灰色粘質土、第3層が暗灰色粘質土である。各層に大きな時期差はなく、遺物は弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・土師質土器・瓦質土器・陶器・石器・瓦などが出土している。



- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 細土 | 10. 灰褐色弱粘質土に礫が混じる |
| 2. 床土 | 11. 暗灰色粘質土に灰色砂礫が混じる |
| 3. 濡灰褐色土 | 12. 暗灰褐色弱粘質土に礫が混じる |
| 4. 濡灰褐色土に暗褐色灰質土が混じる | 13. 黄褐色粘質土に暗褐色灰質土が混じる |
| 5. 濡灰褐色土 | 14. 暗褐色粘質土に黄褐色粘質土が混じる |
| 6. 灰褐色土 | 15. 暗褐色粘質土 |
| 7. 灰黄色土 | 16. 黄褐色粘質土に暗褐色粘質土が混じる |
| 8. 暗褐色灰質土 | 17. 暗褐色粘質土に褐色土が混じる |
| 9. 灰褐色粘質土に黄褐色灰質土が混じる | |

図58 造橋平面図・断面図

溝2

A地区北端で検出した東西方向の溝である。南側の肩部長さ約1.4m、幅約0.62m分を検出した。深さは約0.11mを測り、比高差は約0.04mあり東流する。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は土師器が出土している。

溝3

B地区北端で検出した東西方向の溝である。南側の肩部長さ約0.9m、幅約0.5m分を検出した。深さは約0.1mを測り、比高差は約0.09mあり東流する。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は検出されなかった。

溝4

溝1の底東端部で検出した南北方向の溝である。西側の肩部長さ約1.86m、幅約0.42m分を検出した。深さは約0.18mを測り、比高差は約0.09mあり北流する。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器が出土している。

落ち込み1

C地区中央部で検出した。南北方向は調査区外に広がるため正確な規模は不明である。南北方向は幅約1m分を検出し、東西方向は約7.8mを測る不整形な形状を呈し、深さは約0.13m～0.22mを測る。北側肩部をピット9に切られている。また、東側の底でピット14を検出した。埋土は第1層が灰褐色弱粘質土、第2層は礫が混じる暗灰褐色弱粘質土である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・瓦・サスカイトなどが出土している。

落ち込み2

B地区中央部で検出した。東西方向は調査区外に広がるため正確な規模は不明である。南北方向は幅約2.32mを測り不整形な形状を呈する。深さは約0.05mを測る。遺構の底でさらに土壠2・ピット22～24を検出した。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は土師器・サスカイトが出土している。

落ち込み3

B地区北半部で検出した。東西方向は調査区外に広がり、北側は溝3に切られているため正確な規模は不明である。南側の肩部長さ約1.2m、幅約5.4m分を検出した。深さは約0.24mを測る。遺構の上層からピット8・11～13が切り込んでいる。また、底でピット25～33を検出した。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・円筒埴輪・砾石・サスカイトなどが出土している。

落ち込み4

C地区西側で検出した。南北方向は調査区外に広がり、西側はピット21に切られているため正確な規模は不明である。東西方向は幅約0.94m、南北方向は幅約1.9mを検出した。深さは約0.12mを測る。埋土は褐色土が混じる黄褐色粘質土である。遺物は検出されなかった。

落ち込み 5

A 地区南半部から C 地区西端で検出した。四方が調査区外に広がるため正確な規模は不明である。東西方向は幅約3.1m、南北方向には約4.2m分検出した。深さは約0.08~0.3mを測る。遺構の上層から土壌 1・ピット16~21が切り込んでいる。埋土は黄褐色粘質土が混じる暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器・サヌカイトが出土している。

落ち込み 6

A 地区北半部で検出した。東西方向は調査区外に広がり、北側は溝 2 に切られている。南東側で肩を検出しているが、落ち込み 5・ピット15に切られていて正確な規模は不明である。南東肩は長さ1.4m、幅は約3.4m分を検出した。深さは約0.13mを測る。遺構の上層からピット 1 にも切り込まれている。埋土は暗褐色粘質土と礫が混じる黄褐色粘質土である。遺物は石器が出土している。

土壌 1

A 地区南側で検出し、落ち込み 5 を切り込んでいる。西側は調査区外に広がるため正確な規模は不明である。南北方向は約 1 m、東西方向は約 0.38 m を測る不整形な形状を呈している。深さは約 0.09 m を測る。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は検出されなかった。

ピット番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	出土遺物
1	不整形	0.82×0.78	0.22	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
2	扇丸形	0.38×0.4	0.21	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	弥生土器・サヌカイト
3	不整形	0.48×(0.36)	0.09	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
4	不整形	(0.51)×(0.5)	0.14	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
5	不整形	0.39×0.33	0.49	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
6	不整形	0.32×0.58	0.1	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
7	不整形	0.5×0.42	0.28	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	弥生土器・土師器
8	稍円形	0.16×0.2	0.1	暗灰褐色粘質土に褐色土と礫片が混じる	
9	不整形	(0.24)×(0.46)	0.07	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
10	不整形	0.3×0.34	0.08	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
11	円形	0.14×0.12	0.09	灰褐色土	
12	不整形	(0.9)×(0.18)	0.03	灰褐色弱粘質土	弥生土器・土師器
13	円形	0.28×0.26	0.14	灰褐色弱粘質土	弥生土器・土師器・須恵器・サヌカイト
14	不整形	(0.2)×0.24	0.2	灰褐色弱粘質土	弥生土器
15	不整形	0.48×(0.28)	0.22	暗褐色粘質土	弥生土器・土師器・サヌカイト
16	不整形	0.66×0.7	0.15	暗褐色粘質土	弥生土器・土師器・須恵器
17	不整形	(0.3)×(0.18)	0.14	暗褐色粘質土	弥生土器
18	不整形	(0.54)×(0.36)	0.14	暗褐色粘質土	須恵器
19	扇丸形	0.5×0.66	0.14	暗褐色粘質土	弥生土器・土師器
20	不整形	(0.68)×0.88	0.14	礫片を多く含む暗褐色粘質土	弥生土器・サヌカイト・輪玉
21	不整形	(0.23)×(0.4)	0.15	礫片を含む暗褐色粘質土	弥生土器
22	不整形	0.32×0.2	0.07	暗褐色粘質土に礫が混じる	
23	不整形	0.46×(0.5)	0.15	暗褐色粘質土に礫が混じる	
24	不整形	0.74×0.4	0.09	暗褐色粘質土に礫が混じる	
25	不整形	0.5×0.33	0.16	黑褐色粘質土	
26	不整形	(0.37)×(0.16)	0.11	暗褐色粘質土	
27	不整形	0.44×(0.2)	0.11	暗褐色粘質土	
28	不整形	0.32×0.32	0.1	黑褐色粘質土	
29	不整形	0.1×0.14	0.05	暗褐色粘質土	
30	不整形	0.28×0.16	0.12	暗褐色粘質土	
31	円形	0.22×0.24	0.2	暗褐色粘質土	
32	不整形	(0.74)×(0.12)	0.08	暗褐色粘質土に褐色土が混じる	
33	不整形	(0.3)×(0.14)	0.06	暗褐色粘質土	

表28 中野遺跡ピット一覧表

土壤2

B地区中央落ち込み2の底で検出した。東西方向は調査区外に広がるため正確な規模は不明である。南北方向は1mを測り、東西方向は約1.2m分を検出した。深さは約0.12mを測る。埋土は礫が混じる暗褐色粘質土である。遺物は検出されなかった。

ピット

ピットは全体で33ヵ所検出し、そのうち遺構の底から見つかったものは13ヵ所あった。今回の調査は幅約1m足らずのトレンチ調査であったため建物の復元等はできなかった。各々ピットの状況については表28を参照されたい。

3. 出土遺物

今回は地下埋設管の敷設部分の調査ということで出土遺物は、コンテナパット3箱と少ない。出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・統一新羅系土器・土師質土器・瓦質土器・陶器・石器・瓦・サヌカイトなどがある。以下、遺構・包含層・側溝の順に出土遺物を概観する。なお、図化した遺物については、観察表(表29・30)にて記述する。

溝1出土遺物(図59・60)

弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・土師質土器・瓦質土器・陶器・瓦・サヌカイトが出土している。

弥生土器は、細片で器種の分かるものはない。細片の中には外面に斜線文が施されるものがある。土師器には、奈良時代の土釜で生駒西薫産のものが1点、中世の小皿(10)が1点ある。

須恵器は、細片で器種の分かるものはない。

韓式系土器は、繩文のあるもの(23)が1点ある。

土師質土器には、摺鉢2点、羽釜3点、甕2点ある。摺鉢はどちらも焼成不良のため土師質を呈しているが、瓦質の河内・和泉型摺鉢と同形態である(註2)。口縁部が直線的に開くタイプA(13)とわずかに内灣して直立するタイプBがある。羽釜は焼成不良のため土師質としているが瓦質の河内D₁タイプと同形態の(17)が1点ある。他は鈎部のみで形態は不明である。甕は口縁部が玉縁状を呈するタイプAと巻き込むタイプBがある。体部外面は平行たたき調整が施されている。

瓦質土器には、火鉢1点、摺鉢3点、羽釜10点、甕1点ある。火鉢は(22)1点ある。摺鉢は河内・和泉型の15世紀代ものである。口縁部の形態は土師質の摺鉢と同様にタイプA(14)2点とタイプBが1点ある。羽釜は河内D₁タイプ3点(18~20)と河内D₂タイプ2点ある。河内D₂の口縁部は段のあるものとないものがある。甕はAタイプのものがある。

陶器は常滑焼の底部が2点ある。上げ底で外底面に離れ砂の付着するタイプ(15)と突出するタイプがある。

瓦は、丸瓦片と平瓦片がある。丸瓦は瓦質のものが2点、平瓦は須恵質のもの1点、瓦質のもの2点ある。平瓦は凸面に離れ砂が付着している。

サヌカイトは、凸刃削器(29)1点、石刃状剥片1点、剥片2点、細部調整剥片2点がある(註3)。

溝2出土遺物

土師器が出土している。細片のため器種が分かるものはない。

溝4出土遺物

弥生土器が出土している。細片のため器種は不明で、いずれも生駒西麓産の胎土である。

落ち込み1出土遺物(図56)

弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・瓦・サスカイトが出土している。

弥生土器は、器種の分かるものが底部2点、脚部1点ある。底部は平底である。脚部外面には凹線文が2条巡る。細片には生駒西麓産の胎土のものが1点ある。

土師器は、杯が1点、舌状の把手が1点ある。

須恵器は、細片のため器種が分かるものはない。

土師質土器は、Aタイプの甕(11・12)が1点ある。

瓦質土器には、摺鉢が1点、羽釜が3点ある。摺鉢はAタイプである。羽釜は口縁片と鍔部があるが、形態は不明である。

陶器は細片が1点ある。

瓦は、巴文軒丸瓦が1点、丸瓦が1点、平瓦が6点ある。巴文軒丸瓦は、煤がべつとりと付着している。丸瓦は土師質で玉縁部分が出土している。平瓦は土師質が2点、須恵質が2点、瓦質が2点ある。いずれのタイプも凸面なで調整と繩目たたき調整があり、離れ砂が付着している。

サスカイトは、石核が2点、剥片が4点、細部調整剥片が1点ある。

落ち込み2出土遺物

土師器・サスカイトが出土している。土師器は細片が1点ある。サスカイトは、横形剥片が1点ある。

落ち込み3出土遺物(図56・57)

弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・サスカイト・砥石が出土している。

弥生土器は、広口壺が3点、高杯が2点、鉢1点、甕1点、脚部1点、底部1点がある。広口壺は、口縁部が下外方に拡張するタイプAが1点、上下に大きく拡張するタイプBが1点、上下にわずかに拡張し、口縁部外面が無紋のタイプCが1点ある。タイプBは、生駒西麓産の胎土のものである。高杯は、口縁部が直口のタイプAが1点、水平口縁をもち口縁部内面に一条の凸帯を巡らすタイプBが1点ある。タイプAは、生駒西麓産の胎土のものである。鉢は、生駒西麓産の胎土で口縁部が段状を呈するタイプBがある。甕は、口縁部が上方にわずかにつまみ上げるように拡張するタイプAがある。脚部は外面に凹線文を2条巡らすものがある。底部は平底の(3)がある。

土師器は、皿が3点、瓶1点ある。皿は口縁端部が巻き込むタイプAが2点と丸くおさまるタイプBが1点ある。

須恵器は、杯蓋が1点、脚台1点ある。杯蓋は、口縁端部はわずかに段をなし、天井部と口縁部の境の稜は消滅している。陶邑編年のII型式4段階に比定することができる(註4)。脚台は(9)がある。

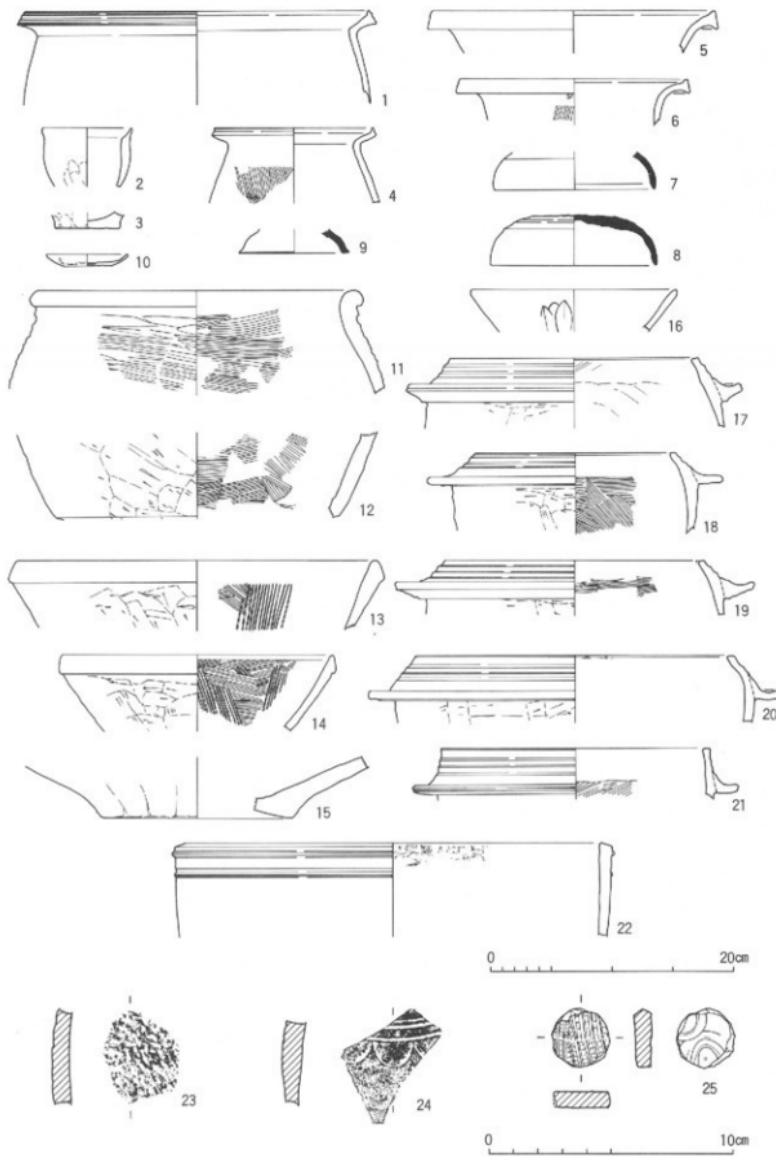


図59 出土土器

埴輪は、タテハケ一次調整のみの円筒埴輪が1点ある。

サヌカイトは、横形剥片が2点、剥片が1点、細部調整剥片が1点ある。

砥石(30)が1点ある。両端面を除く4面全面を使用し、材質は凝灰質砂岩の可能性が高い(註5)。

落ち込み5出土遺物(図56)

弥生土器・サヌカイトが出土している。

弥生土器には、口縁部が上下に拡張するタイプBの甕(1)が1点ある。細片には煤の付着するものや生駒西麓産の胎土のものがある。

サヌカイトは、石核が1点、剥片が1点ある。

落ち込み6出土遺物(図57)

サヌカイトが出土している。サヌカイトは直刃削器(28)が1点ある。

ピット2出土遺物

弥生土器・サヌカイトが出土している。弥生土器は細片のため器種が分かるものはない。サヌカイトは横形剥片が2点ある。

ピット7出土遺物

弥生土器・土師器が出土している。いずれも細片のため器種が分かるものはない。

ピット12出土遺物

弥生土器・土師器が出土している。いずれも細片のため器種が分かるものはない。

ピット13出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・サヌカイトが出土している。弥生土器・土師器・須恵器は細片のため器種が分かるものはない。サヌカイトは横形剥片が1点ある。

ピット14出土遺物

弥生土器の甕が出土している。甕は口縁部が拡張しないタイプCが1点ある。

ピット15出土遺物

弥生土器・土師器・サヌカイトが出土している。

弥生土器には甕が1点ある。甕は口縁部が欠損し、体部外面を平行たたき調整をなで消している。外面には煤が付着している。

土師器は細片のため器種が分かるものはない。

サヌカイトは剥片が1点ある。

ピット16出土遺物

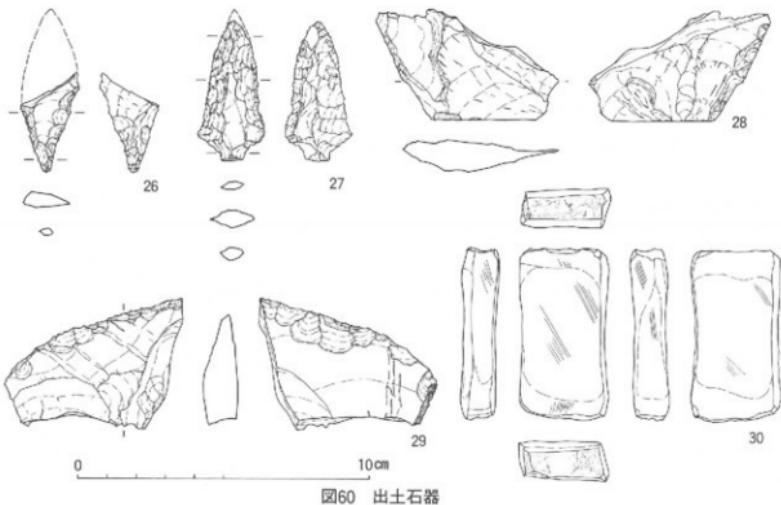


図60 出土石器

弥生土器・土師器・須恵器が出土している。

弥生土器には、広口壺がある。広口壺はタイプAが2点ある。1点はよこなで調整の後、口縁部外面と頸部外面に簾状文を施している。他の1点はよこなで調整の後、口縁部外面に簾状文、内面に円形浮文を2段、頸部外面に縦線文を施し、胎土は生駒西麓産のものである。

土師器は細片のため器種が分かるものはない。

須恵器には、杯蓋が1点あり、口縁端部は内傾する面をもち、天井部と口縁部の境の稜は消滅している。陶邑編年のII型式4段階に比定することができる。

ピット17出土遺物(図56)

弥生土器の鉢が1点と細片が出土している。鉢は口縁部が直口のタイプA(2)である。細片は生駒西麓産の胎土のものが1点ある。

ピット18出土遺物

須恵器が出土しているが、細片であるため器種の分かるものはない。

ピット19出土遺物

弥生土器・土師器が出土している。いずれも細片であるため器種の分かるものはない。

ピット20出土遺物(図56)

弥生土器・サスカイト・焼土塊が出土している。

弥生土器は、鉢が1点、甕が1点ある。鉢はタイプA、甕はタイプA(4)がある。細片には生駒西麓産の胎土のものが9点ある。また、細片には直線文・簾状文などが施されている。

サスカイトは、横形剥片が3点、細部調整剥片が1点ある。

ピット21出土遺物

弥生土器の鉢と細片がある。鉢はタイプBが1点ある。口縁部内外面よこなで、体部内面横方向のへらみがき調整が施され、口縁部外面・体部外面に列点文が施文されている。

第7層出土遺物(図56・57)

弥生土器・土師器・須恵器・統一新羅系土器・埴輪・サヌカイトが出土している。

弥生土器は、広口壺・高杯・鉢・蓋・器台・甕・底部がある。広口壺はタイプC(5・6)が3点、口縁部が拡張しないタイプDが1点、口縁部が上方にわずかに下方に大きく拡張するタイプEが1点ある。タイプEの口縁部外面には波状文が施されている。高杯は、タイプAが1点、タイプBが2点ある。タイプAは、口縁部外面に沈線が1条巡る。タイプBは、いずれも口縁部内面の凸帯部分が出土し、生駒西麓産の胎土のものが1点ある。鉢は、体部片が1点あり、外面に棒状浮文が貼り付けられている。蓋は、天井部分1点と口縁部分1点ある。口縁部は上方にわずかに拡張し、円孔が穿たれている。器台は脚部が1点ある。脚部外面には四線文が5条巡り、円孔が穿たれている。甕は、タイプAが1点、タイプBが2点、タイプCが2点ある。生駒西麓産の胎土のものがタイプB・Cに各々1点ずつある。底部は平底のものが2点、上げ底のものが1点、不明が1点ある。細片には生駒西麓産の胎土のものが28点ある。文様構成は直線文・簾状文のみのもの、直線文と波状文・簾状文と列点文の組合わせたものがある。

土師器は皿・高杯・鉢・土釜・甕・把手が出土している。皿はタイプBが2点ある。高杯は脚柱部が3点ある。鉢は、口縁端部が内傾する凹面をもつタイプのものが1点ある。土釜は生駒西麓産の胎土のもので、口縁部が1点、鋤部が1点ある。甕が5点ある。把手は舌状の把手が1点ある。

須恵器は蓋杯・壺・脚がある。蓋杯には、杯蓋が古墳時代のもの(7・8)が2点、奈良時代の平らな天井部に屈曲して垂下するタイプが1点、古墳時代の杯身が3点ある。壺は短頸壺の口縁部が2点ある。細片にはへら記号のあるものが2点ある。

統一新羅系土器は壺の体部片(24)が1点ある。

埴輪は円筒埴輪が1点ある。円帯が偏半な台形を呈し、タテハケ一次調整のみのものである。

サヌカイトは、石鎚(26・27)が2点、石核が1点、横形剥片が10点、剥片が9点、細部調整剥片が1点ある。

第5・6層出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・陶器・瓦・サヌカイトが出土している。

弥生土器・土師器は細片のため器種は不明である。

須恵器は蓋杯・底部がある。古墳時代の杯蓋が1点、杯身が1点ある。底部は貼り付け高台の着くものが1点ある。

土師質土器は羽釜・摺鉢・甕がある。羽釜は河内D₂タイプが1点、鋤部片が2点ある。摺鉢はタイプAが1点ある。甕はタイプAが1点、底部が4点ある。

須恵質土器は細片のため器種の分かることはない。

瓦質土器は羽釜・摺鉢・甕がある。羽釜は河内D₁タイプが2点ある。摺鉢は河内・和泉型のタ

イブAが1点ある。甕はタイプAが1点ある。

陶器は備前焼の壺の口縁部が1点ある。

瓦は平瓦がある。平瓦は土師質が5点、須恵質が1点、瓦質が1点ある。土師質と須恵質のものには凸面を縄目たたき調整するものが各々1点ある。

サヌカイトは、横形剥片が2点、剥片が2点、細部調整剥片が3点ある。

第3・4層出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・製塙土器・瓦・サヌカイト・砥石がある。

弥生土器は広口壺が1点、甕が1点ある。広口壺はタイプC、甕はタイプAがある。細片には生駒西麓産の胎土のものが2点ある。

土師器は皿・高杯・甕がある。皿はタイプAが1点、タイプBが4点ある。高杯の脚が1点、甕が1点ある。

須恵器は杯身・壺・脚がある。杯身は底部に高台のつくタイプ、短頭壺、脚がそれぞれ1点ある。

瓦器・瓦質土器・陶器はいずれも細片で器種の分かるものはない。

磁器は伊万里焼の碗が1点ある。外面に呉須で施文されている。

製塙土器は紀淡海峡産の口縁部片が1点ある。

瓦は軒丸瓦・平瓦がある。軒丸瓦は巴文軒丸瓦が1点ある。平瓦は土師質のものが2点、瓦質のものが2点ある。土師質には凸面縄目たたきのものが1点ある。

サヌカイトは、石核が1点、横形剥片が5点、剥片が3点、細部調整剥片が1点ある。

砥石は1点ある。両端を欠失し、4面全面を使用している。材質は凝灰質砂岩の可能性が高い。

第1層出土遺物

弥生土器・須恵器・土師質土器・瓦・サヌカイト・焼土塊がある。

弥生土器は広口壺・甕・脚部・底部がある。広口壺はタイプEが1点ある。口縁部内面に列点文、頸部外面に直線文が3条施されている。甕はタイプCが1点、口縁部が「く」の字に屈曲し下方に大きく拡張するタイプEが1点ある。タイプEは生駒西麓産の胎土のものである。脚部が生駒西麓産のものが1点ある。底部は平底が1点、上げ底が2点ある。

須恵器は古墳時代の杯身が1点、奈良時代のものが1点ある。

土師質土器は細片で器種は不明である。

瓦は銀化している平瓦が2点ある。

サヌカイトは、横形剥片が2点、細部調整剥片が1点ある。

側溝出土遺物(図56)

弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・陶器・青磁・瓦・サヌカイト・石皿・焼土塊が出土している。

弥生土器は広口壺・甕がある。広口壺はタイプAが1点、タイプCが2点ある。タイプAは口縁部外面に刺突文が施されている。タイプCは紐孔のあるものが1点ある。甕はタイプAが1点ある。

土師器は杯・鉢・土釜・甕がある。杯はタイプAが1点ある。鉢は口縁端部が内傾する面をもつタイプが1点ある。土釜は生駒西麓産の胎土の鉢部片が1点ある。甕は4点ある。

須恵器は蓋杯・甕・土製円盤・脚部がある。蓋杯は古墳時代の杯蓋が1点、奈良時代が1点、杯身は古墳時代のものが1点ある。甕は1点ある。土製円盤(25)は甕の体部片を転用したもので1点ある。脚部は1点ある。

土師質土器は摺鉢・羽釜が出土している。摺鉢は片口部分が1点、羽釜は河内D₂タイプが1点ある。

須恵質土器は東播系のこね鉢が1点ある。

瓦質土器は羽釜・摺鉢が出土している。羽釜は河内D₂(21)が2点、摺鉢は河内・和泉型のタイプAが1点ある。

陶器は細片のため器種の分かることはない。

青磁は、龍泉窯系の碗(16)が1点ある。

瓦は、平瓦が2点ある。1点は須恵質で凸面に繩目たたきが施され、他の1点は瓦質で凸面に離れ砂が付着している。

サヌカイトは、石核が1点、横形剥片が6点、剥片が2点、細部調整剥片が2点ある。

石皿は1点ある。和泉砂岩製で、163×(142.5)×42.7mmを測り、周縁部には煤が付着している。

4.まとめ

今回は、共同住宅建設に伴う地下埋設管の敷設部分の調査で、幅約1mのトレンチ調査であったため、遺構の性格等は検討できなかった。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・統一新羅系土器・土師質土器・瓦質土器・陶器・石器・瓦などがある。弥生土器は、既往の調査で出土しているものと変わらず、弥生時代中期(第Ⅲ様式～第Ⅳ様式)に比定できるものである。中世の遺物には、15世紀代の羽釜・摺鉢・青磁・瓦などがあるが、これらの遺物の中には、調査地の北側の調査で出土したものと同様に煤の付着する瓦が含まれている。この他、統一新羅系土器が1点、包含層(第7層)から出土しているが、このことは調査地の周辺で検出された飛鳥時代以降の掘立柱建物群・奈良時代から中世に至る寺院跡などの遺構との関連を示唆させる。

(山川友美)

(註)

1. 中辻貢・忍基(1982)「又 まとめ」『中野電線発掘調査概要図』富田林市教育委員会

2. 中美土器の器種分類:名稱については次の菅原正明氏の論文によった。

菅原正明(1989)「西日本における瓦質生産の展開」『国立歴史民族博物館研究報告』第19集

3. 剥片分類については山中一郎氏の定義に従った。

山中一郎(1978)「4森の宮造跡出土の石器について」『森の宮造跡 第3・4次発掘調査報告書』暮波宮山遺跡会 124～147

4. 小村浩(1978)『陶器図』大阪府教育委員会第30輯 大阪府教育委員会

5. 石材の種類は大阪府立富田林高等学校の森山武博氏に判定していただいた。

番号	器種	遺跡・部位	法 長(cm)				横 幅				寸 法		紋様	鉛 子	備考
			口径	脚内	脚外	脚径	肉厚	脚厚	内	外	内	外			
1	壺B	落ち込み3	26.5	7.7	-	-	-	-	口縁部外側:四瓣式	内:浅黄色 外:灰白色	瓶	發生土器			
2	錐A	ピット7	7.3	4.9	-	-	-	-	口縁部外側:よこなで 底部外側:なごみに一部斜面	内:褐色 外:褐色	やや良	發生土器			
3	瓶C	落ち込み3	-	6.1	1.5	-	-	-	-	内:灰白色 外:褐色	瓶	發生土器			
4	壺A	ピット20	13.0	6.5	-	-	-	-	口縁部:よこなで 底部外側:網毛目(鉢方向)	内:灰褐色 外:灰褐色	やや良	底部外側:網毛目 發生土器			
5	底付C	第7層	23.1	3.5	-	-	-	-	-	内:灰褐色 外:灰褐色	やや良	發生土器			
6	広口壺C	第7層	18.6	3.8	-	-	-	-	口縁部外側:よこなで 底部外側:網毛目をよこなで溝で文様化	内:灰褐色 外:褐色	瓶	網毛外側:算付 發生土器			
7	杯C	第7層	13.2	3.1	-	-	-	-	口縁部外側:網毛目 底部外側:網毛目(左回り)	内:灰白色 外:灰白色	碗	II型C段腰 網毛部			
8	杯C	第7層	12.6	4.1	-	-	-	-	口縁部:網毛なで 天井部外側:網毛なで後一定方 向のなで	内:明石灰色 外:青灰色	碗	II型C段腰 網毛部			
9	圓盤	落ち込み3	-	2.0	-	8.9	-	-	内外面:網毛なで	内:青灰色 外:青灰色	盤	無	無		
10	小皿	洗1	6.7	1.0	-	-	-	-	口縁部:よこなで 体部外側:網毛目後のなで 体部内側:網毛目	内:浅褐色 外:灰褐色	盘	無	無		
11	甕	落ち込み1	26.2	8.6	-	-	-	-	口縁部:よこなで 底部外側:平行たたき 底部内側:網毛目	内:赤褐色 外:灰白色	やや良	12と同 瓶 十脚質土器			
12	甕	落ち込み1	-	7.1	-	-	-	-	外側:へら割り(斜方目) 内側:網毛目を… 底部内側:消し	内:褐色 外:灰白色	やや良	上脚質土器 上脚質土器			
13	圓盤	洗1	29.4	5.8	-	-	-	-	体部外側:へら割り(斜方目) 体部内側:網毛目	内:灰褐色 外:灰白色	やや良	目付4本斜方内 和泉縣 五箇上原			
14	圓盤	洗1	22.2	6.3	-	-	-	-	口縁部:よこなで 体部外側:へら割り(斜方目) 体部内側:網毛目	内:黑色 外:黑色	やや良	目付6本斜方内 和泉縣 五箇上原			
15	瓶C	溝1	-	5.1	15.3	-	-	-	底部外側:よこなで	内:灰褐色 外:青色	瓶	外底無ハナレ付 素盞鳴			
16	甕	實溝	16.8	3.5	-	-	-	-	-	片切取りによる邊沿	内:明石灰色 外:明石灰色	甕	船形系の片切		
17	圓盤	溝1	20.5	5.8	-	-	27.7	-	口縁部外側:よこなで 底部内側:網毛目 底部外側:なごみで 体部外側:へら割り(斜方目) 底部内側:なごみで	内:灰褐色 外:灰褐色	瓶	河内D1 上脚質土器			
18	羽生	溝1	16.3	6.7	-	-	24.3	-	口縁部外側:よこなで 体部外側:へら割り(斜方目) 底部内側:網毛目	内:褐色 外:褐色	甕	河内D1 瓦質土器			
19	圓盤	溝1	21.3	4.5	-	-	29.5	-	口縁部外側:よこなで 底部内側:よこなで 体部内側:網毛目 底部内側:網毛目	内:灰白色 外:灰白色	やや良	河内D1 瓦質土器			
20	羽生	溝1	26.1	5.5	-	-	34.6	-	口縁部外側:よこなで 体部外側:へら割り(斜方目)	内:網毛目 外:灰褐色	やや良	河内D1 瓦質土器			
21	羽生	圓盤	22.2	4.2	-	-	26.9	-	口縁部外側:よこなで 底部外側:へら割り(斜方目) 底部内側:網毛目	内:網毛目 外:網毛目	やや良	河内D1 瓦質土器			
22	火鉢	溝1	34.3	7.7	-	-	31.0	-	口縁部外側:よこなで	内:網毛目 外:網毛目(2重)	甕	河内D1 瓦質土器			
23		溝1	-	4.3	-	-	-	-	内面:なごみ	内:灰褐色 外:淡褐色(1重)	やや良	動式系土器			
24	-	第7層	-	4.6	-	-	-	-	網毛なで	内:灰褐色 外:灰褐色	甕	動式系土器			
25	玉型円盤	葉模	-	-	-	-	-	-	外側:格子風平打たたき 内面:山形印打たたき	内:灰白色 外:明石灰色	甕	原器			
			57.9	31.0	13.6	-	-	-	-	-	-	-	-		

表29 中野遺跡出土土器観察表

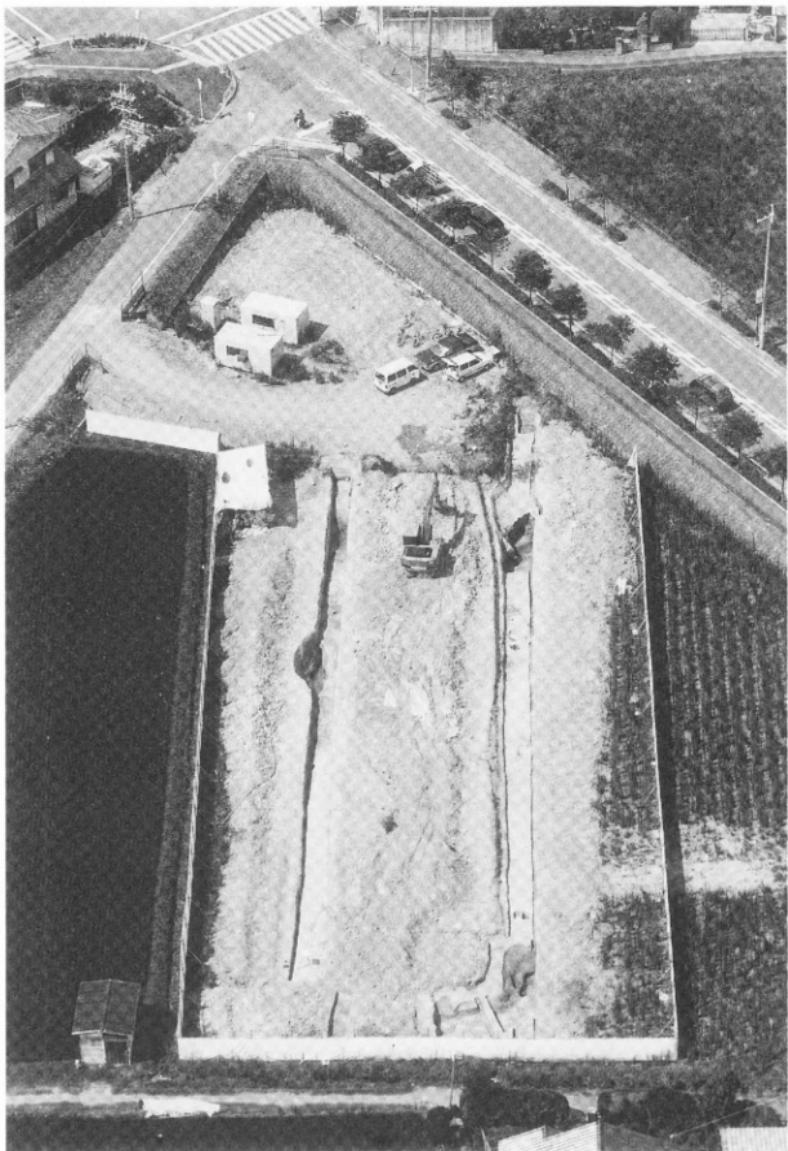
番号	器種	遺跡・部位	法 長(cm)				材質	表面の 形態	中 央 部 形	左 右 行 程	左 右 差 度	卓 面	調 査	發 現	備 考
			長さ	幅	高さ	厚さ									
26	石器	第7層	34.1	19.2	5.4	5.4	サクライド	楕円片	五角形	○	○	圓	圓	半椭圆面	凸基式 先端化粧
27	石器	第7層	47.4	22.5	6.1	6.1	サクライド	楕円片	五角形	○	○	圓	圓	半椭圆面	有底式 先端化粧
28	丸刀削器	落ち込み6	37.5	62.4	11.5	11.5	サクライド	楕円片の形	五角形	○	○	圓	圓	半椭圆面	フインバルア
29	丸刀削器	溝1	42.0	60.7	12.3	12.3	サクライド	-	五角形	○	○	左側面	圓	深溝面	動式系土器
30	砥石	落ち込み3	57.9	31.0	13.6	13.6	凝灰質砂岩?	-	-	-	-	-	-	-	兩面を削り用

表30 中野遺跡出土石器観察表

報告書抄録

ふりがな	へいせい 6ねんど とんだばやししないいせきぐんはっくつちょうさはうこくしょ						
書名	平成6年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書						
副書名	富田林市埋蔵文化財調査報告26						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著書名	中辻 亘・栗田 薫・田川友美						
編集機関	富田林市教育委員会						
所在地	大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721-24-1451						
発行年月日	西暦 1995年3月						
ふりがな 所収遺跡名		コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
えびたにいせき 毛人谷遺跡	おおさかふとんだばやし 大阪府富田林市		34°	135°	1994.7.11		共同住宅建設
	ことぶきちょうにちょうめ 寿町2丁目	27214	30'	35' ~ 53"	252.32	1994.8.5	
きのいせき 喜志遺跡	おおさかふとんだばやし 大阪府富田林市		34°	135°	1994.9.5		分譲住宅建設
	きどやまちょう 木戸山町	27214	31' 22"	36' ~ 54"	233.35	1994.10.8	
なかのいせき 中野遺跡	おおさかふとんだばやし 大阪府富田林市		34°	135°	1994.12.15		共同住宅建設
	わかまつちょうごちょうめ 若松町5丁目	27214	30' 24"	36' ~ 48"	47.1	1994.12.28	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
毛人谷遺跡	その他	縄文時代 古墳時代	河道	石器・土師器・須恵器			
喜志遺跡	その他	弥生時代 古墳時代 平安時代	溝 土壙	弥生土器・石器・埴輪 土師器	開析谷		
中野遺跡	集落遺跡	弥生時代~ 古墳時代	溝・落ち込み 土壙	弥生土器・サヌカイト 土師器・須恵器・石器			
	々	室町時代	溝・落ち込み ピット	土師質土器・瓦質土器			

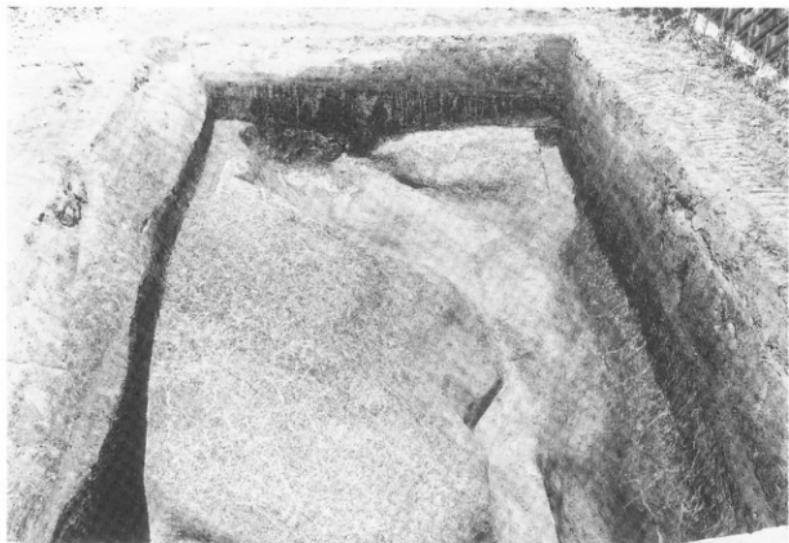
図 版



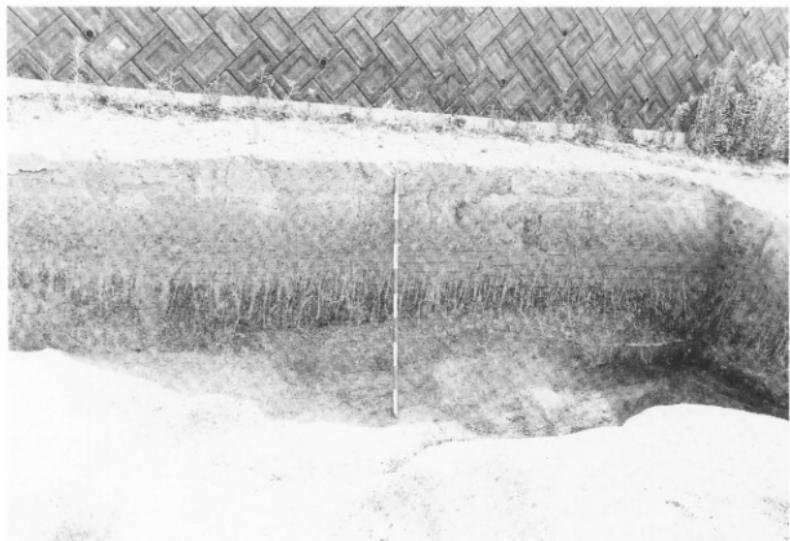
毛人谷遺跡（ET 94）調査地全景航空写真 南から



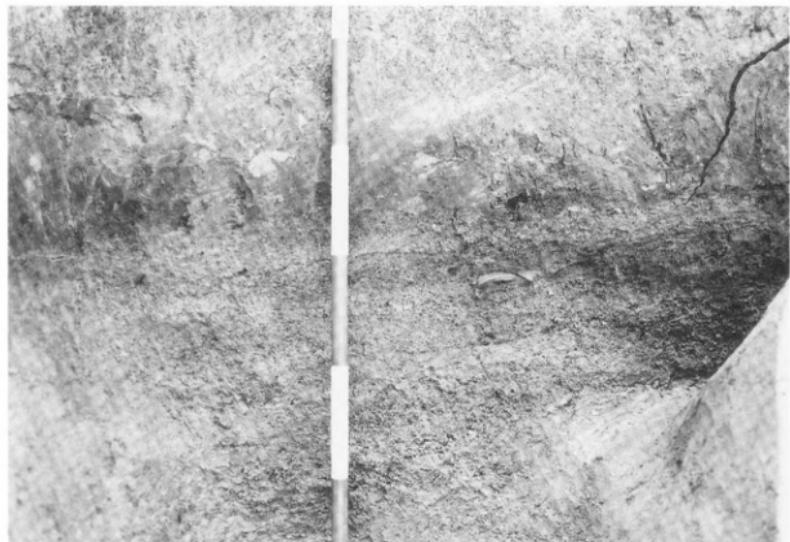
E T94 第1トレンチ全景 北東から



E T94 同上 東から



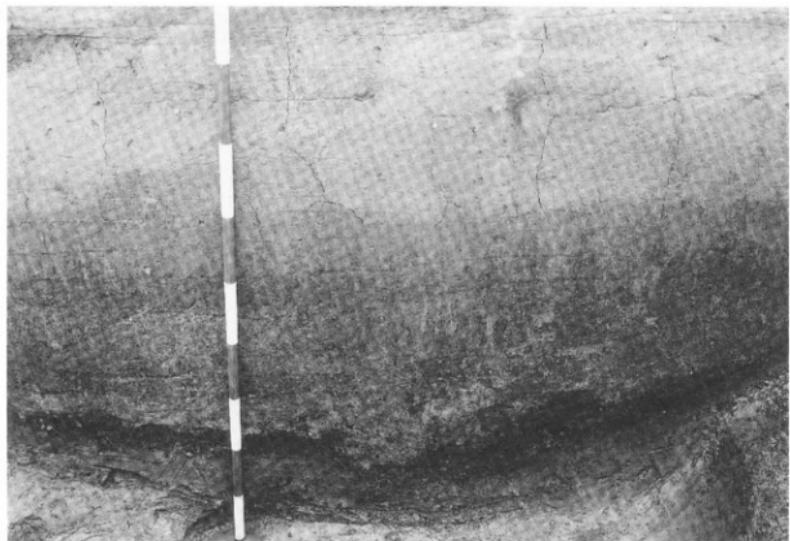
ET94 第1トレンチ北断面 南西から



ET94 第1トレンチ北断面遺物出土状況 南から



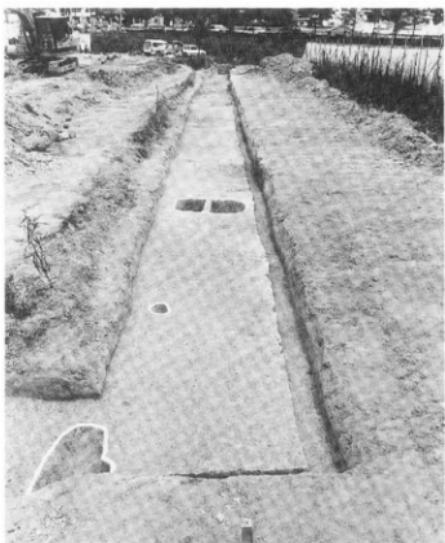
E T94 第2トレンチ全景 北から



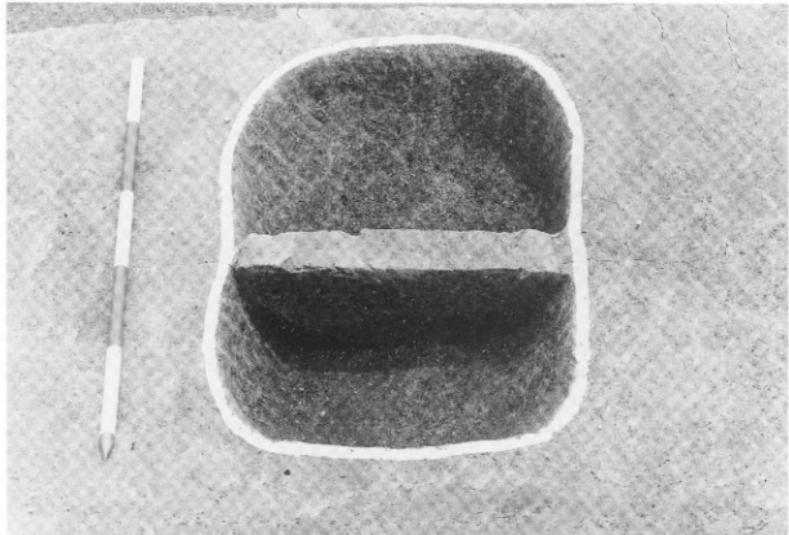
E T94 第2トレンチ河道2断面 東から



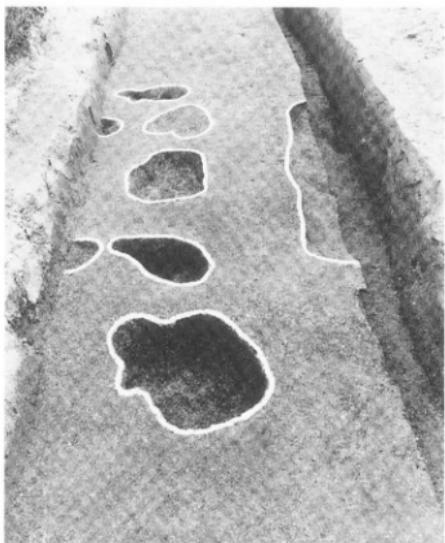
E T94 第3トレンチ全景 北から



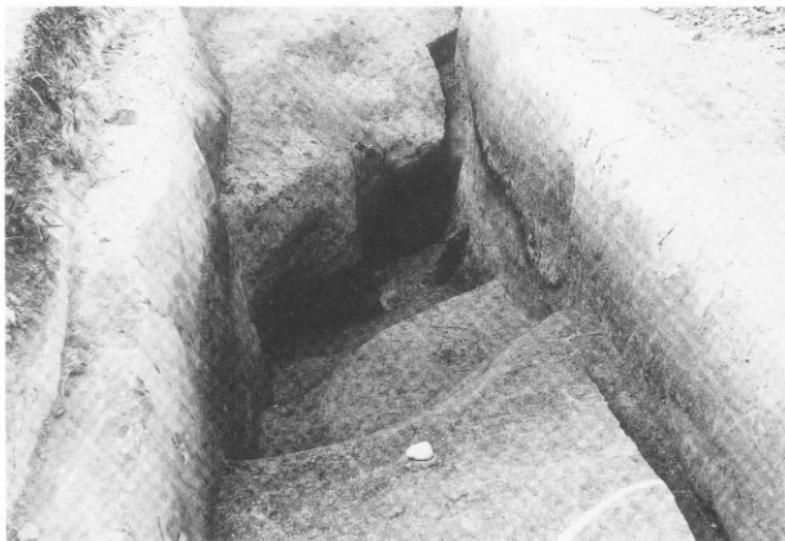
E T94 同上 南から



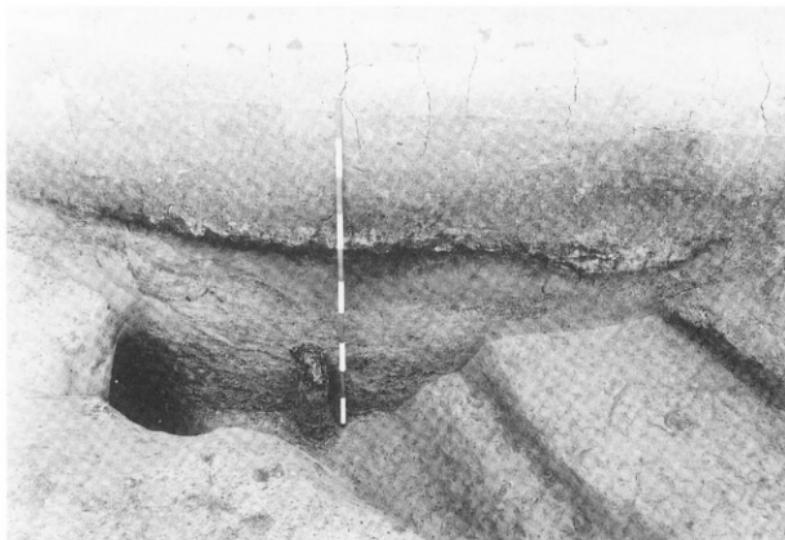
E T94 第3トレンチ土壤2全景 西から



E T94 第3トレンチビット群 南から



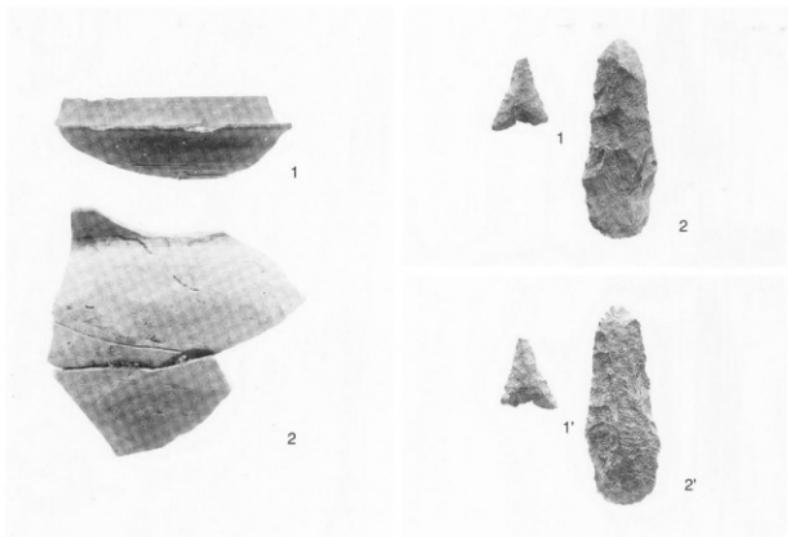
E T94 第3トレンチ河道2全景 南から



E T94 第3トレンチ河道2断面 西から



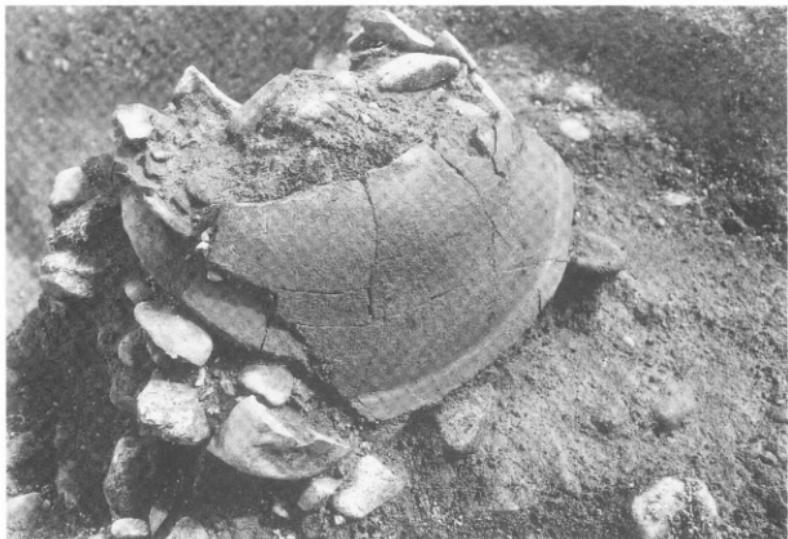
ET94 第3トレンチ下層流路断面 南西から



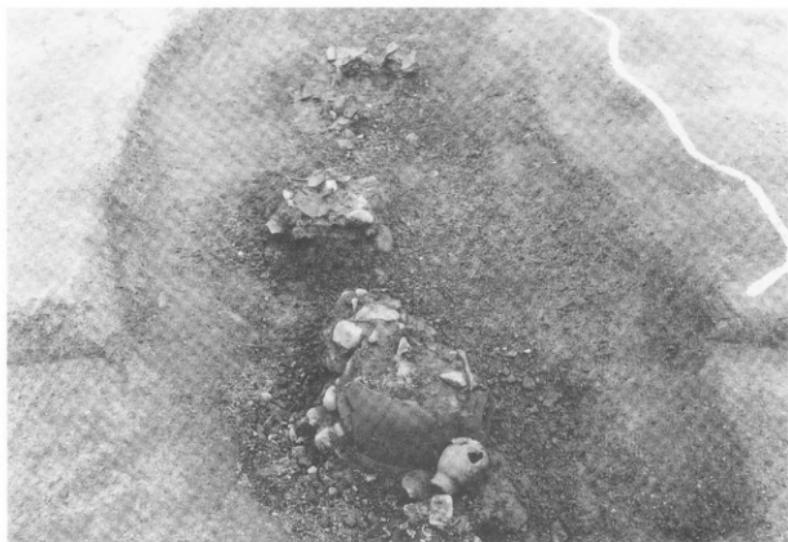
ET94 出土遺物



喜志遺跡（KS 94）調査地周辺航空写真 東から



K S94 満1 蓋形埴輪出土状況 北から



K S94 満1 墓輸出土状況 西から



K S94 溝1 遺物出土状況 西から



K S94 墓輸出土状況 東から



K S94 溝 1 人物埴輪出土状況 南から



K S94 同 上 北から



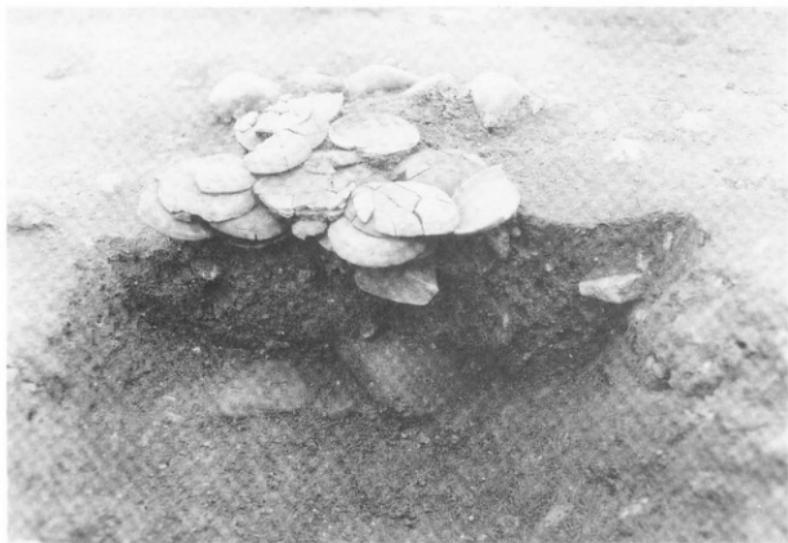
K S94 溝1断面 東から



K S94 溝1全景 東から



K S94 土壌1 土師器小皿出土状況 北から



K S94 土壌1断面 北から



KS94 溝2南北断面 北東から



KS94 溝2東西断面 北から



K S94 溝2南北トレンチ全景 南から



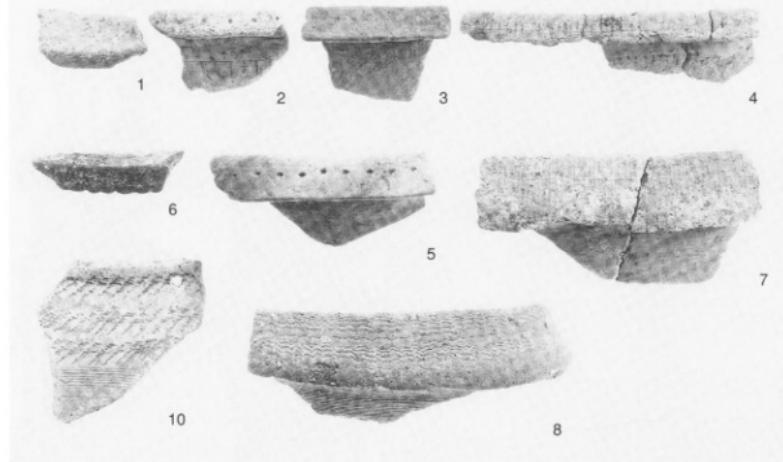
K S94 溝2東西トレンチ全景 西から



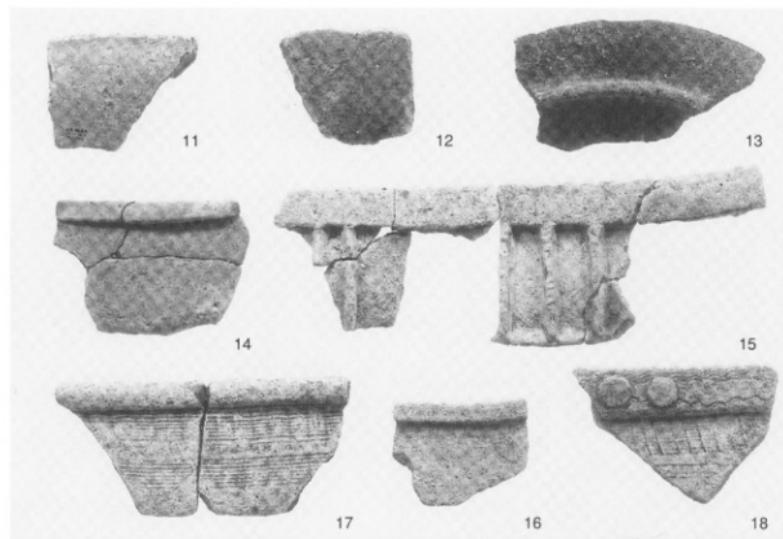
K S94 調査区全景 北から



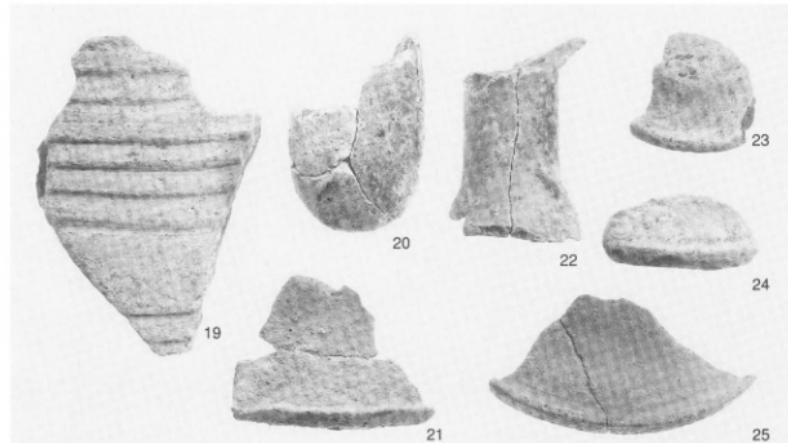
K S94 調査区南部全景 西から



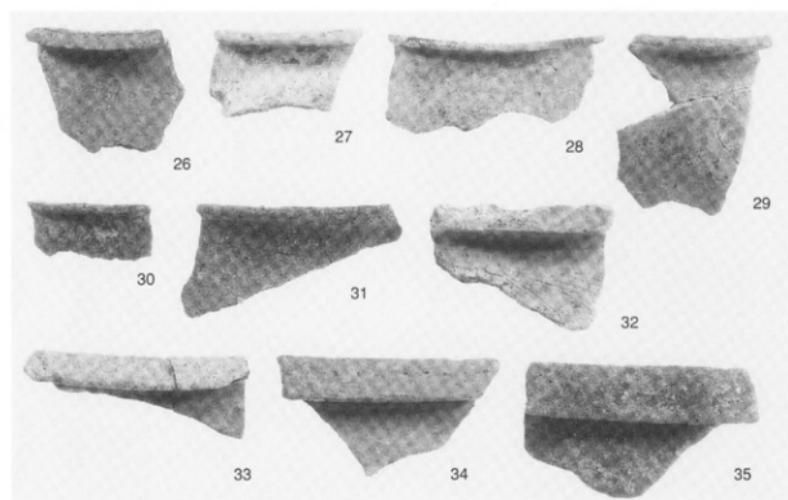
K S94 弥生土器（広口壺、無頭壺）



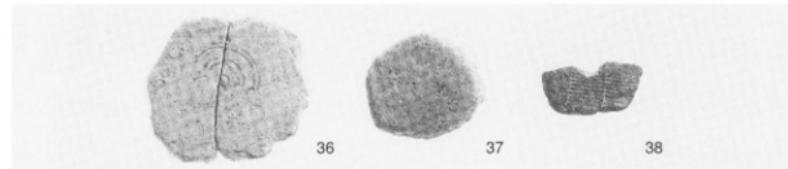
K S94 弥生土器（高杯、鉢）



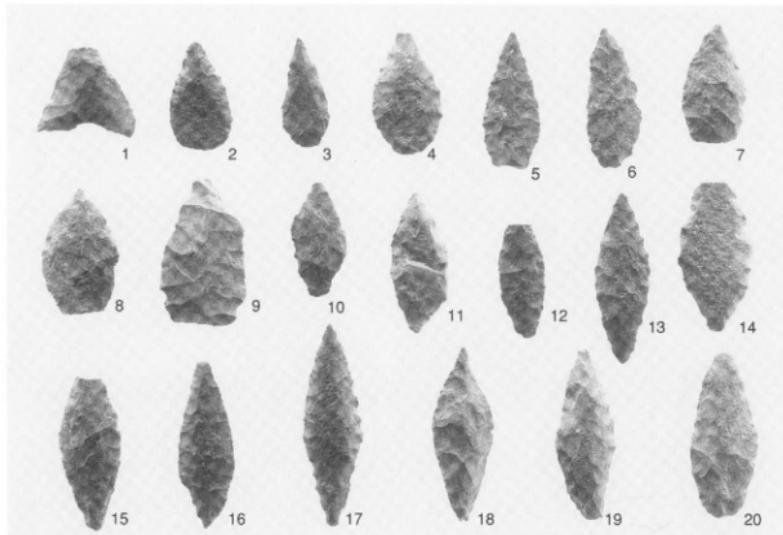
K S94 弥生土器（器台、鉢臺、台部）



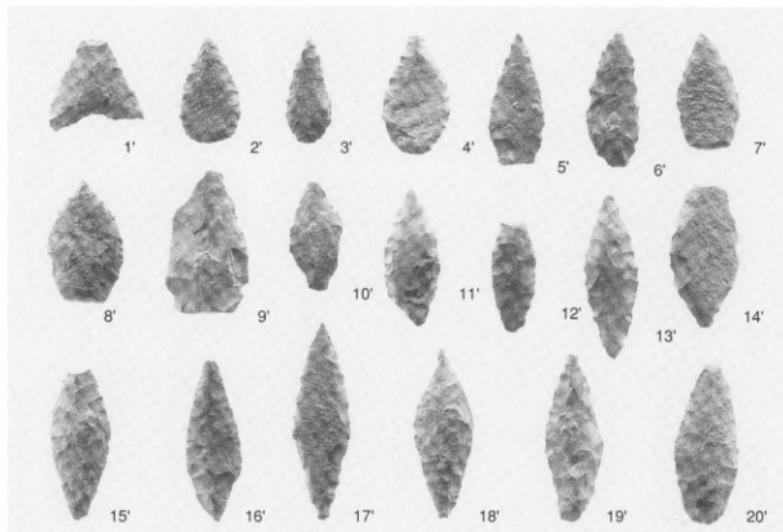
K S94 弥生土器（甕）



K S94 弥生土器（土製品）

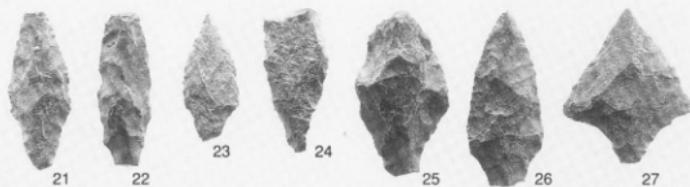


K S94 石鏃 (A面)

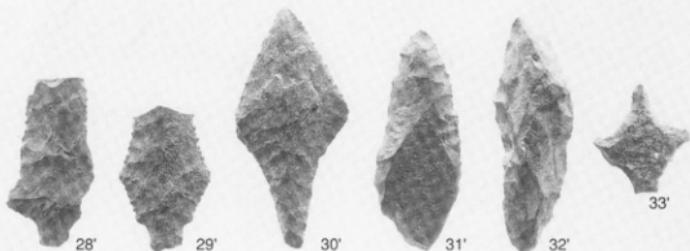
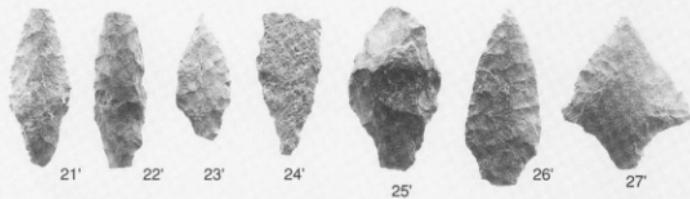


K S94 石鏃 (B面)

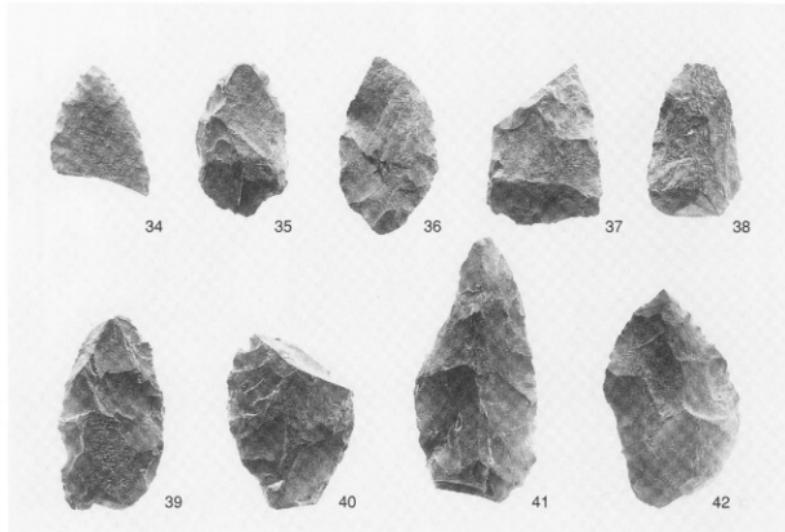
図版21



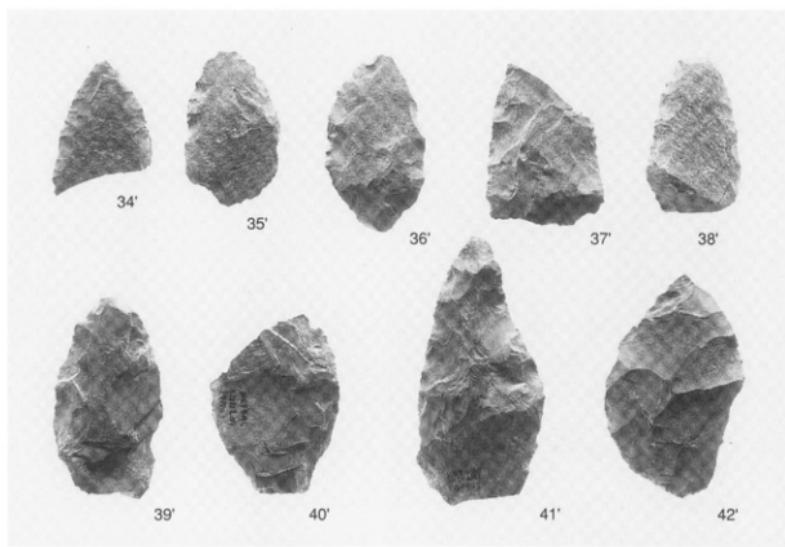
K S94 石器 (A面)



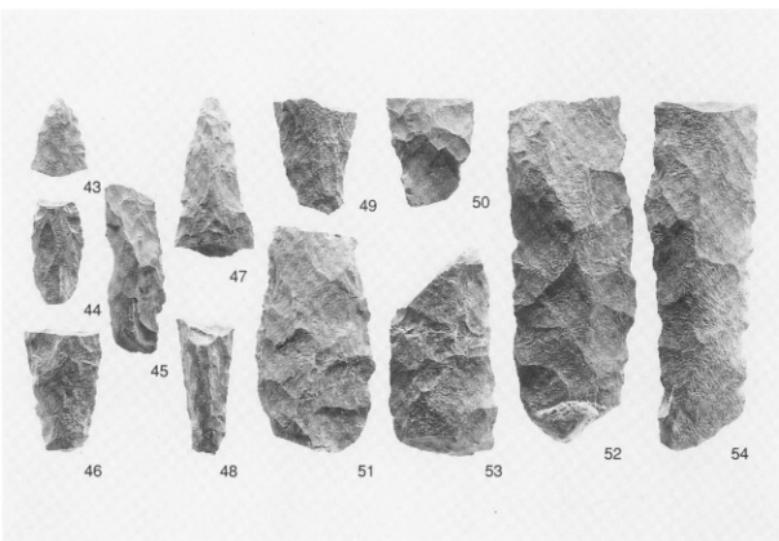
K S94 石器 (B面)



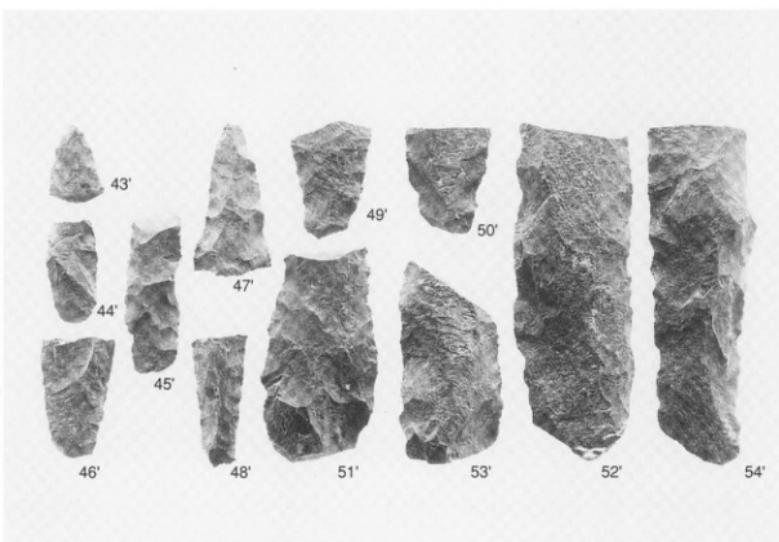
K S94 石槍 (A面)



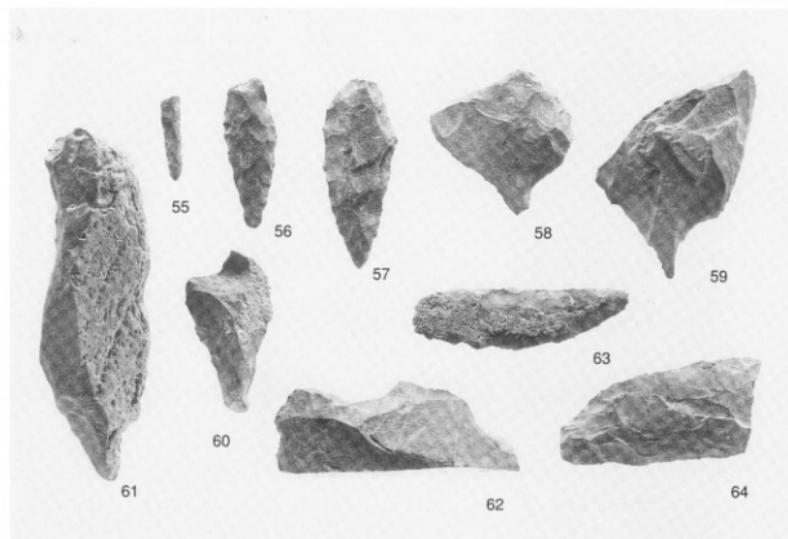
K S94 石槍 (B面)



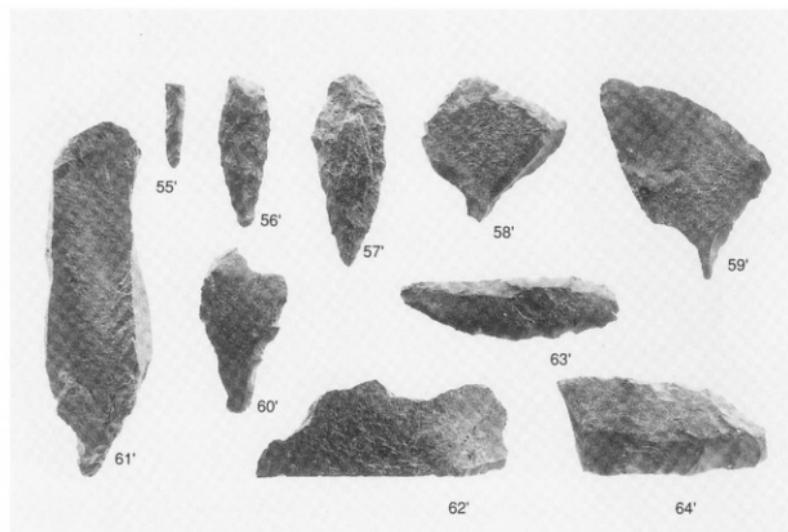
K S 94 打製石劍 (A面)



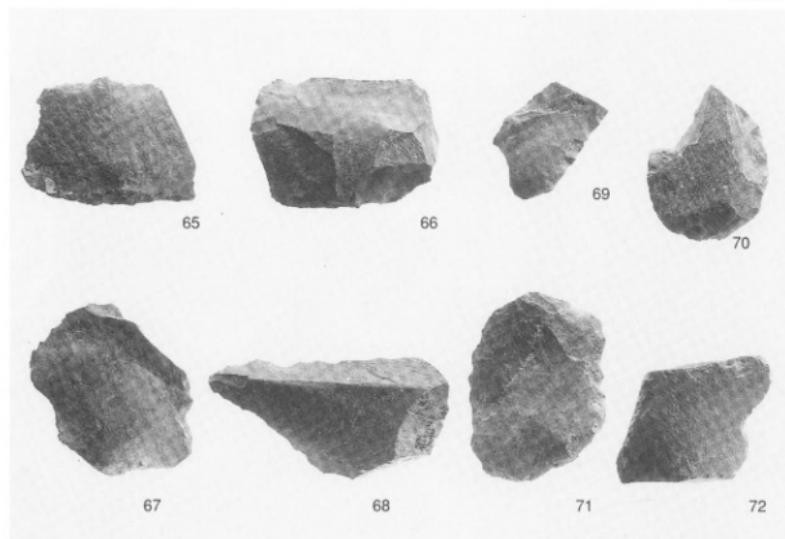
K S 94 打製石劍 (B面)



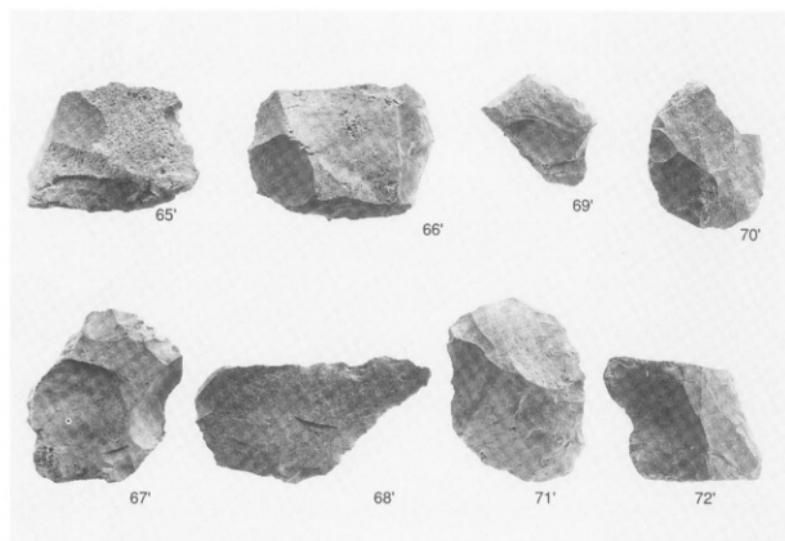
K S94 石錐, ベック, ノッチ削器, 石小刀 (A面)



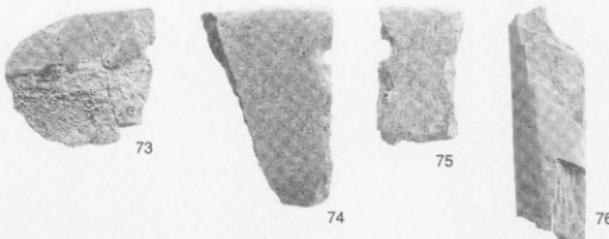
K S94 石錐, ベック, ノッチ削器, 石小刀 (B面)



KS94 削器、模 (A面)



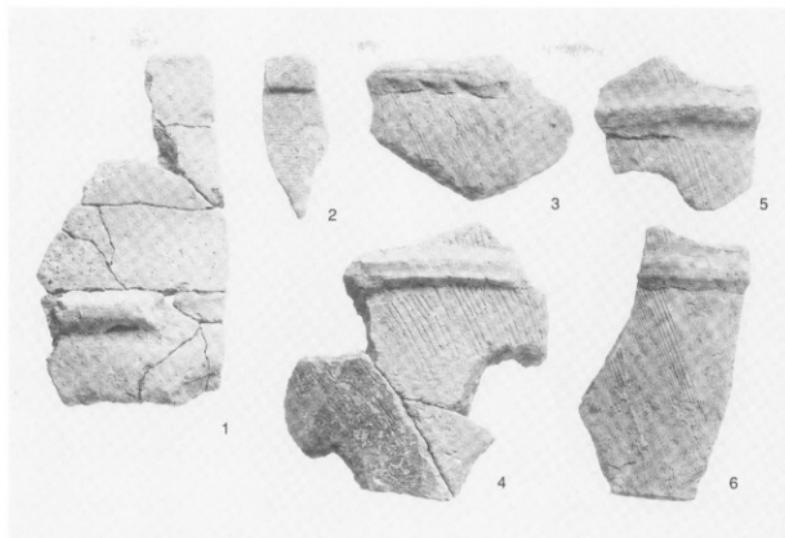
KS94 削器、模 (B面)



KS94 石包丁, 砥石 (A面)



KS94 石包丁, 砥石 (B面)



KS86 円筒埴輪



9



1



10

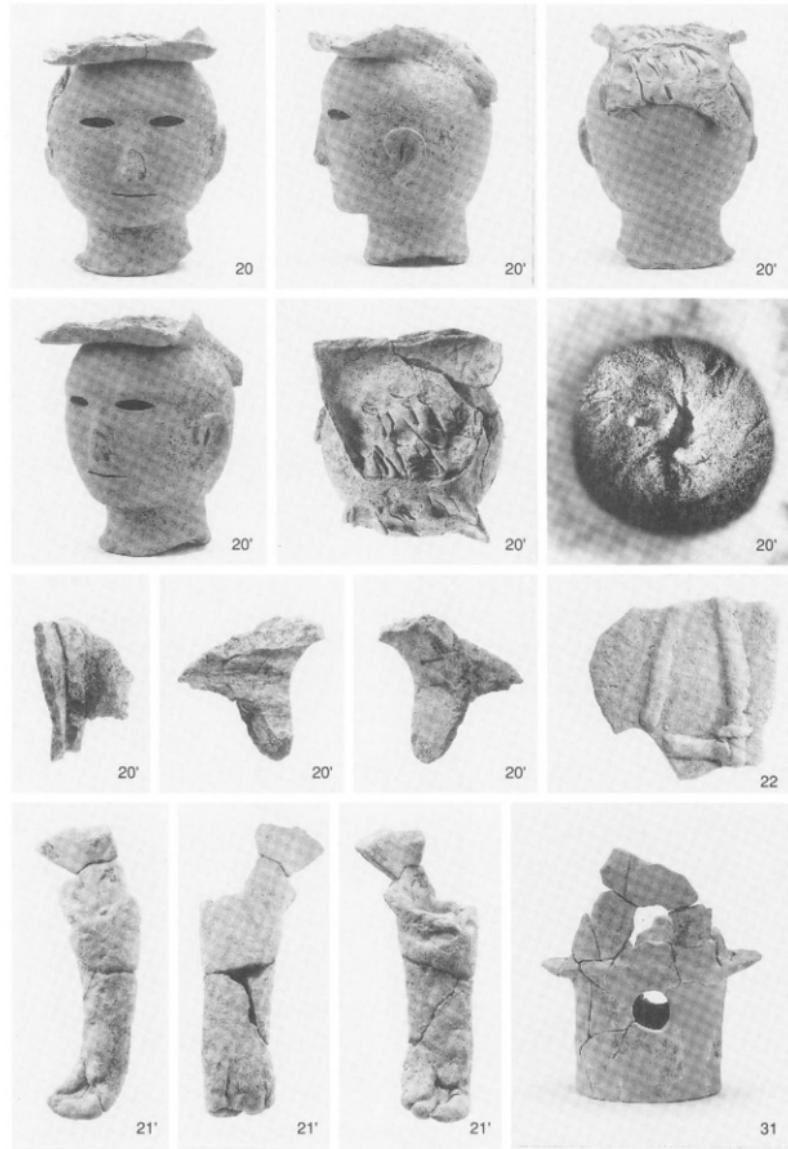


19

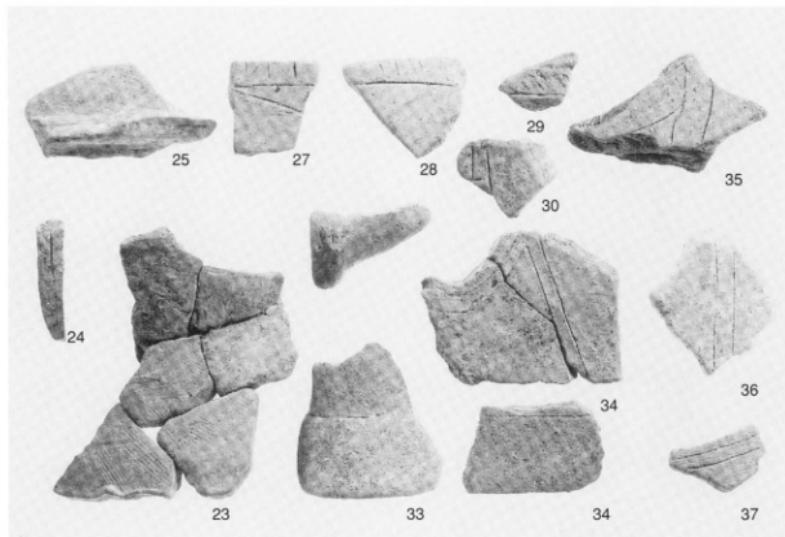


12

K S94 円筒埴輪、朝顔形埴輪



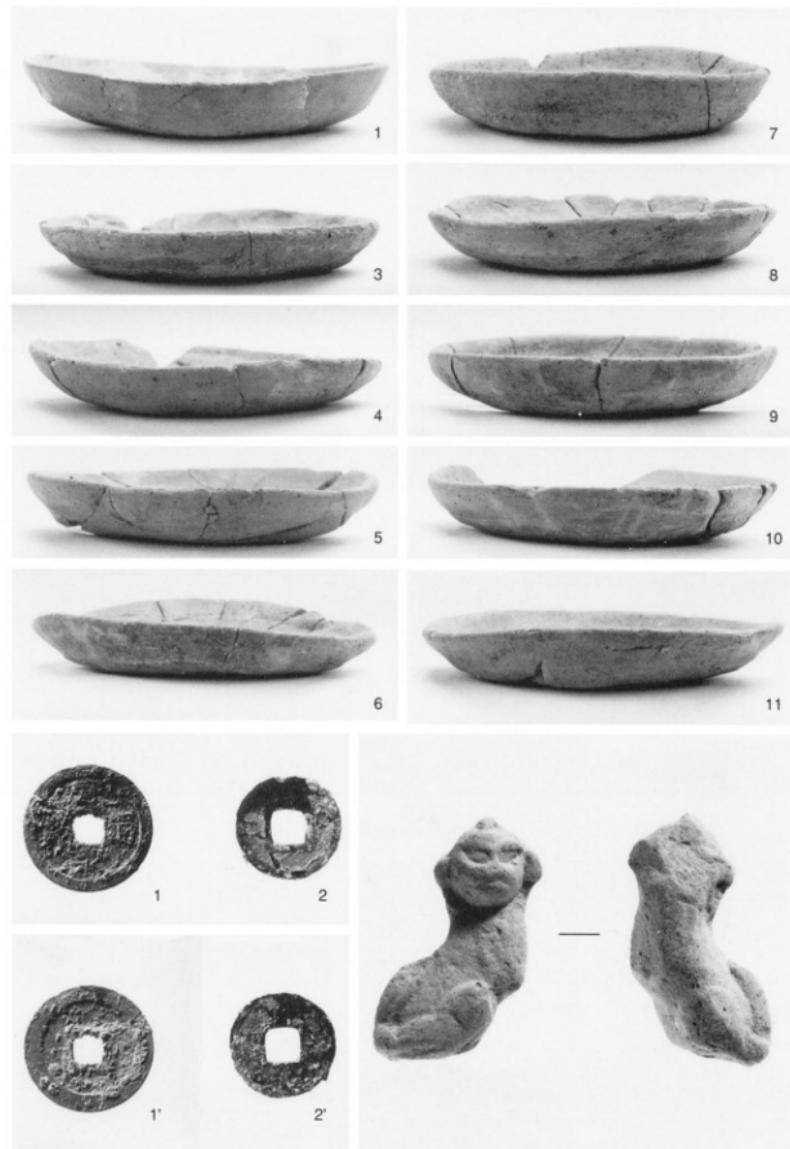
K S94 人物埴輪（頭部、肩部、手、衣装）、鳥形埴輪



K S94 形象埴輪（衣装、みずら、眉庇付冑、鞆、盾、馬、蓋）



K S94 蓋形埴輪



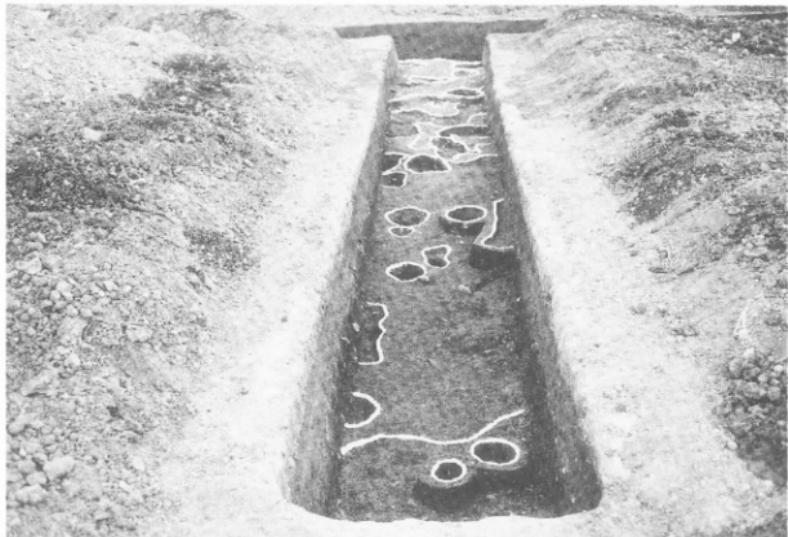
KS 94 土壙 1 出土土師器、銭貨、土人形



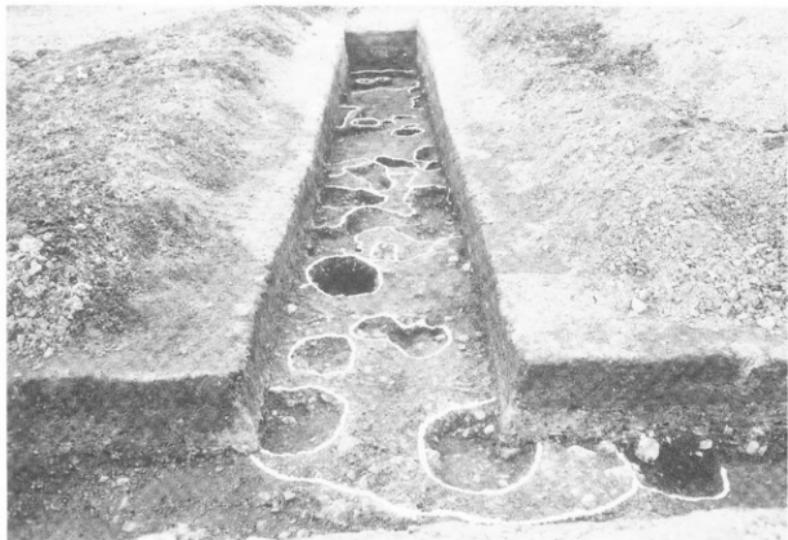
N N94-1 A地区全景 南西から



N N94-1 A地区全景 北東から



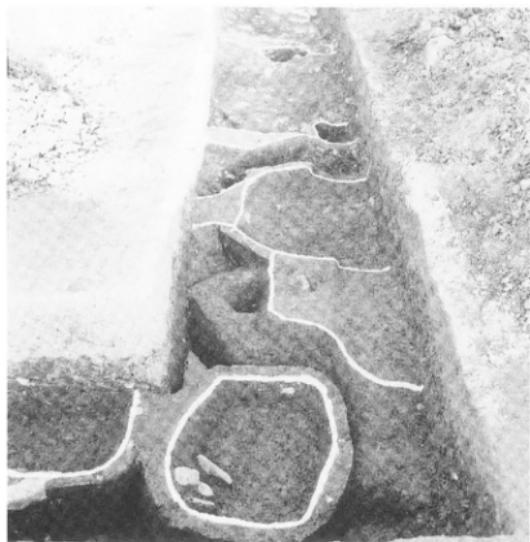
N N94-1 B地区北半全景 北から



N N94-1 B地区南半全景 南から



(上) N N94-1 C地区西半全景 北西から



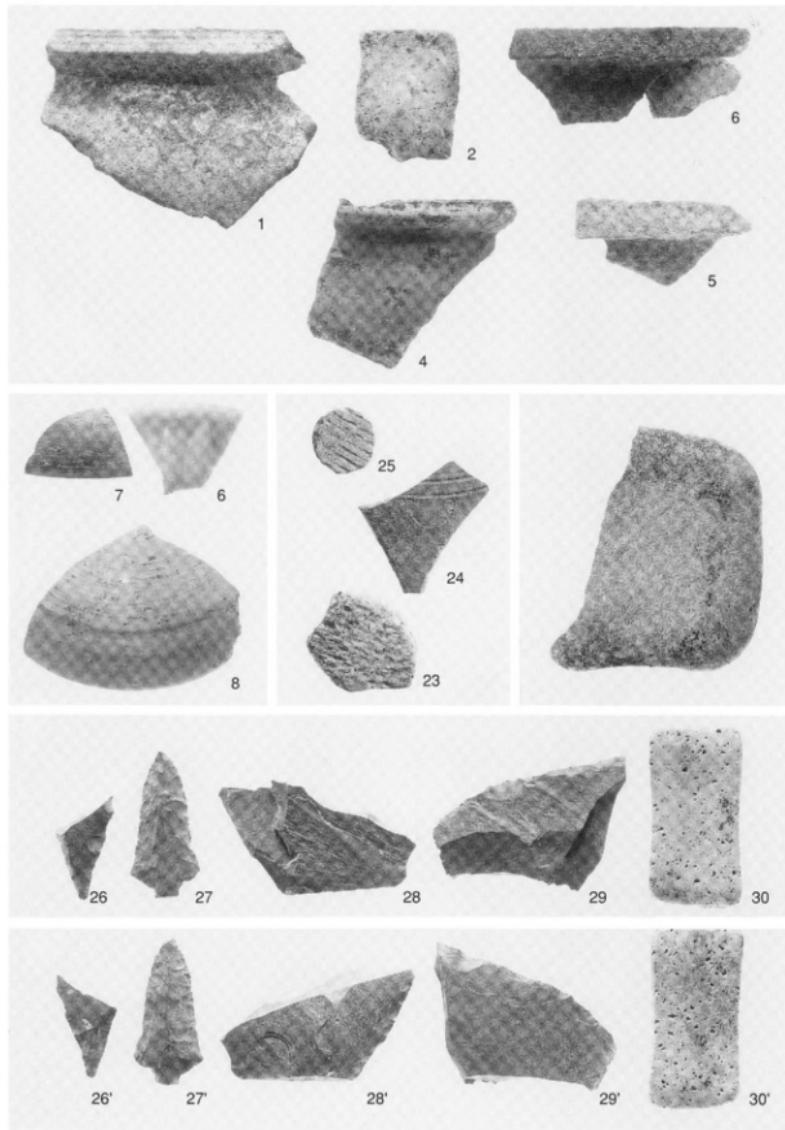
N N94-1 C地区東半全景 西から



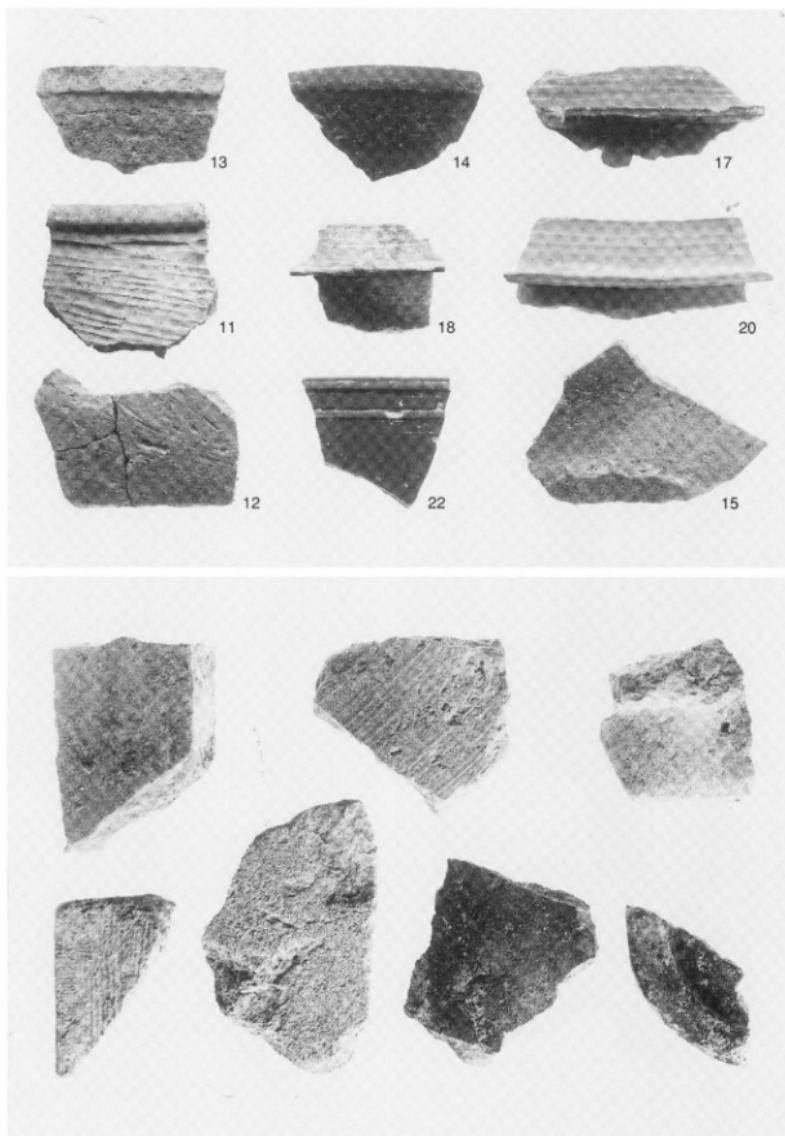
N N94-1 C地区東端溝4 南から



N N94-1 C地区東半南壁断面 北東から



N N94-1 出土遺物 (弥生土器, 須恵器, 青磁, 韓式系土器, 統一新羅系土器, 石皿, 石器, 砧石)



N N94-1 出土遺物（土師質土器、瓦質土器、陶器、瓦）

富田林市埋蔵文化財調査報告26

発行年月日 1995年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

